



心理療法作用としての経験の構成モデル：その射 程と可能性

著者	小松 貴弘
発行年	2020-09-18
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416乙第521号
URL	http://doi.org/10.32286/00024707

2020年9月期

関西大学審査学位論文

心理療法作用としての経験の構成モデル
—その射程と可能性—

神戸松蔭女子学院大学

小松 貴弘

論文要旨

本論文は、心理療法の作用に関する考え方に一つのモデルを提示し、その特徴と意義と射程を論じることを目的としたものである。

今日、公認心理師の国家資格が創設されて、専門職としての心理職のあり方は新しい転換期を迎えている。そのような中で、これまで心理専門職のアイデンティティの柱の一つであり続けてきた心理療法のあり方もまた、転換期を迎えていると思われる。従来のさまざまな心理療法のオリエンテーションに加えて、新しくさまざまな心理療法のアプローチが台頭する中で、心理療法の実践の本質についての考え方は拡散しつつある。このような状況の中で、特にこれから心理専門職を目指す学び手たちは、身につけるべき知識と技法の多様さに目を奪われがちになり、そもそもの心理職の本質や、心理臨床および心理療法の実践の本質が見えにくくなりつつあることが懸念される。

本論文は、現在の心理療法の実践をめぐるこのような筆者の基本的な認識と問題意識のもとに、心理療法の作用を筆者が「経験の構成モデル」と名づける観点から捉え直すことを目指したものであり、経験の構成モデルの考え方について、その特徴と意義を検討することが本論文の主要な課題である。

序章「岐路に立つ現代社会における心理療法」では、本論文の導入部分として、本論文全体の背景となる、現代社会における心理療法のあり方の課題と現代社会のあり方そのものに関する筆者の認識とを概略的に述べた。

第1章「対人関係精神分析の歴史と特徴」では、経験の構成モデルの源流である対人関係精神分析の基本的な考え方と、精神分析の世界の中でのその位置づけについて概説した。伝統的な精神分析が主としてクライアントの内的世界に焦点を当てるのに対して、対人関係精神分析は主としてクライアントが実際に営む対人関係に焦点を当てること、そうした両者の考え方と実践の違いは、一者心理学と二者心理学の違いとして捉えられることを論じた。

第2章「Sternの未構成の経験の概念」では、経験の構成モデルが立脚する考えである、Donnel B. Sternが提唱した未構成の経験の概念を検討した。Sternは経験を、それ自体客観的な意味を持つものではなく、解釈され、構成されることで意味を持つものとして捉えており、何かが無意識的であることを、そこでは経験が未構成の状態に留め置かれていることとして理解していること、そして、経験が未構成に留め置かれている状態を解離の働

きとして捉えており、無意識的な経験を抑圧の働きの結果とする伝統的な理解のあり方との違いを論じていることを検討した。

第3章「経験の構成と対人関係の場」では、未構成の経験が構成される過程と、そうした過程が生じる対人関係の場についての考え方を検討した。未構成の経験が構成されるには対人関係の場がなくてはならないこと、そのとき構成される経験のあり方は、その対人関係の場のあり方によって大きく左右されること、したがって、対人関係の場は、経験の構成にとって、成立のために不可欠の条件であると同時に、そのあり方を制約する条件でもあることを論じた。

第4章「経験の構成モデルとその射程」では、経験の構成モデルの概略を提示して、その射程の可能性を探る目的で Eugene T. Gendlin の体験過程理論との接点を論じた。未構成の経験の概念を中核とした Stern の臨床理論に立脚したうえで、筆者はその適用範囲を拡張して、その考え方を経験の構成モデルと名づけること、経験の構成モデルの観点からは、精神分析とは全く異なる系譜にある Gendlin の体験過程理論との間に多くの共通点が見られること、そのうえで、経験の構成モデルは精神分析に限定されるものではなく、幅広い心理療法のオリエンテーションの基本原理として適用できる可能性があることを論じた。

第5章「クライアントは何を語るのか」では、クライアントは語ることを通じて何をし、クライアントが語ることは何が表現されていると考えられるのかを検討した。そもそもクライアントは面接において何を語っていると考えられるのか、クライアントが語ることとクライアントの経験との間にはどのような関係が成り立ちうるのか、クライアントの語りや面接における「今ここで」の語りであることの意義、そして、語ることとそれによって意味されることとの関係を論じた。

第6章「セラピストは何を聞くのか」では、そうしたクライアントの語りをセラピストはどのような聞き方で聞くことができるのか、セラピストの聞き方の違いによって心理療法の過程にどのような違いが生じる可能性があるのかを検討した。クライアントの語りを聞くセラピストの役割を確認したうえで、クライアントの語りを聞くセラピストの聞き方を、①文字通りに受け止めて聞く、②何を言わんとしているのかを聞く、③心の状態の記述あるいは反映として聞く、④語りがどこに向かうのかを見届けようと努めて聞くという、筆者が考える四つのタイプに分けて、それぞれの聞き方の特徴と意義、それらがクライエ

ントの語りのあり方とセラピストの聞き方に及ぼす影響、そしてそれぞれの聞き方において暗黙的に働いているセラピストの心理療法観を論じた。

第7章「クライアントの語りをセラピストが聞くことの意義」では、クライアントの語りをセラピストが聞くことが、そもそもどのような意味において心理療法において不可欠な営みであるのかを検討した。面接においてクライアントが語ることの意義を経験の構成モデルの観点から改めて捉え直し、そのような捉え直しによってセラピストが聞くことの意義にどのような新しい視点がもたらされるのか、経験の構成には対人関係の場が大きな役割を果たすという見方からはセラピストの聞き方に面接関係が及ぼす影響がどのように捉え直されるのか、そしてそうした見方からは心理療法過程に対するセラピストの関与のあり方がどのように捉え直されることになるのかといった問題について、伝統的な精神分析的な心理療法の立場の理解のあり方を参照して、それと対比しながら論じた。

第8章「心理療法の過程の停滞や行き詰まり」では、心理療法の過程の行き詰まりが生じている状態を理解する観点の一つとしてのエナクトメント概念を検討した。心理療法の過程の行き詰まりについては、伝統的な立場では抵抗として捉えられてきたが経験の構成モデルにおいてはそれとは異なる捉え方ができること、そのような捉え方の一例としてそれをエナクトメントとして捉える考え方があること、エナクトメントという捉え方が伝統的な抵抗としての捉え方とどのような点で異なるのかを論じた。

第9章「関係精神分析におけるエナクトメント概念」では、エナクトメント概念について、その歴史とこの概念の理解のあり方をめぐる論争について検討した。主として精神分析の世界にエナクトメント概念が導入された経緯を確認し、エナクトメント概念をめぐる学派の違いによってどのような相違が生じているのかを検討した。そのうえで、エナクトメントをめぐる諸学派の立場の違いは主として無意識的な経験の性質についての理解の仕方の違いであること、そしてどのようにすれば心理療法の中でセラピストがエナクトメントを扱うことができるのかをめぐる考え方の違いであることを論じた。

第10章「エナクトメント論とその射程」では、エナクトメントの概念と転移・逆転移の概念を比較して検討した。心理療法過程においてクライアントとセラピストの間に生じる関係とその推移について、それをエナクトメントとして捉えることと、伝統的なやり方で転移・逆転移として捉えることの間にはどのような相違があるのか、Stern が定式化するエナクトメント概念や筆者の経験の構成モデルはこれまでの伝統的な理解とどこが違う、

どのように異なる視野を切り開いているのかを検討し、そうした捉え方の違いの根底には心理療法作用に関する考え方の違いがあることを論じた。

第 11 章「エナクトメントが解消する過程」では、Stern の臨床ヴィネットを素材として、エナクトメントが解消するとはどういうことであるのかを筆者の観点から検討した。Stern の臨床ヴィネットを素材として、エナクトメントが解消する過程を、①何がわかったのか、②何が変わったのか、③理由はどこにあるのか、の三つの観点から検討し、経験の構成モデルの立場からはその過程を、クライアントとセラピストの間に生じた対人関係の場の変化により新しい経験の構成が可能になった過程として捉えることができること、それは精神分析において伝統的な転移・逆転移に関する洞察と解釈が心理療法の過程を動かすとする捉え方とは異なる理解のあり方であることを論じた。

最後に、終章「経験の構成モデルの可能性」において、序章で述べた筆者の現状認識と問題意識に応える形で、経験の構成モデルが現在の心理療法の実践をめぐる状況に対して、そして現代社会のあり方に対して、どのような意義を持ちうる可能性があるかについての筆者の見通しを示した。経験の構成モデルは、精神分析のオリエンテーションに限定されず、Gendlin の体験過程理論やシステム論の考えに基づいた心理療法やオープンダイアログの取り組みとも接点を持っていること、また精神分析の内部においては伝統的なオリエンテーションと相互補完的に働く考え方でありうること、現代社会におけるテクノロジーの発展に伴う私たちの経験のあり方の変質を捉えてそれへの向き合い方を考えるための重要な視点を提供しうること、そして心理療法家が取り組むべき課題として経験の拡張を通じた自由の拡張という理念を提供しうるという見通しを示した。

目次

	頁
はじめに	1
序章 岐路に立つ現代社会における心理療法	4
第1節 岐路に立つ心理療法	4
第2節 公認心理師制度の創設と心理療法	5
第3節 現代社会のあり方と心理療法	6
第4節 心理療法のアイデンティティ	12
第5節 本論文の問題と目的	15
第1部 概念の整理とモデルの提示 ―未構成の経験と経験の構成モデル―	17
第1章 対人関係精神分析の歴史と特徴	19
第1節 対人関係精神分析の歴史	19
第2節 対人関係精神分析の特徴	20
第3節 一者心理学と二者心理学	23
第2章 Stern の未構成の経験の概念	28
第1節 経験の構成的性質	28
第2節 未構成の経験とは	30
第3節 解離と抑圧の対比	32
第4節 解離された経験と抑圧された経験の対比	34
第3章 経験の構成と対人関係の場	37
第1節 未構成の経験が構成されるということ	37
第2節 「正しい」構成はあるのか	39
第3節 対人関係の場とは何か	41
第4節 対人関係の場の性質とそれを左右するもの	42

第5節 対人関係の場はどのように経験の構成に影響するのか	44
第4章 経験の構成モデルとその射程	47
第1節 Stern の臨床理論と経験の構成モデル	47
第2節 Gendlin の体験過程理論	50
第3節 事例的エピソードの提示	52
第4節 事例的エピソードについての考察	53
第5節 経験に立ち会うこと、交差すること	56
第6節 セラピストの役割と心理療法の作用	58
第2部 語るクライアントと聞くセラピスト	61
第5章 クライアントは何を語るのか	63
第1節 クライアントが語る経験	63
第2節 クライアントの語りと体験との関係	65
第3節 今ここでの経験としての語り	68
第4節 語ることと意味すること	69
第6章 セラピストは何を聞くのか	73
第1節 心理療法におけるセラピストの役割	73
第2節 クライアントの語りを文字通りに受け止めて聞く	75
第3節 クライアントが何を言わんとしているのかを聞く	79
第4節 クライアントの語りをクライアントの心の状態の 記述あるいは反映として聞く	81
第5節 クライアントの語りがどこに向かうのかを見届け ようと努めて聞く	83
第7章 クライアントの語りをセラピストが聞くことの意義	86
第1節 問題の所在	86
第2節 クライアントの語りと経験の関係	88

第3節	経験の構成モデルから見たクライアントの語りの意義	……89
第4節	クライアントの語りと対人関係の場	……91
第5節	経験のコンテクストのありか	……92
第6節	対人関係の場と語りを聞くセラピストのあり方	……94
第7節	残された課題	……98
第3部	心理療法の過程とその行き詰まり —エナクトメント概念を中心に—	……101
第8章	心理療法の過程の停滞や行き詰まり	……103
第1節	クライアントの語りに変化が生じないとき	……103
第2節	停滞や行き詰まりとしてのエナクトメント	……105
第3節	エナクトメントが生じているとはどういう事態なのか	……108
第9章	関係精神分析におけるエナクトメント概念 —Stern,D.B.のエナクトメント論を中心に—	……112
第1節	エナクトメントの基本概念	……112
第2節	エナクトメントをめぐる見解の相違	……114
第3節	Sternのエナクトメント論	……117
第4節	論点の整理	……121
第5節	残された課題	……123
第10章	エナクトメント論とその射程	……125
第1節	Sternのエナクトメントの定式化	……125
第2節	伝統的な転移論との相違	……128
第3節	心理療法の作用に関する見解の相違	……130
第11章	エナクトメントが解消する過程 —Sternの臨床ヴィネットの検討—	……133
第1節	Sternの臨床ヴィネットに見るエナクトメントの過程	……133
第2節	「何がわかったのか？」	……136

第3節 「何が変わったのか？」	……………138
第4節 「理由は何であるのか？」	……………140
終章 経験の構成モデルの可能性	……………143
第1節 エビデンス重視の姿勢と経験の構成モデル	……………143
第2節 現代社会における経験の危機と経験の構成モデル	……………147
第3節 経験の構成モデルと心理療法家のアイデンティティ	……………148
第4節 今後の課題	……………149
おわりに	……………151
文献	……………153
謝辞	……………163

はじめに

本論文は、心理療法の作用に関する考え方に一つのモデルを提案し、その特徴と意義と射程を論じることを目的としている。

今日、従来の臨床心理士という資格制度に加えて、公認心理師という国家資格が創設されて、専門職としての心理職のあり方は、新しい転換期を迎えていると思われる。そのような中で、従来より心理専門職のアイデンティティの柱の一つであり続けてきた心理療法のあり方もまた、転換期を迎えているように、筆者には思われる。

従来の広義の力動的心理療法やパーソンセンタードアプローチ、行動療法に加えて、認知行動療法やシステム論的な原理に基づいた様々な心理療法のアプローチが台頭する中で、心理療法の実践の本質についての考え方が拡散しつつあるように、筆者には感じられる。このような状況の中で、特にこれから心理専門職を目指す学び手にとって、知るべき「知識」や身につけるべき「技法」の多様さに目を奪われて、そもそも心理職の本質や心理臨床および心理療法の実践の本質が見えにくくなっていること、そうした本質についてじっくりと考えて学ぶ機会が急速に失われつつあると感じられることに、筆者は強い危機感を抱いている。

本論文は、現在の心理療法の実践をめぐるそのような筆者の基本的な認識と問題意識のもとに作成されたものである。したがって、その主要な関心は、心理療法とその実践の目的や作用といった、より本質的な問題へと向けられている。

ここで、本論文の構成を簡単に説明しておきたい。本論文は、その表題の通り、心理療法の作用を筆者が「経験の構成モデル」と名づける観点から捉え直すことを目指している。

「経験の構成モデル」とはどのような考え方であるのかについて、筆者がこれまで学びかつ実践してきた対人関係精神分析に立脚した立場から、その特徴と意義を検討することが本論文の課題である。

本論文は、序章、第1章から第4章までの4章から成る第1部、第5章から第7章までの3章から成る第2部、第8章から第11章までの4章から成る第3部、そして終章から構成される。

「序章 岐路に立つ現代社会における心理療法」は、本論文の導入部分として、本論文全体の背景となる、現代社会における心理療法のあり方の課題と現代社会のあり方そのものに関する筆者の認識とを、概略的に述べたものである。

「第1部 概念の整理とモデルの提示 ―未構成の経験と経験の構成モデル―」は、本論文の主題である経験の構成モデルについて、前提となる基本的な概念を含めて示したパートである。「第1章 対人関係精神分析の歴史と特徴」では、経験の構成モデルの源流である対人関係精神分析の基本的な考え方や、精神分析の世界の中でのその位置づけについて概説した。「第2章 Sternの未構成の経験の概念」では、経験の構成モデルの出発点である、Donnel B. Sternが提唱した未構成の経験の概念を検討した。「第3章 経験の構成と対人関係の場」では、未構成の経験が構成される過程と、そうした過程が生じる対人関係の場についての考え方を検討した。そして「第4章 経験の構成モデルとその射程」において、経験の構成モデルの概略を提示して、その射程の可能性を探る目的で Eugene T. Gendlinの体験過程理論との接点を論じた。

「第2部 語るクライアントと聞くセラピスト」は、クライアントが語るということとセラピストが聞くということに焦点を当てて、その基本的な意義を改めて検討したパートである。「第5章 クライアントは何を語るのか」では、クライアントは語ることを通じて何をしていて、クライアントが語ることには何が表現されていると考えられるのかを検討した。「第6章 セラピストは何を聞くのか」では、そうしたクライアントの語りをセラピストはどのような聞き方で聞くことができるのか、セラピストの聞き方の違いによって心理療法の過程にどのような違いが生じる可能性があるのかを検討した。そして「第7章 クライアントの語りをセラピストが聞くことの意義」では、クライアントの語りをセラピストが聞くということが、そもそもどうして心理療法において不可欠な営みであるのかを改めて検討した。

「第3部 心理療法の過程とその行き詰まり ―エナクトメント概念を中心に―」は、経験の構成モデルに立脚した観点から、心理療法の過程の行き詰まりの捉え方の一つであるエナクトメント概念を論じたパートである。「第8章 心理療法の過程の停滞や行き詰まり」では、心理療法の過程の行き詰まりが生じている状態を理解する観点の一つとしてエナクトメント概念を検討した。「第9章 関係精神分析におけるエナクトメント概念」では、エナクトメント概念について、その歴史とこの概念の理解のあり方をめぐる論争について検討した。「第10章 エナクトメント論とその射程」では、エナクトメントの概念と転移・逆転移の概念を比較して検討した。そして、「第11章 エナクトメントが解消する過程」では、Sternの臨床ヴィネットを素材として、エナクトメントが解消するとはどういうことであるのかを筆者の観点から検討した。

最後に、「終章 経験の構成モデルの意義と射程」において、序章で述べた筆者の現状認識と問題意識に応える形で、経験の構成モデルが現在の心理療法の実践をめぐる状況に対して、そして現代社会のあり方に対して、どのような意義を持ちうる可能性があるかについての、筆者の見通しを示した。

筆者は、本論文が心理療法をめぐる現在の状況に問いかけを発することとなり、その問いかけに呼応してそれぞれの立場で考えと実践を深めようと努める心理専門職が一人でも多く現れることを、心から願っている。

序章 岐路に立つ現代社会における心理療法

第1節 岐路に立つ心理療法

筆者の認識では、2020年代を迎えた日本において、心理療法という営みは大きな岐路に直面していると思われる（小松，2018a, 2020）¹。それは、心理療法の存在意義に関わる問題であり、心理療法の営みが今後どのような形で存続していくことができるのかに関わる問題である。それは、一言で「危機」と表現しても不適切ではないと思われる問題である。心理療法は、現代社会においてどのような意味で必要だと言えるのであろうか。それとも、その歴史的使命は終わりを迎えようとしているのだろうか。あるいは、どのような心理療法の営みが必要とされているのだろうか。こうした問いは、心理療法の営みが何のために、どのように行われるものであるのかを、改めて根本から問い直すことを、私たちに求めるような問いである。

心理療法が現在の日本において、岐路に直面していると筆者が認識する理由は大きく分けて二つある。一つは、公認心理師法が2015年に成立し、2017年に施行されたことである。心理職初の実務資格である公認心理師制度の創設は、従来の心理職における心理療法のあり方に、大きな変化をもたらさずにはおかないことが予測される²。心理職による心理療法の営みのあり方そのものに関わる点で、ここではこれを内的要因と呼ぶことにする。もう一つは、情報通信技術と人工知能技術の高度化に伴う社会のあり方の変化である。とりわけ技術革新に導かれたグローバルな規模での社会経済的变化（例えば、新井，2018；國分，2019；河野，2019）は、社会の中で心理療法の営みが持つ意味をも変容させつつあるように筆者には思われる。心理療法が具体的に営まれる場である現代社会のあり方に関わる点で、ここではこれを外的要因と呼ぶことにする。

上記の内的要因と外的要因は、実際には互いに独立したものではなく、相互に関連したものであると考えられる。しかし、ここでは本論文が目指すところを示すための準備作業として、本論文の主題と関連する部分に焦点づける形で、内的要因と外的要因をそれぞれに論じることから始めたい。その作業を通じて、本論文が主題として取り組む課題が持つ意義の見通しを示したい。

¹ 筆者に論じることができるのは、筆者の視野の中にある現在の日本における状況のみであり、諸外国の状況を論じることには筆者の力は及ばない。

² 従来の心理職の主要な資格である臨床心理士との養成カリキュラムの考え方および内実の違いは、早くも、公認心理師の資格取得を目指して学びつつある学生の学びのあり方に影響を及ぼしつつある印象を筆者は持っている。例えば増井（2019）が示す懸念には、十分な根拠があるように筆者には思われる。

第2節 公認心理師制度の創設と心理療法

公認心理師制度の創設が持つ社会的および歴史的意義は、制度が創設されてまもない現時点では、まだ定かな形で示すことはできない。しかし、従来の臨床心理士資格と比較したときに、その創設の理念、及び大学と大学院において指定されているカリキュラムの体系と内容から推し量られることとして、少なくとも、次の二つの特徴を指摘することができるだろうと、筆者には思われる。それは、「エビデンスに基づいた支援の重視」と「多職種間の連携の重視」である。これらをそれぞれの知のあり方から見たときには、筆者には、前者を「技術の知」の重視、後者を「ネットワークの知」の重視と捉えることが適切であると思われる。もちろん、従来から存在する資格制度である臨床心理士の理念に、そして実際の臨床心理士有資格者の心理臨床活動に、上記の二つの視点が欠落しているわけではない。しかし、公認心理師の理念における「技術の知」と「ネットワークの知」の重視は、従来の心理職のあり方に重大な変容を迫るものであると、筆者には思われる。それはどのような意味においてなのか、ここでは特に前者の「技術の知」に焦点を当てて、以下に検討したい。

公認心理師の理念における「エビデンスの重視」は、とりわけ心理学的支援のための介入の効果に関するエビデンスの重視として理解できると思われる。つまり、心理学的支援においては、要支援者の抱える問題に関する適切なアセスメントに応じて、より高いエビデンスを持つ介入技法を優先して用いることを求める原則である。したがって、「エビデンスの重視」という原則には、必然的に「クライアントの問題に応じたより効果的な技法」の習得と開発が要請されることになる。そこでは、より安全で、より確実で、より効果的な技法の確立が求められ、目指されるであろう。それは一言で言えば、普遍的で妥当性の高い「技術の知」の追求である。しかし、ここで改めて問われなければならないのは、技術そのものが持つ、そして技術を実際に適用して使うことが持つ、私たちの生のあり方への影響である（國分，2019）。つまり、一般にそうした「技術の知」を解決すべき問題に適用することには、そこから得られるメリットと、それによって損なわれるデメリットがあることに、私たちは注意を払わねばならない。例えば Schön（1983）は、近代的な意味での「技術の知」の効用と限界を論じる中で、現代社会における専門職のあり方が技術的熟達者（technical expert）から省察的実践家（reflective practitioner）へと移行しつつあり、またそうした移行が要請されていること、そうした中で「専門知」のあり方が問い直され

ねばならないことを論じている。

伝統的に、心理療法は、とりわけ広い意味での力動的な立場の心理療法は、「臨床の知」（中村，1992）に立脚してきたと言えるだろう。そこでは、近代の自然科学の知のあり方とは異なる、個別性や主観性が重んじられてきた（河合，1992）。伝統的な心理療法を、主として「臨床の知」に基づく営みと捉えたとするならば、それは「技術の知」を目指すと捉えられる公認心理師の理念と、どのような関係にあると考えることができるだろうか。

後に見るように、現代社会において「わかりやすさ」と「即時性」を求める心性が強くなっているとすれば、そのような心性は、「技術の知」を目指すあり方と親和性が高いと言えるだろう。「技術の知」への要求は、現代社会の要求でもあるとするならば、そのような状況の中で、私たちは心理療法の営みのあり方をどのように考え、どのように捉え直していく必要があるのだろうか。より具体的に言えば、伝統的な、とりわけ力動的な個人心理療法のような「時間のかかる営み」（小松ら，2019）は、「技術の知」を求める要求の前に、どのようにその存在価値を示すことができるだろうか。差し迫った問いとして、このような問いを自らに差し向けることを、現在の私たちは求められているというのが、筆者の基本的な認識である。

第3節 現代社会のあり方と心理療法

（1）経験の危機

現代社会のあり方を特徴づけるものの一つは、情報通信技術と人工知能技術の、それぞれの、またそれらの結合の、飛躍的な発展である。この飛躍的な発展は、私たちの暮らし方、コミュニケーションのあり方、そして思考のあり方に、深層レベルに至るまでの大きな変化をもたらしつつあるように思われる（小松，2016）。

今日の私たちは、日常的に、インターネットに代表される情報ネットワークに接続した情報端末機器を使用するようになった。さらには、目覚めている時間の大部分を携帯型の個人用情報端末を使用しながら過ごすことも可能になった。情報通信技術の高度化は、私たちの生活の中にある物理的障壁と時間的障壁を著しく変質させた。私たちは、ネットで接続さえしていれば、はるか遠く離れた場所と、いつでもほぼ瞬時に情報をやり取りすることが可能になった。こうして、私たちの生活の利便性は、さまざまな面で劇的に向上した。

しかし、情報通信技術の高度化が私たちにもたらしたのは、単なる生活の利便性の向上

だけではない。筆者には、私たちの生活のより基底的なレベルで、私たちにもたらされた、そして現在進行形でもたらされつつある最も重要な変化は、経験の質の変化であると思われる。Gibson (1966) の認知心理学を源流とする生態学的心理学の立場から、Reed (1996b) は「経験の危機」としてこの問題を取り上げている。ここでは、Reed にならって、経験を便宜的に直接経験と間接経験に分けて議論を進めたい。

情報通信技術の高度化によって、私たちが日常的に生を営んでいる世界（以下、生活世界）の中に存在しているものは、そうした技術によって処理しやすいように、急速にデジタル情報化されていっている。こうした情報化の爆発的な進展は、私たちの生活世界における経験の間接化を強力に推し進めているように思われる。私たちにとって、自ら足を運び直接的に実物に触れる機会は次第に減少し、ディスプレイに表示された文字や画像や動画といった情報と接触する機会と時間が飛躍的に増大している。

私たちの生活世界に溢れる情報、とりわけデジタル化された情報は、基本的に記号化された情報である。記号化された情報は、その性質上、特徴がわかりやすく強調されており、クリアでシャープである。一般に、記号化された情報は、曖昧さがなく明確で、無駄がなく的確である。他方で、曖昧で、どっちつかずで、はっきりとしない、全体を見渡すのに時間がかかるものは、記号化になじまない。つまり、情報として表現されにくい。

情報化が爆発的に進展する前の世界においては、私たちの経験の基本的な性質は、後者のような、曖昧で、多義的で、不明瞭な性格が強かった。私たちは、よくわからないものに直に触れ、未知の感触にたじろぎつつ、それをどう切り取り、どう捉えればいいのか、自分で学んでいくよりほかなかった。私たちは、世界との自分なりの関わり方を、先人に学びつつ自分で見いだしていかなければならなかった。私たちはそのようにして、経験を深めていった。経験から学び、経験の仕方を深めていくことが、同時に自我の確立でもあった。そこでは、経験は、明瞭で一義的な記号としてではなく、曖昧で多義的な象徴として、象徴的意味を帯びたものとして、私たちに現前していた。

情報化の進展以後、経験をめぐる状況は大きく変わりつつあるように思われる。世界は、今では隈無く情報としてパッケージ化されようとしている。世界に存在する多くのものが、あるいは実在しないものまでもが、情報として私たちの眼前に表示可能になりつつある。私たちに経験可能な世界は拡張する一方である。情報化以前には、おそらくけっして目にすることがなかったもの、知り合うことがなかった人々と、ネット空間あるいは情報空間の中で、私たちは出会うことができるようになった。

こうした社会の変化の中で、直接経験はもはやあまり必要ではないように見えるかもしれない。パッケージ化された情報は、ときに実物以上に便利であり、多くの情報を提供してくれる。かつて、オリジナル（実物）とコピー（複製）の区別と優劣は絶対的であった。オリジナルが唯一無二の絶対的価値を有していて、コピーはその劣化した代用品に過ぎなかった。しかし、今ではオリジナルとコピーの区別があまり意味を持たなくなっている場面も少なくない。コピーは限りなくオリジナルに近づき、時にはオリジナルを凌駕することさえある。

現代社会で生活する人の多くは、何か知りたいことがあれば、まずインターネット上の検索エンジンを利用するようになった。そこには、デジタル化された情報が瞬時に立ち現れる。必要な情報はそこにある。「質の高い」情報ほど、クリアでシャープである。単純で、明快で、簡潔である。情報を理解するために考える必要はほとんどない。検索の結果、必要な知識は手に入った。もはや問題は解決した。さあ、次の行動に移ろう、といった具合である。筆者の心に浮かぶ大きな疑問は、ここに「経験」はあるのだろうかという疑問である。記号化された情報を効率的に処理することは、はたしてどの程度、「経験」なのだろうか。

これまで見てきたように、筆者の考えでは、単純化して比較すると、近代における経験は象徴的意味を帯びており、情報化以降の現代における経験は記号的意味を帯びている。そこでは、経験という言葉が意味するものが、そればかりか経験の内実が、大きく変質しているように筆者には思われる。その変質は、私たちに何をもたらし、私たちは何を失いつつあり、また何を失ってきたのだろうか。象徴的な経験と記号的な経験とでは、いったい何が違うのだろうか。経験の変質に伴って、経験する主体もまた何らかの変容を被っているのではないだろうか。

（2）経験と主体

ここまで、経験という言葉の意味内容を詳しく検討してこなかったが、ここで改めて考えてみたい。そもそも経験とは何だろうか。例えば、道端に花が咲いていること、情報端末のディスプレイに検索結果が表示されていること、これらは何らかの「事態」ではあっても、経験ではない。誰かがその花に目を留めるとき、その人にとってその花を見ることが経験となり、誰かがディスプレイの表示を読むとき、その人にとって検索結果を見ることが経験となる。つまり、経験とは、人が世界との関わりの中で営む精神活動である。経

験には、経験する主体と経験される内容（対象あるいは客体）の両方がセットになっているのである³。

このように経験には、経験する主体が不可欠である。しかし、人は生まれたときからすでに経験する主体として生を営んでいるわけではない。経験する主体は、生まれてから後、成長する中で形成され、成立するものであると考えられる。本論文では、さしあたり、経験する主体とは<この私>という意識を持った主体であると捉えておきたい。<この私>という意識を持った主体にとって、経験は<この私>を起点として<この私>に対して現前している。<この私>の経験のかけがえのなさは、<この私>と同一の時空間を占めることができる他者は存在しないことによる。そして<この私>の経験は、時空間を移動することに伴って変化する。

経験する主体であるということは、このようなことである。少なくとも、近代的な意味での経験する主体とは、そのようなものであった。それが筆者の理解である。このような意味での主体は、単に意識を持った存在ではない。<この私>という意識を持った主体とは、自分自身を省察的に振り返ることができる再帰的な自己意識を（少なくとも潜在的に）伴った主体である⁴。そのような主体は、自分が生きている世界に対して、奥行きを持ったパースペクティブ的な捉え方ができる。あるいは、そのような主体であることは、その主体においてそのようなパースペクティブが立ち上がっていることと同義である。

私たちが生まれてきたときの状態と、このような主体であるということの間には、質的に大きな懸隔がある。成長の中で人がそのような主体となっていく過程では、環境との相互作用におけるさまざまな条件が必要であると考えられる。なぜなら、先にこのような主体のあり方は近代的な主体のあり方であると述べたように、主体のあり方は社会・文化・時代のあり方に大きく規定されており、けっして無条件に自明のものであるとは考えられないからである。

筆者の理解では、情報化以降の現代的な経験の主体のあり方は、近代的な経験の主体のあり方とは大きく異なるように思われる。情報化の進展は、間接化と簡明化という形で経験の表面的な内容に変化をもたらしているばかりでなく、経験する主体のあり方そのものにも変化をもたらしつつあるように、筆者には思われる。

³ もっとも、例えば James (1890) のように、主観が客観を対象化する以前の主客未分化な経験（「純粹経験」）を論じる立場もある。

⁴ 再帰的であること、「再帰性」は、Giddens (1991) が指摘する近代の特徴的な性格の一つである。

(3) 主体と社会

経験する主体のあり方は、その主体が生を営み成長する、社会・文化・時代のあり方に大きく規定される。これまで見てきたように、近代的な経験する主体と現代的な経験する主体の間に質的な違いがあるならば、それは近代的な社会と現代的な社会との間の違いに規定されている部分が大きいだろう⁵。社会のあり方の変化に伴って、経験する主体のあり方も変化するとき、主体と他の主体との関係のあり方、主体と社会との関係のあり方にもまた、何らかの変化が起こりつつあることが推測される。それはどのような変化であろうか。

筆者の理解では、近代的な主体は、自己形成的な主体であり、異質な他者とのぶつかり合いの中で、自己を確立し、社会の中に積極的に自己を定位しようとする主体であった。他者との差異性、異質性を自らの内なる葛藤として抱え込み、そうした葛藤と折り合い、乗り越えていくことで成長し、自らの視野を広げ、活動領域を広げていくというのが、主体のあり方の典型的なモデルであったように思われる⁶。

これに対して、現代的な主体は、情報消費的な主体であり、他者の異質性と対峙するよりは、他者との同質性を手がかりにつながりを求めようとする傾向が強いように、筆者には思われる。このような傾向は、異質な他者を排除する傾向性をはらんでいる。折り合っていくうえで、さまざまな労力を要する身近な他者とのつながりよりも、同質性を感じ取ることができて瞬時につながりを感じることができる遠く離れた（しかしネットでは即時的に結ばれた）他者との関係の方が、より大切にされる。このような中で、物理的な近接性に根ざした、地理的な地域社会の重要性は低下し、ネット上のヴァーチャルな（擬似的）共同体の価値と重要性が増している。そこでは、同質性に根ざした他者との間の相互承認を介した自己確認が、最も大事にされているように思われる。しかし、異質性を極力排して同質性を手がかりに繋がる他者は、本来の意味での他者と呼べるのであろうか。主体にとってのこのような他者との関係のあり方を、例えば社会学者の大澤（2008）は、「他者性抜き『他者』」という秀逸な表現で言い表している。

身近な他者が、生身の身体と息づかいをもって迫ってくる他者であるのに対して、情報

⁵ ここでは、主に情報化の進展に焦点を当てて近代と現代との違いを論じているが、もちろんこの問題を論じることはそれほど単純なことではない。現代を近代との対比でポストモダン（近代以後）と捉えるか、ハイパーモダン（後期近代）と捉えるかをめぐっても様々な議論がある。そして、近代と現代の間には、異質性ばかりでなく同質性もあることも言うまでもない。

⁶ 例えば、Erikson（1950）の自我発達論は、その典型的な一例である。

空間内の他者はディスプレイ上に表示される無機質な他者である。生身の他者との関係には、物理的な空間を共にすることによる、非意図的な、非言語的な、相互に影響を及ぼし合う、自覚されにくい交流が生じる。そうした交流が、私たちを、自分自身では思いもかけない方向に動かしていくことが少なくない。そうした他者との関係が、私たちにとって予想外のものとの出会いを生み出し、私たちは否応なく考えさせられることになる(國分, 2013)。

情報空間内の他者との間には、そうした交流は生じにくい。そうした交流は、いわばノイズとして、はじめから除去されている。意図的に、自覚的に扱い難いものは、情報空間内にははじめから存在していない。そうして、扱い難いもの、制御し難いものは、主体の経験の中からこぼれ落ちていく。親しみやすいもの、わかりやすいもの、すぐに反応を得られるものに取り巻かれて、あるいはそうしたもので自分を取り巻いて、疎遠なもの、曖昧なもの、待たねばならないものは、遠ざけられる。見えるものと見えないものとのギャップは広がり、見えないものは不可視化し、不可視化したものに想像力は届かなくなる。目に見えるものは、あまりに簡明であり、想像力を働かせる余地はない⁷。想像力が働かなければ、直接感知しえないものとの交流は難しい。このような状況においては、「それは何なのか」「なぜなのか」と考えさせられる機会は少なくなるだろう。

このように、現代的な主体においては、自分自身を社会の中に位置づけることを模索する、再帰的に自らを定義づけようとするモメントは、近代的な主体に比べて小さくなるざるをえないように思われる。現代的な主体にとって、他者との関係の中での、社会の中で自分の一貫性、あるいはアイデンティティは、それほど重要性を持たないだろう。それ以上に、個別的な状況に密着した自分のあり方の切り替え、あるいは自分のあり方を切り替えずにすむ個別的な状況の選択が重んじられることになる(平野, 2012)。

(4) 経験の危機と対話する力・考える力

こうした経験の危機の進行が私たちの生活に及ぼしている影響によるさまざまな変化の中でも、筆者にとって最も深刻に思われる変化は、「対話する力」「考える力」の変容である(河野, 2019)。

現代社会の情報通信技術と人工知能技術の結合は、私たちが日常生活で直面する諸課題

⁷ 想像力とは、欠乏感覚に対する代償機能ではないだろうか。欠乏感や喪失感の薄い場所に想像力は宿らないと思われる。

についての「最適解」を、私たちの外部にある「正解」として措定する心性を著しく助長しているように思われる。いわゆるビッグデータの解析に基づく「最適解」を「正解」として自らの判断と行動を組み立てて、作り上げていくという局面が、社会の中で急速に増大しているように、筆者には思われる。その際に求められているのは、その「最適解」の「わかりやすさ」と、その「最適解」が提示される「即時性」である。

「対話する」と「考える」ことは、「わかりやすさ」と「即時性」の対極にあると言える。なぜなら、「対話する」ことも「考える」ことも、わからなさを出発点としながら、時間と手間をかけて、試行錯誤を重ねながら、時に迂遠なルートを通りさえして、判然としない不明瞭なものの中から、何かしらの形やパターンを見出すことをその本質とするからである。

このような現代社会の変化の中で、心理療法の営みは、少なくともその伝統的な形態においては、変化の流れの方向に抗う性格を持っていると捉えることができると思われる。すなわち、伝統的に、少なくとも広い意味での力動的な観点に立つ心理療法は、クライアントとセラピストの対話をベースに、クライアントとセラピストの二人が、主としてクライアントの思いや気持ちや経験に焦点づけて、その場に生じていることを、時間をかけながら、イメージや言葉として紡ぎ出すことに努めることを、その基本的な営みとしてきたからである。

こうした状況においては、伝統的な意味での心理療法の営みは、時代遅れの、時代に取り残されつつあるものとして、否定的に評価されかねない契機を含んでいると言えるだろう。しかしもちろん、その同じ契機が、現代社会の変化の中で急速に姿を消しつつあるものに積極的に焦点を当てる補完的な役割を持つという、肯定的な意味合いをも含むのである。

第4節 心理療法のアイデンティティ

情報化が進展した現代において、心理療法の位置はその独自性をこれまで以上に増しているように思われる。基本的に、心理療法はクライアントが自ら相談の場に足を運んで、クライアントとセラピストが対面して行われる。情報化の進む社会の中で、それはひどく効率の悪い営みに映る。しかし、その「効率の悪さ」にこそ、心理療法の独自の存在意義があると、筆者は考える。

心理療法の場は、本来的に、異質な他者との出会いの場である。クライアントは、心理

療法のための面接の度に、毎回セラピストと 50 分程度の時間を共に過ごすことになる。そしてその時間、セラピストの注意と関心は、基本的にクライアントに向けられ続ける。私たちは現代社会において、このような他者との関係を自然発生的に持つ機会が非常に少なくなっているのではないだろうか。本論文全体を貫くテーマであるが、人は他者との関係の中で経験を形作り、経験を振り返る。経験を経験として定着させ、それについて思いを巡らすためには、他者の存在が、他者との関係が不可欠なのである。これまで見てきたように、情報化されて情報機器を介した他者とのつながり、他者との関係は、このような意味での、そもそも経験の成立条件であるような他者との関係のあり方とは、様相が異なるのではないかと、筆者は強い疑念を持っている。

このような社会の変化の中で、心理療法は、人が自らの経験を丁寧に立ち上げていく特異な場としての存在意義を持ちうるのではないかというのが、筆者の見通しである。

これまで、筆者は「心理療法」を、留保をつけながらも、一括りにして扱ってきたが、ここで、筆者が本論文で主題として扱い、筆者が日常の心理臨床の営みにおいて拠り所としている心理療法の立場を明確にしておきたい。それは、対人関係精神分析に立脚した精神分析的な心理療法である。

対人関係精神分析に立脚した精神分析的な心理療法がどのような立場であるかについては、次章において改めて論じられるが、ここでは簡単な見通しを得るために、いくつかの心理療法のオリエンテーションを挙げて、それらとの相違点を指摘しておきたい。

筆者の理解では、さまざまな心理療法のオリエンテーションは、以下の2つの軸に沿って位置づけて整理することができるように思われる。第一の軸は、「解決」志向 vs. 「対話的理解」志向の軸、第二の軸は、一者心理学 vs. 二者心理学の軸である⁸。それぞれの軸について簡潔に説明するならば、第一の軸は、面接の目標の比重がクライアントの問題の解決の方に重きを置いているか、問題の理解の方に重きを置いているかの違いを表した軸であり、第二の軸は、クライアントの問題を主としてクライアントの個人内の何らかの心理的機構のあり方として捉えようとするか、クライアントとそれを取り巻く主として対人的環境との相互作用のあり方として捉えようとするかの違いを表した軸である⁹。

まずは、伝統的な精神分析・精神分析的な心理療法のグループとの相違について。伝統的

⁸ これらの軸を導入する筆者の意図は、発見的な目的にある。オリエンテーション間の分断を意図するものではない。むしろ、互いの相違を認識することで、開かれた生産的な対話が生まれることを目指している。当然、筆者が導入する軸そのものの妥当性と各オリエンテーションの位置づけ方の妥当性もまた、議論に開かれている。

⁹ 一者心理学と二者心理学の違いについては、第1章の第3節で改めて論じている。

な精神分析・精神分析的な心理療法のグループと、対人関係精神分析に立脚する精神分析的な心理療法とでは、筆者の理解では、第二の軸に関して、前者が一者心理学的であるのに対して、後者が二者心理学的であるという相違があると位置づけることができる。

次に、行動療法・認知行動療法のグループとの相違について。認知行動療法は、公認心理師の資格において中心的な位置に据えられていると思われるオリエンテーションである。認知行動療法においては、ケースフォーミュレーションと技法の選択における客観性とエビデンスが重んじられる。そこでは、第一の軸においては「解決」志向が、第二の軸においては一者心理学的な志向が認められるように思われる。これに対して、対人関係精神分析に立脚する精神分析的な心理療法は、第一の軸においては「対話的理解」志向であり、第二の軸においては二者心理学的な志向であると捉えることができる。

最後に、システム論に基づいた家族療法・ブリーフセラピーのグループとの相違について。このグループは、第二の軸において一者心理学的ではないという点では、対人関係精神分析に立脚する精神分析的な心理療法と共通の地盤に立っていると言えるが、第一の軸において「解決」志向である点で、やはり相違している。

以上のような筆者の便宜的な見立てを整理して示したものが、表1である。

表1 心理療法のオリエンテーションの位置づけ

	一者心理学的	二者心理学的
「解決」志向	行動療法・認知行動療法	システム論的家族療法
「対話的理解」志向	伝統的な精神分析	対人関係精神分析

これまで見てきたような、「わかりやすさ」、「即時性」、「技術の知」に対する要求が高まり続ける現代社会の状況に対して、伝統的な心理療法、とりわけ本論文が主題とする対人関係精神分析に立脚する精神分析的な心理療法は、それとは異なる特質と志向性を持っている。そうした伝統的な心理療法においては、対話を積み重ねることの中から、それまでは顕在化していなかった新しいものが創発されて、それまで触れることができなかったものに触れられるようになり、考えることができなかったものを考えることができるようになることが目指されてきたと捉えることができると思われる。「技術の知」が、「すでにわかっていること」「確立されていること」を反復的に適用することで一定の効果を担保する、目標や着地点の明確な予定調和的な知であるとすれば、「臨床の知」は、反復不可能な固有

性の中から、独自で新しい意味を生み出すことを目指す、予測困難な知であると言えるだろう。そこで生み出される新しい意味は、効果という概念で捉えられるものとは異なるものであるように思われる。そこにこそ、対話を重ねるタイプの心理療法でなければ取り組むことのできない、心理療法の本質があるのではないかというのが、筆者の見通しである。効果や効用、効率性で価値が測られることの多い現代社会にあって、不確実であることの中に私たちの生の個別性と固有性を見出すようなあり方を、心理療法は切り開く可能性を持っているのではないだろうか。

第5節 本論文の問題と目的

以上に見てきたように、筆者の認識は、心理療法は今、公認心理師制度の創設と現代社会のあり方の変化という、相互に深く関連し合った内的要因および外的要因により、岐路に立たされているというものである。心理療法は今、自らの来し方を訪ね、改めて行く末を見定めねばならない岐路に立たされている。そして、心理療法は今、自らのアイデンティティを問い直すことを求められている。これが、筆者の現状に関する認識である。

そこで、筆者自身が自らの心理臨床活動において拠り所としている、対人関係精神分析に立脚した精神分析的な心理療法の立場から、対話を積み重ねる形で営まれてきた伝統的な心理療法の特質を、特に心理療法の作用に焦点を当てて論じ、そこから「経験の構成」という心理療法の作用を取り出すことが本論文の主たる目的の一つである。その上で、筆者は、「経験の構成」を心理療法作用の中核とする「経験の構成モデル」を提示する。そして、その「経験の構成モデル」が、現代社会における私たちの経験のあり方に対して、そして他の心理療法モデルと比較して持つ意義の可能性の射程を論じる。

「心理療法作用」という術語については、簡単な説明が必要と思われる。筆者が心理療法作用という術語で考えているのは、英語における **therapeutic action** に相当するものである。**therapeutic action** は、コンテキスト次第で、「治療（セラピー）作用」や「治療（セラピー）行為」などと理解されうる術語であるが、本論文において筆者が「心理療法作用」という術語で意味するのは、心理療法の過程が進行する原理、及びクライアントの変化が生じる原理のことである。

それでは、以下に、順に検討を進めていきたい。

第 1 部 概念の整理とモデルの提示

—未構成の経験と経験の構成モデル—

第1章 対人関係精神分析の歴史と特徴

本論文の中心的な主題は、心理療法の作用に関する、筆者が「経験の構成モデル」(小松, 2018a, 2020) と名づける考え方である。このモデルは、Donnel B. Stern (1997, 2010, 2015, 2019) が提唱する未構成の経験の概念に全面的に依拠している。「経験の構成モデル」は、Stern の臨床概念と臨床理論を、筆者が自身の臨床経験を通じて学んできたことと照合させながら、発展的に拡張したものである。Stern の未構成の経験の概念と臨床理論については、第2章以下で詳しく検討する。その準備として、Stern が未構成の経験という彼独自の概念を提唱するようになった背景を理解するために、本章では、Stern がその臨床的オリエンテーションの基盤としている対人関係精神分析の考え方について概観する。

第1節 対人関係精神分析の歴史

対人関係精神分析と後に呼ばれるようになるグループはどのようにして生まれたのか、そして精神分析の歴史と実践においてどのような位置を占めてきたのかといったことについて、まずは見ていくこととする。

対人関係精神分析は、アメリカで生まれた心理療法の実践である。対人関係精神分析という名称は、Clara Thompson の論文集として出版された著作 (Thompson, 1964) のタイトルとして、その著作の編者であった Maurice Green が使ったのが最初とされる (Stern, 2017a)。しかし、このグループの起源は、1920 年代に遡ることができる。このグループを形作った草創期の主要メンバーとしてしばしば名前を挙げられるのは、Harry Stuck Sullivan (1953a,1953b,1954)、Erich Fromm (1941, 1947)、Clara Thompson (1950, 1964)、Frieda Fromm-Reichmann (1950, 1959) の4名である。中でも、中心的な役割を果たしたのが、Sullivan であった。事実上 Sullivan を中心人物として、1940年代前半にニューヨークにウィリアム・アランソン・ホワイト研究所 (以下、ホワイト研究所) が設立された (Perry, 1982)。以後現在に至るまで、ホワイト研究所が対人関係精神分析の拠点としての役割を果たしている。

対人関係精神分析は、精神分析の歴史に深い影響を及ぼし続けてきたが、Lionells ら (1995) によれば、その影響は目に見えにくい形のものであるとされる。その最大の理由は、対人関係精神分析が、精神分析の主流派から長く周縁部に位置づけられ、あるいはあ

からさまに排除されてきた歴史があったためである（Lionells ら, 1995 ; Stern, 2017a ; Wachtel, 2011）。アメリカにおいては長らく、Hartmann（1939）に代表される、Freud の考え方に忠実な自我心理学派が主流を占めてきた。後に見るように、対人関係精神分析の考え方と実践は、自我心理学派に代表される古典的で伝統的な精神分析に対して批判的な立場を取るものであった。そのような背景のもと、ホワイト研究所は、国際精神分析協会の下部組織であるアメリカ精神分析協会に加入することなく、長らく独自の道を歩むことになった。そのような中で、対人関係精神分析の臨床家たちの考え方や実践が、それと言及されることなく、いつの間にか主流派に取り入れられていくようになっていったとされる¹⁰。

アメリカにおいて自我心理学派が唯一の主流派だった時代は、1970年代頃から変化を迎えることになる。この頃、元々は自我心理学派の精神分析家だった Heinz Kohut が、独自の精神分析的自己心理学の立場を主張し始めた（Kohut, 1971, 1977, 1984）。

1980年代に入ると、後に関係精神分析の提唱者となる Stephen Mitchell による著作が相次いで出版されるようになる（Greenberg & Mitchell, 1983 ; Mitchell, 1988, 1993）。Mitchell はホワイト研究所を拠点に活躍した対人関係精神分析の流れに属する精神分析家であった。惜しくも若くして亡くなったが、彼が提唱した関係精神分析は、自我心理学派、対象関係学派、自己心理学派など、精神分析内の幅広いオリエンテーションを巻き込んで、大きなムーブメントを形成するに至っている（吾妻, 2009 ; 岡野, 2011 ; 横井, 2011）。

このような流れの中で、かつては周辺化され、主流派から排除されていた対人関係精神分析は、現在ではアメリカにおいて最も創造的なグループの一つとして認められるようになってきている。

それでは、次に、対人関係精神分析がどのような特徴を持つ考え方と実践なのかを見ていくこととする。

第2節 対人関係精神分析の特徴

Lionells ら（1995）は、対人関係精神分析は、必ずしも他の学派と区別されるわかりやすい特徴を備えているわけではないが（なぜならそれらの多くはすでに主流派に取り入れられているので）、少なくとも次のような共通点を備えていると指摘している。それらは、

¹⁰ 例えば、Wachtel（2011）や鐘（2014）は、自我心理学派の中心的人物の一人と目されていた Erikson の考えは、Sullivan と多くの共通点を持っていたことを指摘している。

①広い意味での関係論的なメタサイコロジー、②個人の心的内界に関する相互作用的な考え、③分析状況において対人関係の場や間主観的な場に臨床的な焦点を当てること、④メタサイコロジーや臨床的方法論のとらわれのない独自の発展を許す多元的な感性、⑤理論構成が経験的観察から離れないように努める操作主義的な視点、⑥臨床技法にとらわれのない柔軟性と自由の余地を与えるプラグマティックな指向性と哲学、である。

Lionells ら (1995) によれば、対人関係精神分析において、最もよく用いられる理論的および臨床的メタファーは、対人関係の場であり、そこでは、複数の人物の経験の交錯が、意識的かつ無意識的に、現在と過去、現実と空想、内的世界と外的世界の間で、働いている。対人関係精神分析においては、経験と行動はすべて、対人関係の場の中から、その形と意味を汲み出すと考えられている。

また、鑪 (2019) は、古典的な精神分析とは異なるアプローチとして対人関係精神分析が発展した背景には、古典的な精神分析が主に対象としていた「神経症」のクライアントよりも、より「重い病理水準」のクライアントへと心理療法の実践の対象が拡大していったことがあると指摘している。そして、古典的な精神分析の特徴と対比する形で、対人関係精神分析の特徴を6つの観点に分けて示している。それを筆者が簡潔にまとめて示したのが、以下の表2である。

表2 古典的精神分析と対人関係精神分析の対比 (鑪 [2019] を基に筆者が作成)

観点	古典的精神分析	対人関係精神分析
焦点を当てる主題	過去の「かつてあの場で」の無意識的経験と対内的な心的世界	現在の「今ここで」の面接関係の対人関係
クライアントの問題	心理的な病理	生きていくうえでの困難
症状	幼児期の対人関係に起因する自我発達の問題／主として抑圧による防衛の問題	自己システムのあり方に起因する問題／不安に対する主として安全保障操作の問題
セラピストの姿勢と技法	セラピストの中立的な姿勢を重んじて、逆転移を最小限に抑えて、クライアントの心の中のあり方についての解釈を重視	セラピストの参与観察的な姿勢を重んじて、逆転移を不可避のものと考えて、転移—逆転移を新しい経験として焦点化することを重視
心理療法の作用	過去の経験と面接における「転移関係」とクライアントの病理とを結びつけて解釈することを契機とする	面接における「現実の関係」に基づいて生じる転移—逆転移の相互作用から生まれるクライアントの新しい経験を契機とする

心理療法の過程	無意識的な転移—逆転移の相互作用についてのセラピストの解釈がクライアントに洞察を生み、それがクライアントの行動の変化につながる	無意識的な転移—逆転移の相互作用が新しい経験の契機となり、クライアントの行動に変化が生じて、その後に洞察が生まれる
---------	---	---

ここで、釜の指摘について順を追って確認していく。まず、第一に、焦点を当てる主題の差異として、古典的精神分析が、過去の「かつてあの場で」の無意識的経験に、そして「対内的な心的世界」に焦点を当てたのに対して、対人関係精神分析は、現在の「今ここで」の面接関係の「対人関係」に焦点を当てたことが指摘されている。

第二に、クライアントの問題の捉え方の差異として、古典的精神分析が、クライアントの訴える問題を「心理的な病理」として捉えたのに対して、対人関係精神分析は、「生きていくうえでの困難」として捉えたことが指摘されている。この差異は、クライアントの問題を主として個人の精神内界に起因するものと捉えるか、対人間の関係のあり方に起因するものと捉えるかの差異とも関連が深い。

第三に、症状の捉え方の差異として、古典的精神分析が、幼児期の対人関係に起因する自我発達の問題として、主として抑圧による防衛の問題として捉えたのに対して、対人関係精神分析は、自己システムのあり方に起因する問題として、不安に対する主として安全保障操作の問題として捉えたことが指摘されている。これは、個人が用いる主要な防衛機制として何を想定するかとの相違の現れとして理解できる。

第四に、セラピストの姿勢と技法に関する考え方の差異として、古典的精神分析が、セラピストの中立的な姿勢を重んじて、逆転移を最小限に抑えて、クライアントの心の中のあり方についての解釈を重視したのに対して、対人関係精神分析は、セラピストの参与観察的な姿勢を重んじて、逆転移を不可避のものとして捉えて、転移—逆転移を新しい経験として焦点化することを重視したことが指摘されている。この差異は、心理療法の過程においてセラピストがクライアントとの関係において、どのような場所に位置しているのかという、非常に重要な問題についての基本的な見解の相違の反映でもある。

第五に、心理療法の作用についての考え方の差異として、古典的精神分析が、過去の経験、転移関係、そしてクライアントの病理とを結びつけた解釈を心理療法の契機とするのに対して、対人関係精神分析は、面接における「現実の関係」に基づいて生じる転移—逆転移の相互作用から生まれるクライアントの新しい経験を心理療法の契機とすることが指摘されている。この違いについては、本論文において、この後、中心的に論じられること

になる。

第六に、心理療法の過程の捉え方の差異として、古典的な精神分析においては、無意識的な転移—逆転移についてのセラピストの解釈がクライアントに洞察を生み、それがクライアントの行動の変化につながると捉えられたのに対して、対人関係精神分析においては、無意識的な転移—逆転移が新しい経験を生む契機となり、クライアントの行動に変化が生じて、その後に洞察が生じると捉えられたことが指摘されている。この差異は、先ほどの第五の点と関連して、本論文の後半においてエナクトメントをめぐる議論として論じられることになる。

以上を要約して、鑪（2019）は古典的精神分析と対人関係精神分析を対比して、「関わりのあり方として『治療者の位置をどこに置いているか』に、大きな違いがある」（p.5）と述べている。このことを筆者なりにまとめ直すと、次のように言えるだろう。古典的精神分析におけるセラピストは、クライアントから情緒的な距離を置いて、転移を通じてクライアントの心の中の構造を分析して、解釈して、クライアントを洞察に導く役割を果たすことが想定されている。他方で、対人関係精神分析におけるセラピストは、クライアントに情緒的にも否応なく巻き込まれながら、クライアントとセラピストの二人の間に起きていることを理解しようと努める中で、クライアントに新しい経験が生じる契機を生む役割を果たすことが想定されている。つまり、対人関係精神分析は、クライアントの無意識に、あるいは広い意味で、気づいていないことに接近していこうとする点で、「精神的」であり、古典的精神分析と基本的な考え方を共有しているが、一方で、無意識に接近していこうとする際に大切にしている観点や、クライアントへのセラピストの関わり方において、大きな違いがあると捉えることができると思われる。

第3節 一者心理学と二者心理学

前節で検討した Lionells ら（1995）や鑪（2019）の見解を踏まえたうえで、筆者の考えでは、古典的な精神分析と対人関係精神分析の最も際立った違いは、前者が「一者心理学（one person psychology）」の理論的および実践的体系であるのに対して、後者が「二者心理学（two person psychology）」の理論的および実践的体系であることとして捉えることができるように思われる。一者心理学とは、筆者なりに簡潔に述べれば、クライアントのパーソナリティをそれだけで独立した閉じた体系として理解する立場であり、二者心理学とは、クライアントのパーソナリティを他者との現実の相互作用に開かれた体系として

理解する立場である。ここでは以下に、一者心理学と二者心理学のそれぞれの内容と相互の違いについて、Gill (1994)、Wachtel (2011)、吾妻 (2009)、一丸 (2010) の四者それぞれの議論を通じて検討する。

Gill (1994) は、精神分析における内的なものと外的なものとの関係を論じるという文脈で、一者心理学と二者心理学の区別を論じている。Gill は、クライアントの内的な欲動や空想や対象関係の変遷に注目するのが一者心理学であり、そうした内的なものと現実（外的なもの）との相互作用に注目するのが二者心理学であるという立場をとっている。そのうえで、Gill は、一者心理学と二者心理学の区別をめぐる議論は、精神分析における分析状況についての理解をめぐるものであって、実際の臨床においては、分析家はさまざまな程度に、一者心理学と二者心理学の両方の文脈で仕事をしていると指摘している。そして、分析状況においてはセラピストの振る舞いはどのようなものであれ、必然的にクライアントとセラピストにとって対人的な意味を帯びるのであり、セラピストはそうした意味に気づいていなければならないことを強調している。クライアントの反応は、現在生じている相互作用にまったく基づかないような不合理な反応ではないとしながらも、他方で、精神分析的には現実には何があったかではなくて、それがどのように経験されたかが扱われねばならないとも強調している。

しかしながら、筆者の見解では、「現実がどのように経験されたか」をめぐる考え方そのものが、一者心理学と二者心理学とは異なるのであり、Gill の議論は実質的には一者心理学の立場からのものであると位置づけられるように思われる。Gill の立場は、一見したところクライアントとセラピストの間の対人間の相互作用を扱っている点で二者心理学的なものに映るが、実際にはクライアントの主観的な経験のあり方に焦点を当てようとしている点で一者心理学的である保守的な立場であるというのが、筆者の見解である。

Wachtel (2011) は、比較的明快に、一者心理学はセラピストがクライアントに影響を及ぼさずに面接関係の中で起きている事を観察できると考えている立場であり、二者心理学はセラピストが必然的に影響を及ぼすと考えている立場であると説明する。Wachtel の考えでは、二者心理学はセラピストの主観性を積極的に利用する立場である。Wachtel は、見かけのうえでは二者心理学に見え、自らもそうであると主張しながら、実質的には一者心理学の枠組みを維持している臨床家が多い事を指摘する¹¹。例えば、Wachtel (2008) においても、面接関係と早期母子関係の間には二者心理学的な視点が適用されていても、そ

¹¹ Wachtel (2011) の考えでは、とりわけ、対象関係学派、中でもクライン派にそうした臨床家が多いという。

れ以外の人生ならびに生活の広大な領域に関しては二者心理的な探究の対象から排除されている例が指摘されている。この文脈において、Wachtel は、限定的な二者心理学的視点と、より包括的で徹底した二者心理学的視点が容易に混同されてしまうことに警告を発している。

吾妻（2009）は、一者心理学が主体と対象を一つのユニットとして、セラピストをクライアントにとっての対象としてのみ考える傾向が強いのにに対して、二者心理学を、主体と主体のユニットとして、セラピストの主観性と主体性を重んじる立場として、両者の立場の対比を試みている。そして、一者心理学と二者心理学の関わりについて、Aron（1996）と Benjamin（1988）を参照しつつ、「Benjamin や Aron は、人間の心の歴史や特異性などの一者心理学的側面を認識しつつ、それを否定することなく、精神内界と対人間的経験との間の絶えざる緊張を通して、二者心理学を一者心理学の伝統と統合しようとしている」（p.156）と指摘している。吾妻の立場は、一者心理学と二者心理学の相違を強調するよりも、その両者のバランスをどのように実現するかに重点を置くものとして理解できるものであると思われる。

一丸（2010）は、一者心理学と二者心理学の相違について、最も簡明な理解としては、前者が、Freud の欲動論的理解に根差して、人の行動を性衝動や攻撃衝動といった欲動の満足を求めるものとみなすのに対して、後者が、対象関係学派に根差して、人の行動を対象との関わりを求めるものとみなすとする見方であろうと指摘する。しかし、一丸の考えでは、一者心理学と二者心理学との間には、「そうした違いを超えて『分析家の基本的態度や考え、分析家と被分析者との関係、分析療法過程』といったことの実際や理解といったことについて決定的な違いが認められる」（p.2）という。

一丸は、心理療法家がクライアントとどのように関わろうとしているのか、そのあり方の違いに注目する。一丸の印象では、あるタイプの心理療法家は、面接の場において心理療法家の眼前で生じるクライアントの振る舞いはクライアントの問題の表れであり、心理療法家はその正確な理解とそうした理解に基づいた介入をするべきであり、心理療法家個人としての影響を及ぼしてはならないと考えている、あるいは感じているように思われるという。一丸は、このようなあり方が一者心理学のあり方ではないかと指摘する。他方で、別のタイプの心理療法家は、クライアントの振る舞いはセラピストのあり方に対するものでもあり、心理療法家はクライアントが自分のことを理解する助けになると感じられるようなクライアント理解と介入をするべきであり、心理療法家個人としてのあり方は不可避

的に及んでしまうものだと考えている、あるいは感じているように思われるという。一丸は、このようなあり方が二者心理学のあり方ではないかと指摘する。

一丸の指摘で重要なことは、一者心理学と二者心理学の相違は、単に認識論的な相違に収まらず、あるいは認識論的な相違の問題ではなく、心理療法家がクライアントとどのような関わりを持って心理療法の過程を進めようとするかの違いであることを、明確に指摘していることである。

ここまでの検討を踏まえて、一者心理学と二者心理学についての筆者の理解を示しておきたい。筆者の理解では、一者心理学とは、クライアントの問題や振る舞いを理解するにあたって、それをもっぱらクライアント個人の内面の力動の表れとして、クライアントのパーソナリティをある種の閉じた体系として理解する立場である。その立場においては、セラピストはそうしたクライアントの内面を、原理的にはクライアントから影響を受けずに、またクライアントに影響を及ぼさずに観察できる位置にいと想定されている。他方で二者心理学は、クライアントの問題や振る舞いを理解するにあたって、それをもっぱらクライアントが現実に関係するクライアントを取り巻く他者たちとの間に営んでいる相互作用のあり方の表れとして、クライアントのパーソナリティをある種の開かれた体系として理解する立場である。その立場においては、セラピストはそうしたクライアントの相互作用のあり方に、原理的にも影響を受け、同時にまた影響を及ぼすことを避けることができない位置にいと想定される。

上述の筆者の理解の仕方には、まだ説明を補足すべき不十分な点が残されているが、それは本論文において、これ以後さまざまな形で繰り返し検討されることになる。一者心理学と二者心理学は、必ずしも相互排他的な考えではない。むしろ、どちらか一方の立場から「のみ」心理療法を行うことは、心理療法が本来的に持つ可能性を不当に狭めるものになる危険性が高いと思われる。筆者自身は、二者心理学の立場を重んじており、これ以後の本論文の論述もそうした立場からのものである。あくまで、筆者の意図は、一者心理学の考え方を排除することにあるのではなく、一者心理学と二者心理学の違いを丁寧に検討したうえで、相互の違いを認識し理解することにある。なぜなら、Wachtel (2011) が指摘していたように、自称「二者心理学者」が実際には一者心理学的であったり、あるいはその逆であったりという混乱、あるいは認識と理解の不十分さが、至る所で見受けられるからである。

以上、本章では、本論文の中心的な焦点の一つである未構成の経験の概念の提唱者であ

る Stern の臨床的立場の背景を確認する目的で、対人関係精神分析の歴史と特徴、そして対人関係精神分析の特徴を最もよく表していると筆者が考える、一者心理学と二者心理学という視点について説明を試みた。こうした確認を踏まえて、次章では、Stern の臨床理論を詳しく検討する。

第2章 Sternの未構成の経験の概念

第1章において、対人関係精神分析の歴史と特徴を、本論文の論述に関わる範囲で概観した。筆者が「経験の構成モデル」と名づける考え方の源である Stern は、ホワイト研究所を拠点に活躍する、この対人関係精神分析の流れに属する精神分析家である。こうした背景を踏まえて、本章では、Stern (1997, 2010, 2015, 2019) が提唱する未構成の経験 (unformulated experience) の概念について詳しく検討する。

第1節 経験の構成的性質

Stern の出発点にして、最も重要な考えは、経験は構成されるものだという点にある (Stern, 1983, 1997 ; 小松, 2018b)。そこから、未構成の経験という Stern 独自の概念が練り上げられていったのである。未構成の経験の概念についての検討に入る前に、「経験は構成される」とはどのような事態を指しているのかについて、まずは概略を検討する。

一般に、私たちが外界を認知するとき、外界に存在する物理的的刺激が感覚を生み、感覚が知覚として意味づけられ、複数の知覚が関係づけられて認知としてまとめあげられるといった過程が生じているものと想定されている。さしあたり、多様な刺激や要素をある一定の何かとして把握する働きのことを、「構成する」ことの緩やかな定義として考えを進めることとする。このような考え方の枠組みからは、外界の多様な物理的な刺激は、主体¹²がそれらのある一定の認知として「構成する」ことで、主体の自覚にもたらされ、意識されるようになる、捉えることができると思われる。

私たちが経験という言葉で一般に指すものの内実は、上に述べたような認知よりも、より包括的であり複雑である。したがって、認知と経験とを単純に同一視することはもちろんできないだろう。しかしながら、そのような留保をつけた上であれば、上に述べたような意味と似た意味で、経験は構成されることにより、意識可能なものとして自覚にもたらされ、言葉にすることができるようになると捉えることができるように思われる。経験として構成されなければ、私たちはそれについて、少なくともはっきりとは、自覚することも言葉にすることもできないと思われる。

「ある事態なり状況なりが経験として構成されれば」と述べたが、本論文では、ある事

¹² 経験を構成する働きが発動する源を指す包括的な用語として、本論文では「主体」を用いる。この「主体」と、「自我」や「自己」といった概念との関連及び異同については精密な議論が必要となるが、それは本論文では割愛する。

態なり状況なりが経験として構成される以前の状態を「体験」と呼んで区別することにする。そうした区別のもとで、体験は直接的には自覚されず、経験として構成されることで自覚できるようになる、あるいは、経験とは構成されて自覚できるようになった体験であると言える。

もちろん、ここで問題になるのは、「構成する」とは、より具体的にはどういうことなのか、何をすることなのか、何が起きることなのかということである。この問題こそが、本論文全体を貫く問いであり、主題である。したがって、本論文全体がこの問いに対する回答の試みであり、解明の試みである。筆者としては、さまざまな角度からこの問いに光を当てつつ、それを描き出すことに努めたい。本章では、そのために基本的な考え方や概念のいくつかを提示して、予備的な考察を行う。

私たちが経験を言葉にして語るとき、言葉にして語られたその経験は、語り手の体験の全体像を反映しているわけではない。それは体験の一部であり、経験は構成されるという立場からすれば、語られるその時点において言葉にして構成されている経験でしかない。そのように考えてみれば、私たちが語る経験は、体験に基礎づけられているのと同様に、あるいはそれ以上に、構成する働きに基礎づけられていると言える。

構成する働きは、おおまかには、語り手が自分の体験の一部に注目して、それを言葉で表現して意味づけることとして説明できる。ここで注意が必要なのは、構成する働きとは、表現することを通して意味づける働きであることである。このような構成する働きと対比して考えられるのは、写實的に記述する働きである。写實的に記述する働きは、すでにそこにはっきりとした形を備えてあるものを、言葉で表現して記述する働きである。写實的に記述する働きにおいては、それを言葉で表現する前と後で、その言葉が指し示す対象そのものに変化はないと考えられる。これに対して、構成する働きは、まだ形のはっきりしないものを、何ものかとして見立てて言葉で表現する働きである。したがって、構成する働きと言葉で表現する働きは切り離すことができないものであり、言葉で表現する前と後では、その言葉が指し示す対象は姿を変えていることになる。

このように、経験を語ることを「構成する働き」と捉えるか、「写實的に記述する働き」と捉えるかには、経験に対する捉え方に大きな違いがあると言えるだろう。つまり、前者においては、経験は語られることで意味づけられる、そして語られる前にははっきりとした姿を持たないと捉えられているのに対して、後者においては、経験は語られる前から一定の姿を取り意味を持っていると捉えられていることになる。そして、こうした経験の捉

え方のあり方は、後の章で検討するように、心理療法の作用をどのように理解するか、つまり心理療法においてクライアントとセラピストはいったい何をされていて、それはどのような意味があるのかを考えるうえで、本質的な意味を持つことになると考えられる。

第2節 未構成の経験とは¹³

ここまで、経験は構成されるという考え方の輪郭を見てきた。「構成する」という働きについて考えるうえでは、その作用が働く前の状態について考えてみるのが一つの接近法となると思われる。構成され、経験として言葉で語られる前の体験は、つまり経験になる前の体験は、どのようになっているのだろうか。Stern (1983, 1997) の未構成の経験という術語は、このような体験を概念化して表現したものである。以下に、Stern の考えをたどって検討する。

Stern は、無意識的であるとはどういうことか、クライアントがそれまで気づかずにいたことに気づくとはどういうことなのかという問題意識から、自らの考えを進めている。伝統的に精神分析の世界においては、何かが無意識的であるということは、基本的に心的防衛に動機づけられた抑圧の働きの結果として理解されてきたと言える (Freud, 1915a, 1915b)。そこでは、抑圧されて無意識的である心的内容は、象徴化されて一定の輪郭と意味を備えたものであると理解されていると捉えられる。これに対して、Stern は、無意識的であるものの中には、そもそも象徴化されたことがなく、一定の輪郭と意味をまだ持たないものがあるとして、経験としての形がまだ定まらず、まだ意識化されたことがないものを、未構成の経験と呼んで概念化した。未構成の経験は、まだ主体によって注意を向けられたことがなく、意識されたことがない、意識にとって潜在的な可能性のままにとどまっている経験である。Freud に始まる伝統的な立場が、あることが無意識的であるのには何らかの作用が働いていると考えるのに対して、Stern の立場は、意識的であることの方にこそ何らかの作用が働いていると考えるものである。

Stern は、Gadamer (1960) の哲学的解釈学を参照して、私たちの意識的な経験は、基本的に何らかの解釈の産物であるという立場をとる。ここで退けられているのは、意識的な経験を客観的な現実世界をあるがままに写しとるものとみなす立場である。現実には客観的な意味がありそれを歪みなく認識することで経験の正しさが保証されるというような、ある種の真理の対応説の立場を退ける Stern は、経験の意味は、社会的相互作用に強く規

¹³ 本節は、小松 (2020) の一部を加筆修正したものである。

定されるとともに、経験に対する見方によって多様であり、唯一の正しい意味が存在するという考えは適切ではないとする、社会構成主義的な立場（Berger & Lookman, 1966 ; Gergen, 1997）に立つ。

未構成の経験は、そこに主体による注意が向けられて、主体により何らかの一定の意味で解釈されてはじめて、意識的な経験となる。このことを Stern は、経験が構成されること（formulation）として捉える。経験には多様な構成の可能性があるとする Stern の立場からすれば、私たちが一度構成した経験もまた、本来は、常に別の意味を帯びた経験として構成し直される可能性に開かれていると考えられる。

このように、一般に私たちは、未構成の経験の多様な潜在的な可能性の中から、何らかの解釈を選び取ることによって、自分の経験を構成していると考えることができる。ただし、ここで注意が必要なのは、私たちは、けっして思うままに自由に自分の経験を構成しているのでもなければ、潜在的な可能性のすべてを構成できるわけでもないということである。日常的に、私たちが経験として意識しているのは、未構成の状態にある経験の広大な可能性の一部分にすぎない。経験の大部分は未構成の状態にあるのが常態であり、注意を向けられて意識されるのはその限られた一部に過ぎない。

未構成の経験は、文字通りまだ構成されていない経験である。構成された経験は、つまり言葉にして語られた経験は、言葉にされて聞き届けられたり、書き留められたりすることができるという意味で、存在していると言える。しかし、未構成の経験は、それと同様の意味では存在しているとは言い難い。構成された経験が、一定の輪郭と意味を備えて現実化している現実態であるのに対して、未構成の経験は、まだはっきりとした輪郭も意味も備えていない、経験になる以前の可能態であり、潜在態である。

Stern は、以上のように経験の一部が主体により注意を向けられず、意識されていない状態にあることを、そして未構成の経験が可能態であり潜在態である事態を、Sullivan（1953a, 1953b）にならって、解離（dissociation）の働きの結果として理解する。

解離という術語は、心理臨床の世界においては、精神医学における症候学で用いられる言葉として、心因性健忘や意識の変容状態、感覚の消失、交替人格の出現といった症状と結びついて用いられ、理解されることが多い（柴山, 2007）。Stern が Sullivan に倣って用いる解離という術語の意味は、それとは異なった意味であることに注意が必要である。Stern にとって、そして Sullivan にとって、解離とは意識との関係のあり方を指す術語である。最も広い意味では、それは意識とのつながりが無いことを意味しており、具体的な

術語の用法としては、記述的な意味と力動的な意味の二つの用法がある。記述的な意味は、単に意識とのつながりがなく、意識されていないという状態を指し示す。力動的な意味は、意識とのつながりが無い状態を引き起こしたり、維持したりする働きを指し示す。Stern は、前者を弱い解離 (dissociation in weak sense)、後者を強い解離 (dissociation in strong sense) と呼んで区別することがある。解離という言葉を読み解く場合には、コンテクストに応じて注意深くこれらの用法を区別する必要がある。

Stern が未構成の経験は解離されていると捉える場合にも、上に見た二つの用法の区別を押さえておく必要がある。つまり、未構成の経験は意識とつながっていない、意識されていないという意味で解離されていると捉えられるとともに、意識とつながらない、意識されない状態に保持されているという意味でも解離されていると捉えられる。ここで重要になってくるのは、「意識されない状態を保持する」という働きを、どう理解すればよいかという問題である。なぜなら、働きとしての、力動的な意味での解離をどのように理解するかということが、経験が未構成であることをどう理解すればよいかということと、深く結びついているからである。

Stern は、この問題を理解するための補助線として、解離と未構成の経験との関係を、抑圧と抑圧された経験の関係と対比して論じている。理解を明確にするために、以下に Stern の議論を参照しつつ、この問題を検討する。

第3節 解離と抑圧の対比

まず、私たちの日常的な考え方に比較的なじみ深いと思われる、抑圧と抑圧された経験の関係から見ていくこととする。前節でも触れた通り、抑圧は、Freud が最も基本的と考えた防衛機制であり (Freud, 1915a)、古典的な精神分析の世界においては、抑圧は個人のパーソナリティを理解するうえで、中心的な役割に位置づけられていると言える (Brenner, 1955 ; Menninger, 1959)。

一般に、抑圧された経験もまた、解離されたものと同様に、無意識的な状態にある。そして、抑圧された経験を無意識の状態に保っているのが抑圧の働きであると理解される。つまり、ある経験が、抑圧の働きによって意識されない状態に保持されているとき、その経験を抑圧された経験と呼ぶのである。

解離との対比において、ここでまず重要なことは、抑圧された経験はすでに構成された経験だということである。つまり、抑圧された経験は、はっきりとした輪郭と意味を備え

ている。ということは、抑圧された経験は、少なくとも一度は、はっきりと意識されたことがある経験であり、それが抑圧の働きによって意識されない状態、つまり無意識的な状態に保持されているのである。かつてはっきりと意識されたことがある経験を無意識的な状態に保持する、つまり思い出さないようにするには、何らかの心的な努力が必要だと考えられる。例えば、Stern (1997) はこのことを、抑圧された経験を空気がいっぱいに入ったビーチボールにたとえて、ビーチボール（抑圧された経験）が水面上（意識）に浮かび上がらないようにするには、水面下（無意識）に押さえておく力が必要であるというイメージを用いた比喻によって説明を試みている。

このように、抑圧された経験がすでに構成された経験として捉えられるのに対して、解離された状態にあると捉えられる未構成の経験は、まだ構成されていない。つまり、それはまだはっきりとした輪郭も意味も備えたことがない、したがってまだ意識とつながったことがない、あるいは意識とつながったとしても、はっきりとした形をまだ持たないので、はっきりと意識されたことがない、そのような経験である。

それでは、そのような、そもそもはっきりとした形も持たず、はっきりと意識されたこともない経験を、意識されない状態に保持するとはどういうことだろうか。これまで見てきたように、Stern のように経験は構成されると考える立場においては、経験がはっきりとした形を備えるには、あるいは言葉にされて自覚されるには、構成する働きが必要であった。つまり、未構成の経験は構成されない限り未構成のままに留まると考えられる。このように考えてくると、未構成の経験を意識されない状態に保持することが解離の働きであると捉えるということは、解離の働きをある種の「負の作用」として捉えるということであることがわかる。解離とは、未構成の経験を意識されない状態に保持するために何らかの積極的な作用を及ぼす働きではなく、構成するという心的な努力を必要とする作用が働かないという、消極的な作用として、あるいは働きの欠如として捉えられる。このことを、Stern (1997) は、未構成の経験を水底にある石にたとえて、何もしない限り水底の石（未構成の経験）は水面下（無意識）に留まり続けるのであり、水底にある石（未構成の経験）が水面上（意識）に姿を現すには、何かがそれを持ち上げねばならないというイメージを用いた比喻によって説明を試みている。

このように、抑圧の働きと解離の働きを対比すると、抑圧の働きを中心とした見方では、経験は意識的であることが基本であり、経験が無意識的であるためには努力を要するのに対して、解離の働きを中心とした見方では、経験は無意識的であることが基本であり、経

験が意識的であるためには努力を要するのである。ただし、厳密には、抑圧を中心とした見方における「経験」と解離を中心とした見方における「経験」とでは、その意味する内容ばかりでなく、その前提となる経験に対する捉え方も異なっていることに注意しなければならない¹⁴。

第4節 解離された経験と抑圧された経験の対比

前節の議論を踏まえて、解離された経験、すなわち未構成の経験の性質について、抑圧された経験と対比しながら検討する。

未構成の経験も抑圧された経験も、共に意識されない状態に保持されていると捉えることができるが、その「意識されない状態に保持される」心の働き方には違いがあると考えることができた。その考え方にしたがえば、未構成の経験と抑圧された経験とでは、意識されない状態そのもののあり方、つまり無意識的であるということの意味が異なると考えられる。例えば、前節で見たように、抑圧された経験ははっきりとした輪郭と意味を備えているのに対して、未構成の経験ははっきりとした輪郭も意味も備えていないと捉えられる。二種類の経験の間のこの違いを、私たちはどのように考えればよいのだろうか。本節では、それを「存在のあり方」の違いという観点で検討したい。

ここで素朴な問いを立ててみたい。未構成の経験は、「どこにある」のだろうか。この問いの意味そのものを少し明確にするために、まず抑圧された経験の方から考えを進めてみたい。

無意識に関する Freud の初期のモデルは、一般に「局所論」として知られている (Freud, 1915b)。この Freud の初期の考えを筆者なりに簡略化して説明すると次のようになる。Freud は心を意識（および前意識）と無意識に分けて、ある表象（心的なイメージ）が意識という「場所」にあるときには意識され、無意識という「場所」にあるときには意識されずに無意識であると考えた。多くの表象は意識と無意識という場所の間を自由に行き来できるが、抑圧された経験は、抑圧するという働きの効果として、無意識という場所にとどまり続けて、意識という場所に入ることはできない。しかし、無意識の中にある表象は、そのままでは直接意識に入ることはできないが、言い間違いややり損ない（失錯行為）、あるいは夢に見られるという経路を通して、変形された形で意識に入ることができると考え

¹⁴ さしあたり、解離を中心とした見方における経験の捉え方がこれまで見てきた「構成モデル」であるのに対し、抑圧を中心とした見方における経験の捉え方を「実在モデル」として捉えておきたい。

られた¹⁵。この考え方にしたがえば、抑圧された経験は表象という形で無意識の中にあり、その痕跡は変形された形で意識の中に現れるということができる。このことは、心理療法の作用を考えると、意識の中に現れた経験を連想を通じてたどっていくことで、無意識の中に存在する抑圧された経験にたどり着くことができるという考え方に結びつく。

それでは、未構成の経験の方はどうであろうか。未構成の経験は、はっきりとした輪郭も意味も備えていない、漠然とした経験であり、そもそも意識することができない経験であると捉えられる。抑圧された経験が、無意識という場所に存在するから意識されない、つまり無意識的であるとすれば、未構成の経験は、意識できるような形では存在していないから意識されない、つまり無意識的であると捉えられる。端的に表現すれば、意識にとってはまだ存在していないから意識されないのである。また、未構成の経験は意識にとって現実態としては存在せず、ただ可能態あるいは潜在態としてのみ存在するという見方もできるだろう。もう一度整理すれば、抑圧された経験は「存在はするが、意識の中に存在しない」から無意識的であるのに対して、未構成の経験は「意識に現れうる形では存在しない」から無意識的なのである。こうした抑圧された経験と解離された経験の違いを、対比する形で筆者なりに示したのが、以下の表3である。

表3 抑圧された経験と解離された経験との対比

	抑圧された経験	解離された経験
状態	明確な輪郭と意味がある	明確な輪郭も意味もない
構成の有無	されている	されていない
様相	現実態	可能態
表象性	表象的	非表象的
象徴化	されている	されていない
意識とのつながり	ある	ない
基盤的な考え方	实在モデル	構成モデル

未構成の経験は、意識に現れうる形では存在しないからといって、どこにも存在しないとは言えないだろう。未構成の経験、あるいは経験になる以前の体験は、意識されること

¹⁵ Freud の考え方をより丁寧に説明するためには、本来はリビドー論を導入してリビドーと表象の結びつきについて説明する必要があるのだが、ここではその説明を割愛して簡略化した説明にとどめる。

はなくても、私たちに何らかの影響を与えていることは確かであると思われる。それでは、そもそもこのような未構成の経験は、いったいどのような過程を経て構成され、意識されるようになるのだろうか。この点について、次章で検討する。

第3章 経験の構成と対人関係の場

第2章において、本論文の主題である経験の構成モデルの考え方の源となる Stern の未構成の経験の概念について検討してきた。Stern の考えを筆者なりに簡略化して整理すると、未構成の経験は、解離された状態にある体験であり、未構成の経験が何らかのやり方で構成されることで、経験は意識可能なものとなり、語りうるものとなるのであった。そこで、経験が構成されるということは、どのようなことであるのか、そしてそれはどのようにして生じるのかという問題を検討することが、本章の課題である。

第1節 未構成の経験が構成されるということ

第2章の第3節において、解離を中心とした見方においては、経験は無意識的であることが基本であり、経験が意識的であるためには努力を要すると述べた。このことを経験は構成されるとする立場から記述し直せば、経験は未構成であることが基本であり、経験を構成するためには努力を要するというに相当する。それはつまり、私たちの体験の大部分は、通常、未構成のままであり、私たちが経験として構成して自覚するのは、自分の体験の一部に過ぎないということである。それでは、私たちは自分の体験を、たとえ一部とはいえ、どのようにして、どのような過程を経て経験として構成して自覚するようになるのであろうか。

例えば、私たちは折に触れて自分の体験を振り返る。そのようなとき、私たちはその体験を言葉にして、その体験について内省する。通常、私たちはこのような形で、自分の体験の一部を、経験として構成している。自分の体験について振り返る動機づけがある場合には、経験の構成は生じ得る。しかし、その場合でも、構成される経験は体験の一部に過ぎない。私たちは、自分の体験について振り返るそのときの動機づけのあり方に沿って、その動機づけのあり方に適うように自分の体験の特定の部分に注目し、その部分について特定の意味づけを行っていると考えられる。その場合に注目されない部分や、注目はされていてもそのとき行われる意味づけ以外の意味の可能性は未構成のままに留まる。ある特定の体験について、繰り返し何度もさまざまな角度、側面から振り返ることはできるだろう。それでも、そもそも私たちが自分では注意を払うことがない部分や、気づかない意味の可能性は、未構成のままに留まり続けるだろう。そのようにして未構成に留まり続ける体験は、経験として構成されることはないのだろうか。また、経験として構成されない、

意識されることのない体験が、私たちにとって存在しているのだとすれば、それはどのようなあり方によってなのだろうか。

私たちはふだん、多くの言動を特別な注意を払うことなく、無自覚のうちにやっている。そうでなければ、日常生活を円滑に営むことは難しいだろう。通常、私たちの意識に上るのは、私たちの言動の一部に過ぎない。一方、私たちの言動は、他者にとっては観察可能な事象である。例えば、当人自身は意識しておらず無自覚であっても、他者には、その当人の言動から、あの人は機嫌がよいとか、怒っているとか、悲しそうだとか、当人の心理状態が感じ取られることが少なくない。

ここで例を挙げて考えてみたい。私が誰かに「おはよう」と挨拶したとする。そのとき、私自身はこれといって自分がいつもと違うことに気づいていないとする。相手も特に感じるところなく、ただ「おはよう」と挨拶を返してやり取りが終わるかもしれない。しかし、相手には、私の挨拶から、どこことなく私が疲れているようだと感じられたとする。このとき相手は、やはりただ「おはよう」と挨拶を返すだけの場合もあるだろう。また、場合によっては、「疲れているようだね」と私に声をかけるかもしれない。相手から「疲れているようだね」と声をかけられた場合、私はそれにどのように応じるだろうか。私は自分では少しも疲れているとは感じていなくて、「いや元気だよ」と答えるかもしれない。あるいは、相手から「疲れているようだね」と声をかけられて初めて、私は確かに自分が疲れていることに気づくかもしれない。

このように、自らは自分の体験を振り返る動機づけがなくても、私たちは他者からの言葉かけや働きかけによって、自分の経験を構成する場合がある。むしろ、起源にさかのぼって考えれば、経験は、そして私たちの心は、そもそもの初めから他者からの言葉かけと働きかけによって構成されると言えるだろう¹⁶。Wittgenstein (1953) が「私的言語」の不可能性を論じたのと似た意味で、「私的経験」は成立不可能であるように筆者には思われる。なぜなら、経験を構成するということは、体験の一部を何らかのやり方で意味づけることであり、「意味」はそもそも他者から意味あるものとして受け取られ、他者との間に流通可能でなければ、文字通りに「無意味」にしかならないからである。

先ほどの例に戻って、もう少し考えてみたい。「疲れているようだね」と相手から声をかけられてはじめて「自分は疲れている」と私が気づいた場合、「自分は疲れている」という

¹⁶ 経験の起源は、他者からの呼びかけにあると、筆者は考えたい。経験は、それに呼応する他者からの呼びかけを受け、その呼びかけを受け止めることではじめて立ち上がるのではないだろうか。

私の経験はいつの時点から存在していたのだろうか。例えば、私は「疲れているようだね」と言われて、そういえば朝起きたときから何だか気分が冴えなかったことに気づき、「そうだ。自分は起きたときからからずっと疲れていたんだ」と思うかもしれない。この場合、私の〈疲れている感じ〉は、私が朝起きたときからずっと存在していたのだろうか。それとも、声をかけられて気づくことではじめて存在するようになったのだろうか。

経験は構成されるという立場から考えれば、気づくことではじめて存在するようになるという捉え方が適切であるように思われる。それでも、私たちには、「朝起きたときからずっとそうだったことに今気づいた」と感じられることが少なくない。このように考えてみると、経験が新しく構成されたとき、私たちはその時点からさかのぼった過去も含めて事後的に経験を書き換えることも行っている場合があると考えられる¹⁷。

ここまで検討を進めてきてわかることは、未構成の経験、すなわち解離された経験は、意識にとっては存在せず、意識に現れることもないが、言動を通して他者に対しては現れることがあるということである。つまり、主体にとって解離された経験は、自分に対しては現れず、他者に対して現れるのである¹⁸。

第2節 「正しい」構成はあるのか

先ほどの例に戻って、「おはよう」と挨拶した相手から「疲れているようだね」と声をかけられても、自分では少しも疲れているとは感じていなくて、「いや元気だよ」と答える場合について考えたい。この場合には何が起きていると考えられるだろうか。相手か私か、どちらかが間違っているのだろうか。それとも二人とも正しいのだろうか。また、「疲れているようだね」と声をかけられて、「自分は疲れているのだ」と気づく場合と、疲れているとは感じなくて、「いや元気だよ」と答える場合とでは、いったい何が違うのであろうか。そもそも、体験はどのような場合には経験として構成され、どのような場合には構成されないのだろうか。

まず前者の問いに関連して、次の問題を考えてみたい。経験の構成に「正しい」構成というものはあるのだろうか。つまり、構成された経験に、正解や間違いはあるのだろうか。経験は構成されると考える立場においては、答えは否定的である。この立場からすれば、

¹⁷ 第11章で改めて検討するが、池見(2016)によれば、Eugene T. Gendlinはこうした経験の書き換えを「推進された過去」(carried forward was)と呼んでいたという。

¹⁸ このことが、本論文で後に第3部で詳しく検討するように、Sternの独自のエナクトメント概念に結びついている。

それに照らし合わせて構成された経験の正誤を判定することができるような外的な基準は、存在しないと考えられる¹⁹。「疲れているようだね」という相手による構成（厳密には、相手は私の体験を直接的に経験として構成しているわけではもちろんなく、私の様子についての相手自身の経験の構成である）も、「いや元気だよ」という私による構成も、どちらかが正しいわけでも、どちらも間違っているわけでもない。経験の構成に対する何らかの評価基準、判断基準があるとすれば、それはそのとき・その場におけるふさわしさ、良い意味でのもっともらしさ、適合性である²⁰。では、「そのとき・その場における」というときの「その場」とは何だろうか。この問いは、経験が構成される場合と構成されない場合の違いは何かという先ほどの後者の問いにもつながってくることになる。

私たちが自分の体験を経験へと構成する営みは、常に特定の具体的なコンテキストの中で行われる。もし、体験についての経験の構成が、コンテキストから切り離された形で、コンテキストの影響を受けない純粋な内省によって行いうると考えるとすれば、経験の構成はいつ、どのような状況のもとに行われても、あるべき一つの姿にたどり着くはずであると、少なくとも理念的には想定できるだろう。しかし、そのような考え方には大きな疑問が生じる。コンテキストを離れた経験は、はたして何らかの意味を持ちうるだろうか。そのような経験は、それを依然として経験と呼ぶとしても、意味を抜き取られた、いわば「脱色された」経験ではないだろうか²¹。例えば、言葉の意味は、日常的な実際的な場面においては、辞書的な定義によってではなく、その言葉がやり取りされる具体的なコンテキストの中で決まってくる。それと同様に、経験を構成する営みは、特定の具体的なコンテキストから切り離すことができないのではないだろうか。

先ほどの、「その場」とは何かという問いに対する答えが、このような意味でのコンテキストである。そして、より正確には、先ほどの問いの立て方は不正確であると言わねばならない。コンテキストは、ある特定の経験の構成の的確さを判断するための基準ではない。コンテキストが、経験の構成のあり方を規定しているのである。そのような意味で、経験の構成とコンテキストは切り離して考えることができないのである。

本論文の主題は心理療法の作用原理にある。そこで、本論文では、経験が構成されるコンテキストとして、クライアントとセラピストの関係、二人の間の対人関係に焦点を当て

¹⁹ 「实在モデル」に立脚する考え方であれば、そのような外的な基準が存在することが想定される。

²⁰ このような主張は、筆者には残念に思われることに、否定的な意味での相対主義であるとして、つまり、何でもありのご都合主義、ニヒリズムの表れであるとして、格好の批判対象とされてきた。

²¹ 序章において取り上げた、大澤（2008）の『「他者性」抜き他者』が思い起こされる。

ることとする。経験は構成されると考える観点からは、心理療法においては、クライアントとセラピストの関係のあり方が、そこで構成される経験を規定すると捉えることができる。Stern (1997, 2010, 2015) は、経験の構成を左右する対人間の関係のあり方を、「対人関係の場 (interpersonal field)」と呼ぶ。Stern の考え方を一般的な形で定式化すれば、「対人関係の場の性質が経験の構成の制約条件である」と表現することがきる。

次に私たちが考えるべきなのは、①対人関係の場とはどのようなもので、②その性質はどのように決まるのか、そして③対人関係の場が経験の構成を制約するとはどういうことなのかという諸点である。

第3節 対人関係の場とは何か

私たちは誰かと一緒にいるとき、相手の存在から何らかの影響を受ける。私たちが一人でいるときと、誰かと一緒にいるときとは、明らかに何かが異なるように思われる。私たちは相手のことを意識するし、相手が私たちのことを意識していることを意識する。私たちはしばしば、自分の言動が相手の気持ちにどう影響するか、相手を楽しませているか、不愉快にさせてはいないかを気にする。また、相手から自分がどう評価されているのか、相手の目には自分の姿がどのように映っているのかが気になる。そしてこのことは、相手の方にも当てはまる。

一般に、このように互いに相手の存在を意識するとき、一人でいるときとは異なる気持ちの動きが生じがちであり、私たちの言動は一人でいるときよりも抑制がかかりがちであったり、反対に誇張されがちだったりする。このようなとき、私たちは、相手との「間に」何かがあると感じ、それを「場の空気」や「場の雰囲気」といった言葉で捉えることが多いだろう。このようなときに私たちが使う、「空気」や「雰囲気」といった表現は、誰かと一緒にいるときに、私たちは私たち自身とは異質な何かに取り巻かれ、包み込まれていると感じがちであることを示唆しているだろう。誰かと一緒にいるときに私たちを取り巻き、包み込むものとはいったい何なのであろうか。

「場の空気」や「場の雰囲気」は、私たちが誰と一緒にいるのか、その相手によって異なるし、同じ相手であってもそのときの相手との関係のあり方によっても異なる。「場の空気」や「場の雰囲気」は、私たちが安心させることもあれば、緊張させることもある。相手に伝えたいと思っていることを言いやすくすることもあれば、言いづらくすることもある。このように、「場の空気」や「場の雰囲気」は、私たちに影響を及ぼすというかたちで

確かに存在するように思われる。Stern が「対人関係の場」と呼ぶものは、このような「場の空気」や「場の雰囲気」と深く関連するものであると、筆者は理解する。

対人関係の場について考えるうえで、私たちは難しい問題に出会うことになる。対人関係の場は、どこにどのようなあり方で存在しているのだろうか。そして、どうすれば私たちはそれを捉えることができるのだろうか。あるいは、そもそもそれを捉えることはできるのだろうか。

まず、それは物理的実在ではないだろう。私たちは比喩的に、「場の雰囲気が和らいだ」とか、「場の空気が凍りついた」といった表現を用いるが、おそらく実際に何かがやわらかくなったり、温度が急激に低下したりするわけではないだろう。それでも、私たちにはそうした比喩が何を意味しているか、多くの場合直観的に理解することができる。こうした比喩が、触覚や皮膚感覚に関連する表現であることは興味深い。このことは、対人関係の場について考えるうえで、本質的な問題を示唆している可能性がある²²。

それでは、それは私たちの主観の中にある心理的な何ものかだろうか。筆者の考えでは、これもおそらくそうではない。対人関係の場は、状況に対する個人の主観的な認知や構えに還元し尽くすことができない何ものかであると、筆者は考える。それは、その場に関わるそれぞれの個人に対して外在的な、それぞれの主観からは独立して存在する何らかの実在であると考えることが適切であるように思われる。

おそらく私たちは、対人関係の場を直接的に捉えることはできない。それは、「図」に対する「地」に似たものだろう。「図」は「地」の働きによってはじめて具体的な意味を持ちうる。しかし、「地」そのものは具体的に捉えることはできない。それは、「図」として現れるものを通じて、何らかの効果として現れる現象を通じて、その働きと実在を推定するより他ない何ものかである。このことについては、次節において引き続き考えたい。

第4節 対人関係の場の性質とそれを左右するもの

私たちの実感として、一緒にいる相手により、そしてそれが娯楽的な場面なのか儀式的な場面なのかといったその場面の性格により、私たちの具体的な振る舞いは異なる。私たちの振る舞いは、私たちの自覚的な意識ばかりでなく、対人関係の場によっても規定されている。例えば、一緒にいる相手とその場面の性格によっては、いくらリラックスしようと意識的に努力しても、緊張を解くことができない場合がある。私たちの意識的努力にあ

²² 触感の問題について考えるうえで、仲谷ら（2016）が示唆的である。

らがって私たちのあり方と振る舞いに影響するのが、対人関係の場である。このように、一緒にいる相手によって、またその場面の性格によって私たちのあり方と振る舞い方が異なるとすれば、それぞれの対人関係の場も同様に異なっていることが想定される。それでは、その違いは何によって生じるのだろうか。そして、そもそも対人関係の場はどのようにして生じるのだろうか。

私たちが一人でいるところへ誰かがやって来ると、その程度は相手次第だとしても、多かれ少なかれ私たちのあり方と振る舞い方は変化するだろう。そして、そのような変化はそのすべてが自覚的に生じるわけではない。自分では自覚していない部分にも、あるいは自分の意識的な意図に反して、私たちのあり方と振る舞い方は変化するだろう。このとき、相手との間に対人関係の場が生じているのだと考えることができるだろう。このように考えると、対人関係の場はまるで私たちの意識や意図と関わりなく、自動的に成立するかのようにも思える。それでは、それはどのようにしてなのであろうか。

私たちは自分を取り巻く環境の中で生きている。例えば、Gibson (1966) の生態心理学の観点に立てば、私たちは、環境の中に自分が生を営むうえで正の価値や負の価値を持つ手がかりを見いだして、それに対して接近することを試みたり、回避することを試みたりしていると考えられる (Reed, 1996a)。そういう意味では、私たちは環境の中に積極的に情報を探索し、その情報に応じて自分の行動を生み出し、調整していると見ることができるだろう。そのようなかたちで、私たちは自分を取り巻く環境と関係を形成していると言える (佐々木, 2008)。そして、環境との間に関係を形成し、また調整する過程は、自覚的に営まれる部分もあれば、無自覚的に営まれる部分もある。そしておそらくは、私たち自身が日々の実感から思う以上に、無自覚的に営まれる過程が圧倒的に多いのではないかと考えられる (河野, 2006, 2011)。

このような観点から見れば、対人関係の場は、主体が自分を取り巻く環境と取り結ぶ関係の、特殊な一例であると考えることができるだろう。取り結ばれる関係の大部分が無自覚的である点では環境との関係と共通であるが、その関係が一方向的ではなく、相手もまたこちらを相手にとっての環境として関係を取り結んでくる点で、それは特殊な例であると考えることができる。

このように、対人関係の場は、私たちの自覚の及ばないところで、つまりは私たちの自覚的な統制が働かないところで、いつのまにか成立する。その対人関係の場を生み出しているのは、相手と私であるにもかかわらず、相手にも私にも、それに思い通りに自覚的な

影響を及ぼすことは、決して十分にはできないのである。

第5節 対人関係の場はどのように経験の構成に影響するのか

Stern (2010, 2015) の考えでは、私たちが他者と一緒にいるときに何を考え、何を語ることができるかは、その場でのその相手との関係、つまり、そのときの対人関係の場によって左右される。そして、経験は言葉で語られることによってかたどられ、構成されるのであった。そうであるなら、対人関係の場は、言葉が志向性を伴って語られるための前提条件であり、その語りの志向性のコンテキストであり、かつまた語りの制約条件であると考えられる。

考えを進めるための補助線として、一人で物思いにふける場合について考えてみたい。一人で何かについて考えているとき、私たちは通常、頭の中に言葉を思い浮かべ、文章を紡ぎ出している。頭の中だけでその作業を続けるとき、言葉や文章は思いつくそばから消えていく。何かについて集中して考えるとき、おそらく私たちは一定の言葉なり文章なりを、繰り返し頭に思い浮かべていると思われる。気ままな想念に遊ぶのではなく、何かある一定の事柄について考える場合には、言葉はその前の言葉なり文章なりと繋がっていかねばならない。言葉を使って考えるということは、基本的に言葉で文章を綴ることである。そのためには、私たちは一定以上の長さの文章を、心に思い浮かべ続ける必要がある。

考えが込み入ってきたり、出発点を見失ったりしそうになると、私たちはたいてい心に思い浮かべていた言葉を、紙に書いたり、情報機器のディスプレイに表示させるようにしたりする。そのように、心の中に思い浮かべた言葉や文章を一度外部化して、それを見ながら考えを進めようとする。そうやって、自分の思いを対象化する工夫をしながら、擬似的な対話を試みることで考えを進めようとするものである。このような工夫により、私たちはある程度自由に考えることができるようになる。

しかし、それがどの程度「自由」であるかを考えてみると、事態はそれほど単純ではないことがわかる。私たちは、自由に考えているようで、実際には「自分」という限界のある枠組みの中でうろろうろしているだけであるようにも思える。私たちは、たとえ一人でもの思いにふける場合であっても、まったくの白紙の状態では考えているのではない。頭に思い浮かんだ、あるいは思い浮かべる想念や考えが、そもそも何らかの意味を持ち、更なる別の想念や考えにつながっていくためには、コンテキストが必要である。一人で考え事をする場合であっても、私たちは自覚するしないに関わらず、コンテキストから自由にはな

れない。そして、ある特定のコンテキストにおいて、ある言葉や意味はくっきりとした輪郭を備え、別の言葉や意味はコンテキストと区別がつかず、コンテキストに埋没して姿を現さない。

このように、コンテキストは、そのコンテキストのもとで何が有意味であり何が意味をなさないか、そして何については対象化して考えることができ、何についてはそもそも対象化できないのかを規定しているのである。そして、私たちが他者と一緒にいるときの対人関係の場は、そのような意味でのコンテキストとして捉えることができる。

もう一つ、ここで押さえておきたいのは、経験を構成するという過程が社会的な過程であるということである。Wittgenstein (1953) が「私的言語」をめぐる議論で示したように、言語体系から孤立した言葉を自分で発明して自分の内的状態を記述しようとしても、実際にはその言葉を有意味に使うことができない。なぜなら、その言語が特定の内的状態を記述していることを確認するには、どうしても既存の言語の意味体系を参照することが必要になるからである。自分が心の中で紡ぎ出した思いが有意味であるか否か、自分が私的に書き綴った文章が有意味であるかどうかは、自分一人では判定が不可能なのである。私の言葉が有意味であるか否かは、他者に判定してもらう他ない。ここでは、意味を支えるものは、他者による了解可能性であり、他者との間の理解の共有である。このような言語観においては、言葉の意味や文法ルールをいくら知っていても、それが他者に「通じる」ように使われるのでなければ、それは意味を持たないのである。

上に述べたことは、基本的で重要な論点である。独言のレベルで発話ないし文章が持つ意味と、他者との間のコミュニケーションのレベルで発話ないし文章が持つ意味は同じではない。そして、経験が構成されるとは、社会的な過程なのであり、他者へとコミュニケーションされることが可能であり、コミュニケーションが実現することが、経験が構成される条件なのである。

このような観点からすれば、経験の構成における対人関係の場の影響が決定的に重要であることが改めて確認できる。対人関係の場と、そこから立ち上がる関係のあり方の性質によって、私たちが言葉にできるもの、言葉ですくいとることができるものが左右される。後に検討するように、一般に、不安や緊張に満ちた関係のあり方においては、私たちが言葉にできる、言葉ですくいとることができるものの幅、許容度は狭くなりがちである。反対に、安心感と安全感のある関係のあり方においては、好奇心が働きやすくなり、私たち

が言葉にできる、言葉ですくいとることができるものの幅、許容度は広がりやすくなる²³。

また、私たちが他者と共に居て、相手の言葉を受け取り、理解することができる幅と許容度も、関係のあり方に左右される。関係に安心感と安全感があれば、私たちは相手が発する言葉を、言葉通りの表面的な意味ばかりでなく、コミュニケーションの多様な可能性を潜在的に含んだものとして受け取ることができるのである。

ここまで、第2章と第3章において、本論文の主題である経験の構成モデルの考え方の基礎を成す Stern の未構成の経験の概念を中心に検討してきた。次章では、これまでの検討を踏まえて、経験の構成モデルの概略を改めて素描し、このモデルの見方が精神分析とは異なるオリエンテーションの心理療法と共有する視点について検討する。

²³ 心理療法における好奇心の働きの意義と、不安および安心感との関係については、Buechler (2004) が詳しく論じている。

第4章 経験の構成モデルとその射程²⁴

本章では、前章までの検討を踏まえて、筆者が経験の構成モデルと名づける考え方について、改めて素描する。そのうえで、精神分析の考えに起源を持つこのモデルが、他の心理療法のオリエンテーションとも共通する考え方を含んでいることを論じる。具体的には、ヒューマニスティック・アプローチの代表者の一人と一般に見なされている Eugene T. Gendlin の考え方との接点を取り上げる。本章での議論の中心となるのは、心理療法の作用である。以下に、Stern と Gendlin の考え方から、特に筆者が心理療法の作用の中核を成すと考える部分を取り出して、二人の臨床家の共通点と相違点について検討する。そしてその過程を通じて、心理療法一般に対する経験の構成モデルの適用可能性についての見通しを示す。

第1節 Stern の臨床理論と経験の構成モデル

(1) Stern の臨床理論

まずは、前章までに検討した、Stern の考え方を改めて要約して整理する。

伝統的に精神分析においては、何かが無意識的であるということは、基本的に心的防衛に動機づけられた抑圧の働きの結果として理解されてきた。そこでは、抑圧されて無意識的である心的内容は、象徴化されて一定の輪郭と意味を備えたものであると理解されている。これに対して、Stern は、無意識的であるものの中には、そもそも象徴化されたことがなく、一定の輪郭と意味をまだ持たないものがあるとして、経験としての形がまだ定まらず、まだ意識化されたことがないものを、未構成の経験と呼んで概念化した。未構成の経験は、まだ主体によって注意を向けられたことがなく、意識されたことがない、意識にとって潜在的な可能性のままにとどまっている経験である。

未構成の経験は、そこに主体による注意が向けられて、主体により何らかの一定の意味で解釈されてはじめて、意識的な経験となる。このことを Stern は、経験が構成されることとして捉える。一般に私たちは、未構成の経験の多様な潜在的な可能性の中から、何らかの解釈を選び取ることによって、自分の経験を構成している。日常的に、私たちが経験として意識しているのは、未構成の状態にある経験の広大な可能性の一部分にすぎない。経験の大部分は未構成の状態にあるのが常態であり、注意を向けられて意識されるのはそ

²⁴ 本章は小松（2020）を基に、その前半部を大幅に書き改めて修正したものである。

の限られた一部に過ぎない。Stern は、経験の一部が主体により注意を向けられず、意識されていない状態にあることを、解離の働きの結果として理解する。

私たちは日常的に、自分の経験を一定の決まったやり方で解釈して理解することになじんでおり、何か特別な理由がなければ、改めて自分の経験の別の可能性を探ろうとはしない。また、別の可能性を探ろうとする動機づけがあったとしても、なれ親しみがなかったり、自分にとって不快であったりして、不安を喚起するような意味の可能性には、自発的に注意を向けることが難しい。主体が自らの未構成の経験の新しい可能性に注意を向けるには、それを助ける他者の存在が必要となる場合が多い。心理療法において、クライアントにとってのセラピストは、まさにそのような役割を果たす他者であると言える。

Stern の考えでは、主体の未構成の経験の潜在的な可能性のうち、主体がどの可能性に注意を向けることができるか、つまり自分の経験をどのような意味で解釈するかを左右するのが、他者との関係性のあり方である。そのような関係性のあり方のことを、Stern は対人関係の場と呼ぶ。Stern の考えでは、対人関係の場は、そもそも未構成の経験が何らかのやり方で構成される上で不可欠である。主体は対人関係の場において自分にじっくりと感じられる経験を構成する。このとき経験を構成するやり方は、つまり何が自分にじっくりくると感じるかは、その対人関係の場の性質に強く規定される。

対人関係の場が安心感と安全感のあるものであれば、主体は経験のまだ注意が向けられていない可能性に触れていきやすい。ただし、安心感と安全感は経験の新しい構成にとって多くの場合に必要な条件ではあっても、それさえあれば十分というわけではない。同様に、対人関係の場が不安や恐れを喚起するものであれば、経験の意味の未知の可能性に注意を向けることは難しくなるが、そうした困難さは、そのような可能性を探求する好奇心がその対人関係の場に不足していることから生じうる。このことは、心理療法の場においては、クライアントのみならず、セラピストにもあてはまる。対人関係の場は経験の構成を可能にすると同時に、その可能性の範囲を限定する制約条件としても働く。

(2) 経験の構成モデル

以上のような Stern の臨床理論の全体を、筆者は「経験の構成モデル」と名づけて捉え直したい。Stern の臨床理論は、あくまで対人関係精神分析の臨床実践の中で練り上げられてきたものである。これに対して、筆者は Stern の臨床理論を、より拡張した形で、狭義の対人関係精神分析や対人関係精神分析に立脚した精神分析的な心理療法よりも、より幅

広い心理臨床実践に適用する意図を込めて、「経験の構成モデル」として捉え直す立場をとる。

筆者の理解する経験の構成モデルの要点は、心理療法の作用の中核を、未構成の経験が何らかの経験へと構成される過程それ自体にあるとみなす点にある。筆者の考えでは、未構成の経験が何らかの経験へと構成されることは、心理療法を展開させるための手段でもなければ、クライアントが自分についての認識を深めるための手段でもない。未構成の経験が何らかの経験へと構成されることは、それ自体がクライアントにとって自分の経験の可能性の拡張であり、それ自体が心理療法の過程で得られるかけがえのない成果であると考えられる。

ここで、筆者が経験の構成モデルと名づける立場と、筆者が考える伝統的な心理療法のモデルの相違について、簡単に見通しを示しておきたい。伝統的な心理療法のモデルを、筆者なりに簡略化して表現すれば、次のようにまとめることができると思われる。「クライアントは現実や自分の経験と正しく向き合っておらず、現実や経験を歪曲している。このことが、クライアントが抱える種々の問題の根底にある。そこで、こうした歪曲を修正して、クライアントが正しい認識を持てるように導くことがセラピストの役割であり、心理療法の作用である」と²⁵。

筆者の見解では、上に示したような定式化には、いくつかの暗黙の前提が含まれているように思われる。それは、①現実や経験には「客観的な」意味がある、②その客観的な意味をセラピストは把握することができる、③セラピストは自分が把握した客観的な意味を何らかのやり方で直接的にあるいは間接的にクライアントに示すことができる、といった諸前提である。これまで見てきたように、経験の構成モデルの立場は、上の諸前提に対して疑問を投げかけるものである。まず、①については、現実や経験の意味は、「客観的」なものではなく、「構成的」なものとして捉える。②については、①に対する見解の帰結として、セラピストが認識するのは「客観的な意味」ではなく、セラピストが構成した意味であると捉える。そして、③については、セラピストが自分の理解していることを意図的にクライアントに伝えることができるかどうかについては、容易なことではないと考える。このように、経験の構成モデルと伝統的なモデルとでは、その諸前提が異なっており、その帰結として、心理療法の過程や心理療法の作用に関する考え方も異なってくるのが考

²⁵ ここでの筆者の簡略化した記述は、あくまで本論文での検討の補助線とするための便宜的なものである。伝統的なモデルにも多様性があり、筆者の記述は正確なものでも十分なものでもない。

えられる。そのような相違については、改めて第3部において検討する。

このような観点から、Stern の臨床理論をその強調点を移して捉え直すとき、経験の構成モデルは、その適用範囲を対人関係精神分析および対人関係精神分析に立脚した精神分析的心理療法に限定することなく、より幅広い心理療法のオリエンテーションにおいて働いている中核的な心理療法の作用として理解できるのではないかというのが、筆者の見通しである。そこで本章では、そのような試みの一つとして、Stern の臨床理論と、パーソン・センタード・アプローチを代表する一人である Gendlin の臨床理論との接点を、経験の構成モデルという視点を媒介として探求する。

第2節 Gendlin の体験過程理論

精神分析家の Stern とパーソン・センタード・アプローチの Gendlin の臨床理論の接点を論じるという課題設定に、奇異の念を抱く人も少なくないと思われる。しかし、この二人の臨床家・理論家の間に接点を見ることは、必ずしも筆者一人の恣意的な考えではない。まず、他ならぬ Stern 自身が、その最初期の論文において、自分の未構成の概念についての考えに類似した先行概念として、Gendlin (1962, 1964) の感じられた意味 (felt meaning) を挙げている (Stern, 1983)。また、Hoffman (1998) は、Stern の「未構成の」という概念と Gendlin の「暗黙の (implicit)」という概念とを、共通した文脈で並列する形で参照するという形で、間接的ながら両者の考え方の類似点に触れている。

Stern の議論の要点は、経験の構成が対人関係の場において生じると捉えることにある。そしてそれは、経験の構成のあり方を左右する関係性、クライアントとセラピストの関係のあり方の問題へとつながる。しかし、そもそも主体が自分の経験に注意を向けるとはどのようなことか、経験が構成される過程で主体には何が生じているのかといった問題については、どのように考えれば良いのだろうか。Gendlin の考えは、このような問いに対して考える足場を提供するものであると思われる。本節では、Gendlin の心理療法論の理論的側面が詳述されている二つの文献 (Gendlin, 1964, 1973) に基づいて、本論文の議論に関連する Gendlin の基本的な立場を簡単に確認する。

Gendlin (1964) は心理療法の過程を、構造拘束 (structure bound) のもとにあり本来的な相互作用が生じなくなっている体験過程 (experiencing)²⁶が、他者との関わり合いの

²⁶ 本論文では、experience に相当する語を基本的に経験と表記している。ただし、Gendlin が使う experiencing という用語に限っては、定訳に従って体験過程と表記する。

中で再構成される (reconstituting) ことを通じて推進される (carrying forward) こととして定式化している。このとき、構造拘束のもとに相互作用から取り残されている体験過程が、Stern が未構成の経験と呼ぶものに近いと思われる。

Gendlin の基本的立場として重要であるのは、個人を環境と相互作用する全体的存在として見ていることである (例えば、Gendlin, 1973)。Gendlin の考えでは、体験過程は現在の中に未来を暗黙的に含んでおり (implying)、体験過程はその暗黙的に含まれているものが展開する (unfolding) 形で推進される。こうした過程を説明するうえで Gendlin が用いる直接のレファレント (direct referent) やフェルトセンス (felt sense) という概念は、Stern が未構成の経験が構成される過程として考えているものを、より精緻に理解する助けになると考えられる。つまり、直接のレファレンス (direct reference) により定位される直接のレファレントやフェルトセンスが、言葉での表現やイメージへと象徴化のあり方を展開していく過程という描写は、経験の未構成だった部分に注意が向けられ構成されていく過程を、より精緻化して捉えたものとして理解できる可能性がある²⁷。

ただし、Stern と Gendlin との間には、暗黙的な状態にあるものについての理解の仕方に違いがあるように思われる。両者の見解の相違は、暗黙的なものが明示的なものとして展開していく過程におけるセラピストの役割についての両者の理解の違いにも表れていると思われる。これらの点については、後に考察で検討する。

Gendlin は、体験過程の推進のためには、そこに適切な相互作用が必要であること、そしてそのためのセラピストの役割を示している。Gendlin の考えでは、クライアントの体験過程を推進するために必要なのは、クライアントの無意識に隠れた何らかの心的内容をセラピストが明らかにすることではない。クライアントが自分のフェルトセンスに触れることができることを助けること、そのために、クライアントが言い表そうとしていることを、できるだけそのまま理解することに努めながら、クライアントが自らのフェルトセンスに触れ続け、そこに暗黙的に含まれている動きが具体的に展開することを助けることである。

このように、Gendlin の心理療法理論においては、セラピストはクライアントと相互作用する他者として不可欠の存在である。そのような意味で、クライアントとセラピストの関係が最も重要であると言われる (例えば、Gendlin, 1996)。そのことを確認した上で、ここで焦点を当てて論じたいのは、そうした相互作用において何が起きていると考えるこ

²⁷ 池見 (2016) は、これと同様の過程を、前概念的なものが概念化する過程として捉える見方を示している。

とができるかという問題である。

第3節 事例的エピソードの提示

ここで具体的な検討の素材として、一つの事例的エピソードを提示する。このエピソードは心理療法のセッションからのものではないが、本章の主題を検討する目的に適したエピソードである²⁸。

このエピソードは、学校教員を対象とした小集団での継続的な研修機会の一場面でのものである。参加者は、10名程度の小中学校の教員と、筆者を含む3名の臨床心理士であった。参加者の教員の勤務校はそれぞれ別であるが、この研修機会以前に、同一メンバーで別の複数の研修に参加しており、互いに顔見知りであった。ここに提示するエピソードは、週1回、約3ヶ月にわたって行われた研修の半ば過ぎの頃のことである。

A教諭（教職経験約15年の女性の中学校教諭）は、自分の心に引っかかって残っているある生徒（以下、Bと表記）との1年間の関わりを、印象的だった関わり場面と、そのとき自分が感じていたことを軸として、短時間で簡潔に報告した。それに対して、参加者間で質疑を重ねながらA教諭とBとの関わりについて検討するという場面であった。

A教諭は、学校生活への適応に少し課題のあったBに対して、特に忘れ物をしなくなることを目標に熱心に指導を続けたが、はかばかしい成果は得られなかった。その間にも、散発的に生じるBの学校生活をめぐる種々のトラブルと、それをめぐるA教諭の熱心な指導の1年間の様子が、報告の中で振り返られた。A教諭としては、Bのことをどのように理解してどのように指導すべきであったのかを、この機会に検討したいとのことであった。

筆者がA教諭の報告を聞いていて、気になることとして心に浮かんだのは、なぜA教諭は忘れ物を防ぐ指導にそれほど熱心だったのだろうということであった。A教諭の報告全体の中から、その部分が他のエピソードとのバランスで、際立っているように筆者には聞こえていた。筆者には、A教諭の熱心さの背景がわからなかった。そこで、筆者はまずそのことをA教諭に問いかけた。「どうしてそんなに忘れ物の指導に一生懸命だったのでしょうか？」と。A教諭は筆者の問いかけに戸惑ったように、「どうしてでしょうね・・・」としばらく考え込んでいたが、少しして、「それさえなくなれば、Bのいいところをもっと他の生徒達や教員達にわかってもらえるのに、という気持ちがあったのだと思う」と語られた。

²⁸ このエピソードの当事者であるA教諭からは、このような形で報告することについて承諾を得ている。

その後、他の参加者が、A教諭の報告にあった、授業の教材に感極まった様子でBが泣き出したエピソードについて尋ねていた流れで、A教諭はもう一つの印象的なエピソードを思い起こした。それは、不可抗力で結果的に生じたトラブルでBがクラスメイトから批判の矢面に立たされたとき、A教諭がBに、「あなたは全然悪くないよ」と声をかけたところ、Bが堰を切ったように泣き出したというエピソードであった。A教諭にとっては、そのときBが急に泣き出したことが意外に思えたとのことだった。この語りを聞いていた筆者は、気がついたときには、自分の心に浮かんできたことを思わずA教諭に向けて口にして、「Bはその言葉を言ってほしかったんでしょうね」と。A教諭は即座にハッとした様子を見せ、「私が泣きそう・・・」と言って口元を手で押さえたのち、涙がこぼれ始め、しばらく絶句されたのだった。それは、筆者にとっても思いがけない反応だった。

第4節 事例的エピソードについての考察

(1) 未構成の経験の構成

上記のエピソードについて、まずはその前半部について考察する。忘れ物に関する指導の熱心さについての筆者からの問いかけを受けて、はじめははっきりとしなかったA教諭の思いが浮かび上がった。A教諭は後に、この研修機会について振り返ったレポートの中で、このとき「あのときの自分の本当の気持ちがわかった」という趣旨のことを述べている。筆者はこのとき起きたことを、抑圧の解除、つまりA教諭の個人内の過程としてではなく、解離の解消として、A教諭と筆者との間で生じた対人間の過程として捉えたい。

この過程を解離の解消として捉えた場合、そこに生じたのは、無意識に押し込められた思いの想起ではなく、このときのA教諭と筆者の間に生じた、経験のある理解の仕方である。それは、過去にすでに定まっていた経験の意味が、このときに「正しく」意識にのぼったというようなことではない。そうではなく、当時の学校現場というコンテクストにおいては注意を向けられる機会のなかった経験の一部に、他者からの問いかけを受けて、このときその場で初めて注意を向けることになり、その経験が言葉として語りうる形を成しえたのだと考えることができる。そこには、学校現場でBと向き合う中で担任としての責任を強く感じさせられていたコンテクストと、自らの経験を振り返る動機づけを持って集まったメンバー間に醸成された探索的で相互に受容的なコンテクストとの違いがあったと考えられる。つまり、それまで未構成であった経験の一部を新たに構成することになる契機の一つは、新たな関係のコンテクストに身を置くことだと言える。

また、このときその場における経験の構成のあり方は、このときの場のあり方によって、そして筆者の発した問いかけによって、かなりの程度規定されていたと考えられる。したがって、今後、同じエピソードについて振り返る別の機会があれば、A教諭は別の理解をする可能性があるし、そのときにもやはり「あのときの本当の気持ちがわかった」と感じるかもしれない。その時々にしっくりとくる理解は、「正しい」のではなく、そのときその場のコンテキストに即して適切なのだと考えられる。

次いで、後半部について検討したい。筆者が思わず口にした「その言葉を言ってほしかった」という思いは、どこから生じたのだろうか。筆者の自覚のレベルでは、それはその状況を思い浮かべることによる想像や推論の産物ではなく、A教諭の語りを聞く中で思いがけず浮かび上がってきたものであった。この過程を説明する理解のあり方の可能性は、他にも様々なものがありうるであろうが、筆者はここではそれを、筆者自身の未構成の経験の構成の過程として考えたい。振り返ってみると、筆者はA教諭の語りを聞きつつ、そこから自分にぼんやりと感じられるものを言い表す言葉を、無自覚のうちに探していたのだと思われる。そして、そのとき、その場の自分にしっくりとくると感じられて出てきたのが、「その言葉を言ってほしかった」という言葉であったと思われる。

それでは、筆者の発した言葉がA教諭に大きな反応を引き起こしたのはどうしてだろうか。それは、筆者の言葉が「客観的に正しい」からでも、的を射ていたからでもないだろう。そもそも、その「正しさ」を判定する基準はどこにもないだろう。また、筆者の言葉が単に推論としてもっともらしいという程度であれば、A教諭にそのような反応は生じなかっただろう。それはおそらく、筆者にとって思いがけず浮かび上がったのと同じように、あるいはそれ以上に、A教諭が漠然と感じていたものに共鳴して、A教諭を思いがけず強く揺さぶったのだろう。それは、A教諭にとってもまた、未構成だった経験の意味の可能性にしっくりとくる言葉だったのではないだろうか。

上記の考察に関連することとして、Stern (1997) は、クライアントがセラピストの解釈を「しっくりとくる」と感じるのは、また、セラピストが自分の解釈を適切だと感じるのは、その解釈が客観的な現実と正確に一致しているからではなく、その解釈が言葉にされて表現されるまでは存在しなかった経験の意味の多様な可能性のうちの一つが、その言葉によってぴったりと表現されていると感じられるからであると論じている。つまり、ある解釈が「しっくりとくる」と感じられるときに参照されているのは、外的に存在すると想定される客観的な現実ではなく、主観的に感じられる内的な何らかの感覚なのである。

(2) Gendlin の立場との対比

ここで Stern が内的な感覚として述べているものは、Gendlin が直接のレファレントやフェルトセンスと呼ぶものに近いと思われる。そして、上記のエピソードの後半部は、Gendlin (1995) の、交差すること (crossing) と浸ること (dipping) をめぐる考え方によっても、うまく理解できるように思われる。それは、筆者の発した言葉は A 教諭の体験過程と交差し、それまで A 教諭には明示的な形では存在しなかった経験の新しい意味が生まれたという理解の仕方である。このとき、筆者の発した言葉は A 教諭にとって経験に暗黙的に含まれるものを表現する機能を果たしていたと考えることができるだろう。その機能は、Gendlin (1962) がシンボルと感じられた意味との間の機能的関係の一つとして示した、隠喩 (metaphor) に相当すると思われる。そのような観点からは、筆者に思い浮かんだものもまた、筆者がそのとき感じていたものを表現する可能性のあるメタファーとして機能する表現の一つだったのだと理解することができる。

このように、Gendlin の考え方を適用すれば、このエピソードを A 教諭の体験過程の推進、あるいはフェルトシフトとして理解することができる。そこでは、筆者の発した言葉が引き起こしたものは、A 教諭の体験過程に暗黙的に含まれていたと捉えられることになるだろう。一方で、Stern の考え方では、構成された意味と経験の未構成だった部分との間の関係は、Gendlin の考えとは異なるように思われる。なぜなら、Stern においては、未構成の経験の意味のどの可能性が現実化するかは、その未構成の経験が本来的に有する可能性に規定されているとしても、実際にはそのときの対人関係の場による規定が強く働くと考えられているからである。

一方で、Gendlin がフェルトセンスという概念で示しているのは、Gendlin の説明によれば、状況に関するからだの反応である。ここで言われる状況には、他者との相互作用のあり方もまた当然含まれていると考えられるので、Gendlin の implying には Stern が対人関係の場と呼ぶものも当然反映していることが考えられる。しかし、Gendlin の論述は、有機体としての全体性を基盤としたフェルトセンスの有する本来性 (authenticity) の方に比重を置き、強調するものとして理解されることが適切であるように思われる。

Stern の未構成の経験と解離の考え方が、経験の構成 (あるいは未構成のままにとどまること) はそこに関わる当事者たちの共同によるものであるという契機を含むのに対して、Gendlin の考え方には、個人の体験過程には、まだ到来していない未来が現在に含み込ま

れる形で、本来的 (authentic) な動きが、「そこにあって、そこにはない」(三村, 2011) というあり方で想定されているように思われる。ここには、一者心理学と二者心理学の相違を指摘する Gill (1994) の考え方を援用すれば、より一者心理学的な視点の Gendlin と、より二者心理学的な視点の Stern との違いが表れているように思われる。

第5節 経験に立ち会うこと、交差すること

これまでの考察を踏まえたうえで、さらに、そもそもどうして筆者に思い浮かんだものがA教諭の未構成の経験にもじっくりときたのかという問題について考えたい。なぜなら、表面的にはA教諭と筆者はそれぞれ独立した経験世界を生きているのであるから、一方の経験にじっくりとくる表現が、もう一方にとってもじっくりとくるという保証は何もないはずだからである。考えられることの一つは、A教諭の未構成の経験と筆者の未構成の経験が、何らかの形で部分的に通底していたという可能性である。つまり、筆者の未構成の経験にある構成をもたらした言葉が、偶然にもA教諭の経験の未構成の部分にもじっくりときたということではなく、そもそもそのときその場でのA教諭と筆者の未構成の経験には共通する部分があったという可能性である。そのように考えるとすれば、A教諭と筆者に共通するのは、まさしく、「そのときその場での経験」であったと考えるのが自然に思われる。つまり、A教諭は単に過去の想起に照らして筆者の発した言葉をじっくりくと感じたのではなく、そのときその場で生じている心の動きに照らしてそう感じたのではないだろうか。つまり、それは語られたエピソード中の過去においてBに語りかけていたときのA教諭に暗黙的に感じられていたことにじっくりとくるばかりでなく、そのときその場の現在において暗黙的に感じられていたことにもじっくりときたのだと考えられる。

このように考えることが妥当であるとするならば、二人はそのときその場で生じている同じ経験を部分的に共有していたと考えて良いのではないだろうか。つまり、そこで生じていたことは、単にA教諭が心の中にある記憶を語り、それを聞いて筆者が自分の心の中でその状況を再構成して理解したというものではない。A教諭の語りを、筆者ばかりでなく、ある意味ではA教諭自身もまた聞いており、だからこそ、それは、過去を想起しつつ語るA教諭の経験とそれを聞いている筆者の経験というそれぞれの個人内の別々の経験ではなく、そのときその場で生じている対人間の同じ一つの出来事についての経験だったのではないだろうか。

Modell (2005) は、私たちの日常的な経験のあり方を、メタファーの機能の観点から論

じている。Modell の考えでは、私たちの現在の経験とそれに類似した過去の経験の想起がともに生じ、それらの間に情緒的カテゴリー (emotional category) が生み出されるとき、現在の経験と過去の経験は互いに生き生きとした豊かなものになりうる。そこでは、過去の経験の想起が現在の経験の意味を豊かにするとともに、現在の経験が過去の経験の意味を豊かにもするのである。

Stern (2010) は、Modell のこの議論を拡張して、経験に立ち会うこと (witnessing) という文脈で捉え直している。トラウマ性の記憶を例に挙げて、Stern は、孤立した経験は意味を持たない単なる出来事そのものになってしまうと論じる。単なる出来事が経験として意味を持つのは、それが他者によって聞かれるという形で立ち会われるからである。そしてこのとき、その他者は、内的な、想像上の他者であっても構わない。ある一つの自己状態とは異なる別の自己状態を通して自分の経験を聞くことが、経験の構成を可能にして、経験は意味を獲得するのである。このとき、過去の経験が現在の経験に影響を及ぼすのと同じように、現在の経験が過去の経験に影響を及ぼす。あるいは、現在と過去が双方向的に影響を及ぼし合っているということが、経験が豊かで生き生きとしたものであるということの証に他ならない。問題は、そのような双方向的な影響の過程が阻害されるときであり、そのような場合には、その経験は孤立して、双方向の影響の中で絶えず繰り返し更新される、つまり経験が改めて構成し直されるということが起きなくなる。いわば、その経験は、私たちの現在の生から取り残され続けるのである。そして、そのような経験が、他者により聞かれるということを通じて、現在との繋がりを確立するとき、現在というコンテキストからの、現在の自己状態からの、経験の構成が可能になると考えられる。

このような Stern の考えから見たとき、Gendlin の交差することは、立ち会うことに近い位置にあると思われる。交差するとは、経験が意味を吹き込まれ、生きたものになるための必要条件であるコンテキストが提供されるということに他ならないと考えられる。ある語の意味は文の中で、その文の意味は文章全体の中で、はじめて明確な姿を取るようになるのと同じく、経験が明確な姿を取るには、今ここでのコンテキストが必要不可欠なのである。立ち会うことにしても、交差することにしても、一方に自分について語る人がいて、他方でそれを聞く人がいれば、それで自動的に成立するわけではない。その二人の間にそれらが生じるためには、それを可能にする関係性のコンテキストが必要なのである。私たちは、クライアントに対する詳細な問いかけ (detailed inquiry) を通じて、あるいはフェルトセンスへのアスキングを通じて、クライアントの経験を拡張したり、推進したり

することができるかもしれない。しかし、そうした働きかけから効力が発生するには、語り手と聞き手の間の関係のあり方が本質的な役割を果たすのである。

さらにこの方向で考えを推し進めるなら、クライアントとセラピストの間の対人関係の場や、語り手と聞き手の間の相互作用は、経験の構成や体験過程の推進が生じるための必要条件であるばかりでなく、それ自体が経験の構成や体験過程の本質的な一部であると考えられる。それは、クライアントとセラピストの間に、語り手と聞き手の間に、具体的に感知できるあり方で存在する何かであるとも考えられる。それは、精神分析においては間主観性として論じられてきたテーマと重なるであろう（例えば、Benjamin,2017）。また Gendlin の立場との関連においても、Ikemi (2017) は、交差することが間主観的現実を生み出すことを指摘している。経験の構成も、体験過程の推進も、交差することも、クライアントとセラピスト、語り手と聞き手、それぞれの個人内に生じるのではなく、対人間に、二人の間に生じること、間主観的な場に生じることであり、さらに踏み込めば、そのときには未構成の経験も、直接のレファレントも、体験過程もまた、それぞれの個人内ではなく、二人の間にあるのだと、筆者は考えたい。

第6節 セラピストの役割と心理療法の作用

語り手が自分の経験の可能性に対して開かれているためには、聞き手もまた自分の経験の可能性に対して開かれていなければならないだろう。Stern が対人関係の場が果たす役割について述べているように、聞き手の側の経験の構成の可能性が狭く制約されていれば、語り手の語りを幅広い経験の可能性をはらむものとして聞くことができず、語り手と聞き手の間に経験の新しい意味の可能性が立ち上がることは困難である。語り手の語りを聞き手の中で、聞き手の心と身体に、何らかの動きが生じるとき、語り手はそれを手掛かりに、それに立ち会われて、それと交差して、自らの経験を新しい可能性に開く契機に出会うと考えられる。それが、心理療法において、あるいは心理臨床一般において、セラピストが果たすべき役割であると筆者は考える。

経験の可能性が新しく構成されて、さもなければ生じえなかったかもしれない経験の意味に出会うこと、このことが、私たちが自らの生の営みの一部をクライアントとして、あるいはセラピストとして生きる力強い動機づけであると、筆者は思う。立ち会うことが、経験の新しい可能性を立ち上げる。立ち会う者がいなかったところに立ち会う者が現れることで、それまで意味を持ちえなかった経験が新しい意味で理解できるようになる。ある

いはそれまでとは違う立ち会い方をする者が現れることで、異なる新しい意味が立ち上がる。それこそが心理療法の作用であると、筆者は理解する。そして、心理療法において最も重要なことは、そうした心理療法の作用が実際に生じうる面接関係を育むことである。

私たちは、自分の経験を他者に語り、他者から聞かれることによって、その経験の暗黙的な新しい可能性を生きることができる。それこそが、私たちが自らの経験に暗黙的に含まれている意味を繰り返し更新し続けるという形で経験を時間の中で生きるということの意味であり、心理臨床の場は、そうした経験のあり方にもつばら焦点が当てられる、特別な場であると言えるだろう。互いの相違を通して、異なる自己状態の間で、他者の耳を通して自分の声を聞くことが、つまり、互いに互いの経験のまだ見ぬ可能性に立ち会い、交差することが、私たちの経験を生き生きと息づくものにする。

Stern の考えと Gendlin の考えを相互に参照することは、心理療法の作用について考えるうえで、それぞれに単独では十分には持ちえない視点を相互にもたらし、実り豊かな対話となる可能性をはらんでいると、筆者には思われる。個人内に生じる過程と対人間、あるいは「二人の間に」生じる過程、それぞれのあり方と相互の関連について検討していくことで、その可能性を一步ずつ具体化していくことが、今後に残された課題である。

第2部 語るクライアントと聞くセラピスト

第5章 クライアントは何を語るのか

心理療法は、自分について何事かを語るクライアントと、それに聞き入り、時に応答するセラピストの、二人による営みである。そして、その出発点は、クライアントの語りにある²⁹。クライアントとセラピストが心理療法を始めるにあたって、心理療法の場면을構造化する作業が一通り落ち着いた後は、クライアントの語りが面接の中心であり、面接の焦点である。セラピストの側の役割に焦点を当てれば、クライアントの語りにまずは聞き入ることからすべてが始まる。このとき、セラピストはクライアントの語りにどのように聞き入れればよいのだろうか。セラピストがクライアントの語りを聞く、聞き入るとはどういうことだろうか。

本章では、セラピストがクライアントの語りを聞くとはどういうことか、セラピストはクライアントの語りにどのように聞き入れればいいのかについて考えていく手がかりとして、まずはクライアントの語りについて考えたい。クライアントは、心理療法の面接場面において、いったい何を語っているのであろうか。クライアントは語ることで、何を表現しているのだろうか。あるいは、クライアントの語りには、何が表れているのだろうか。経験の構成モデルにおいては、それはどのように捉えられるのであろうか。

なぜこのようなことを筆者が問題にするのかといえば、クライアントの語りに何が表れていると考えるかによって、クライアントの語りに対するセラピストの受け止め方、聞き入り方が左右されると思われるからである。次章において詳しく見るように、セラピストは何の先入観もなく、いわば白紙の状態でクライアントの話を知っているわけではない。むしろ、もしそのような状態でクライアントの話を知ることがあるとすれば、セラピストはそもそもクライアントの話を知り得ないだろうと思われる。セラピストは、自覚しているか否かに関わらず、常に何らかの前提のもとにクライアントの話に耳を傾けているのである。このことについて考えていくために、まずは、クライアントは何を語っていると考えることができるのかについての検討を行う。

第1節 クライアントが語る経験

心理療法面接においてクライアントが語るのは、差し当たり、広い意味でのクライエン

²⁹ 「クライアントの語り」は、言葉による語りに限定されない。沈黙や身振り、プレイセラピーにおける子どものプレイもまた、そこに含まれる。

トの経験であるということができると思われる。このとき、経験の構成モデルの立場から見れば、クライアントが語る経験は、構成された経験として捉えられる。あるいはむしろ、クライアントは語ることを通じて、そのときどきで経験を構成していると捉えられることになる。そこでは、クライアントは、経験としては未構成の状態にある自らの体験の一部を、語りの過程と同時に並行して構成していると捉えられる。

このような経験の構成モデルの捉え方と対照的なのが、筆者が「経験の再現モデル」と名づけたと思う捉え方である³⁰。経験の再現モデルにおいては、クライアントの語る経験には何か原型となるものが存在していて、クライアントはそれに接近しながら、より正確に近似的に語ることを目指していると捉えられる。一般的には、クライアントの語りについて考えるうえでは、こちらの捉えの方がなじみ深く感じられるのではないだろうか。

心理療法に関する伝統的な見方では、クライアントの語りは、自分の経験に対する受け止め方、意味づけ方、理解の仕方を言葉で表現したものであり、そうした経験の受け止め方、意味づけ方、理解の仕方が変わることで、クライアントの語りが変化していくものと捉えられてきたと言えるだろう。しかし、経験の構成モデルに立脚した見方においては、事態は逆であると捉えられる。伝統的な見方のように、自分の経験の受け止め方や、意味づけ方や、理解の仕方が先にあって、それが言葉で語られるのではない。経験の構成モデルに立脚した見方においては、言葉にして語られることを通じて、自分の経験の受け止め方や、意味づけ方や、理解の仕方が構成されると捉えられる。語られる内容が先にあって、それを言葉で表現しているのではなく、言葉で表現することが内容そのものを形作るというのが、経験の構成モデルの捉え方である。そこでは、語ることは、何らかの内的状態の記述ではないと捉えられる。

このように考えるなら、いわゆる、心理療法における「抵抗」に関する伝統的な捉え方についても、考え直す必要が生じることになる (Stern, 1997)。例えば、面接におけるクライアントの語りに対して、「クライアントは本心を語っていないのではないか」「クライアントは本当はどういう気持ちなのか」などとセラピストが感じたり、考えたりすることがある。一般に、このようにクライアントが「本心」を話していない、話せないとセラピストが捉える状況は、しばしばクライアントの抵抗として理解されてきた (Greenson, 1967; 馬場, 1999)。

³⁰ 本章で「再現モデル」と名づけているものは、第2章で「実在モデル」と名づけていたものと、実質的には同じ考え方である。経験の存在のあり方の観点から見たときには「実在モデル」と名づけ、クライアントの語りとの関係の観点から見たときには「再現モデル」と名づけている。

例えば、クライアントの話を聞いているセラピストには、クライアントはきっと辛い思いをしていたに違いないと思われる中で、クライアントにそのときの気持ちを尋ねたときに、「少しも辛くありませんでした」という返答がなされた場合を考えてみたい。このようなとき、「クライアントはまだ本心を語れないのだ」とか、「クライアントはまだ自分の本心を認められないのだ」とか、「クライアントは自分の本心にまだ気づいていないのだ」といった感じ方や考え方をするセラピストは、けっして少なくないと思われる。しかし、ここで立ち止まって考えてみたいのは、そのようなセラピストの感じ方、捉え方、受け止め方には、クライアントの語りとは別に、「本心」や「本当の気持ち」がクライアントの「心の中」に存在しているはずだという暗黙の前提が存在しているのではないかということである。この素朴な、暗黙の前提こそが、経験の構成モデルにおいては、改めて吟味されねばならないと考えられるのである。

第2節 クライアントの語りと体験との関係

経験の構成モデルに立脚した見方から、クライアントの語りを、クライアントの内的な状態の記述でないと捉えるとしたら、クライアントの語りはいったい「何を語っている」と捉えればよいのだろうか。クライアントの語りは、何を意味しているのだろうか、そして何を表しているのだろうか。

経験の構成モデルに立脚して考えれば、クライアントが語る経験は、まさにそのとき、その語りとともに形を成したものであると言える。しかし、このような捉え方には違和感を覚える人が少なくないのではないだろうか。例えば、私たちが昨日体験した出来事について話しているとき、私たちはそのときの状況を思い出しながら、映像として思い浮かべて、それを言葉にして語っているのではないだろうか。つまり、私たちが言葉で語る前に、経験は確かに存在していると言えるのではないだろうか。

このような私たちの実感に対して経験の構成モデルが示す見方は、私たちが心に思い浮かべる情景は経験以前のものであり、それを言葉で語って（あるいは何らかの手段で表現して）はじめて、経験が形作られるという見方である。つまり、たとえ、クライアントが、そして私たちが、何かを思い出しながらそれを一生懸命に言葉にすることに努めている場面であっても、そこで想起されている記憶のあり方、そしてそれを言葉で語る語り方が、それ自体、構成の働きなのである。この考え方において否定されているのは、先ほども触れた、経験およびその語りに関する「再現モデル」に他ならない。

再現モデルにおいては、体験がオリジナルであり、その想起および語りは、そのオリジナルに対する表象（represent）であると言える。そして、想起や語りは、オリジナルの体験の、しばしば不正確な、コピーであると捉えることができる。心理療法に関する伝統的な見解においては、こうした再現モデルが暗黙の前提とされていると考えられるのではないだろうか。そのような理解の仕方においては、クライアントの語りはオリジナルの体験の再現（re-present）として捉えられることになる。そして、クライアントの語りは、オリジナルの体験に肉薄している（と見なされる）ほど、そして正確に写實的に再現されている（と見なされる）ほど、意義あるものと捉えられることになる。このモデルにおいては、オリジナルの再現性から遠ざかるクライアントの語りは、歪曲であったり、知性化であったり、抑圧であったりと、「真実に向かう」セラピーの仕事にとって好ましくないものとして、打ち破られるべき抵抗の表れとして、あるいはクライアントのあり方の問題性そのものとして、見なされがちであると思われる。そこには、クライアントが語ることで、その元になる体験、つまりオリジナルの体験との間に対応関係が想定されていると考えられる。

これまで見て来たように、構成モデルの考え方は、上のような考え方とは異なる。構成モデルにおいては、体験は未構成の潜在態なのであるから、クライアントが語る経験の語りとしての適切さを判断する基準となるような参照元は存在しない。より端的に言えば、クライアントが語る経験と、そのオリジナルと想定される体験とは、厳密には、比較対照しようがないのである。なぜなら、オリジナルの体験ははっきりとした姿を持っていないからである。むしろ、クライアントの主観的には、自らの語りがそれ自体（事後的に）経験を構成するのであるから、自分が語ったことと自分の経験とは、基本的には一致して感じられる方が自然である。つまり、自分の経験に沿って語りが紡ぎ出されるのではなく、自分が紡ぐ語りに沿って経験が形作られるからである。しかし、実際には、私たちは自分の経験について、言葉でうまく語りきれないと感じることも多い。このことについては、すぐあとに検討したい。

これまで、経験の構成モデルと再現モデルを、相互に比較対照しながら見てきた。クライアントの語りを、これらのモデルのどちらをベースとして捉えるか、つまり、すでに形ある自分の体験を言葉にしてよりの確に表現しようと努力しているものとして捉えるか（再現モデル）、言葉にしていくことで自分の体験を経験へとかたどっていっていると捉えるか（構成モデル）、この捉え方の違いはとても大きい。なぜなら、それが自覚的であるにせよ暗黙的であるにせよ、どちらの捉え方をするかによって、クライアントの語りへの

セラピストの聞き入り方が違って来るからである。その違いを簡潔に示したのが表4である。このセラピストの聞き入り方の問題については、次章で詳しく検討する。

表4 語りに関する再現モデルと構成モデルの比較

	再現モデル	構成モデル
語ることの作用	経験を写實的に記述する	経験を形作る
経験との関係	語られる前にすでに存在する	語られることで存在するようになる

私たちの日常感覚としては、再現モデルの方がしっくりと来る場合が多いように思われる。そう感じる理由の一つとして、しばしば、どんなに言葉を尽くしても、何か自分が体験したこと、感じたこと、言いたいことを言い尽くせていない感じが、私たちに残ることにある。そこで、次のような疑問が生じることになるだろう。もし、語ることが経験を構成することであるなら、そのような不安全感は生じないのではないだろうか。私たちは、言葉では捉えきれない何かを感じるからこそ、不安全感を抱くのではないだろうか。つまり、構成モデルは間違いではないのだろうか。

この不安全感にしばらく焦点を当てて検討したい。素朴な感情として、私たちには、自分が感じていることを、的確に表現したいという欲求があるようにも思える³¹。それでは、そもそも、私たちはなぜ「表現したい」のだろうか。表現したいという欲求には、私たちの表現を受け取る他者の存在が前提されてはいないだろうか。つまり、私たちが自分自身で自足し、自己完結しているなら、おそらく表現など必要ないだろう。そもそも言語すら必要ではないだろう。私たちは、コミュニケーションのために言葉を（あるいは言葉以外の言語を）使う。事態をより正確に捉えるならば、私たちは言葉を獲得することを通じて、必然的にコミュニケーションの世界に引き入れられるのである。

話の焦点を不安全感に戻せば、自分が表現したいことを表現しきれないという不安全感の源は、コミュニケーションの不安全感にあると考えられないだろうか。つまり、自分の語りオリジナルの体験を正確にコピーしていないことに対する不安全感ではなく、自分の語り（たとえ独白形式であっても）他者とのコミュニケーションとして十分に働いていないこと、つまり自分の語り相手が十分に伝わっていると感じられないことに対する不安全感

³¹ もちろん例外も多い。むしろ、誰に対しても隠したい場合も少なくないことは言うまでもない。

感ではないだろうか。

ここに導入されたコミュニケーションという視点は非常に重要である。クライアントの語りを、再現モデルで捉えるか、構成モデルで捉えるか、という問題設定には、実は重大な見落としがある。つまり、そこに、クライアントの語りはコミュニケーションとして行われていることを付け加えねばならないのである。より厳密には、再現モデルにしても構成モデルにしても、再現することそのもの、構成することそのもののうちに、コミュニケーションの視点が必然的に含まれていると考えるべきであると思われる。したがって、再現にしても、構成にしても、それは必然的に他者に向けられたものであり（言葉を使うこと自体がそういうことである）、いわば普遍的で中立的な再現も、構成もありえない。それは、常に誰かに向けられた語りなのであり、誰に向けられた語りであるかが、その語りに影響を及ぼさずにはおかないのである。このことは、第3章で検討した、対人関係の場の影響の問題と深く関連している。そして、心理療法においてクライアントの語りが差し向けられた誰かとはセラピストであり、心理療法における対人関係の場とはクライアントとセラピストの間の関係に他ならない³²。

第3節 今ここでの経験としての語り

遺憾なことに時に忘れられがちであるが、クライアントがセラピストに語っているのは、「今ここで」の経験である³³。クライアントが語っている内容が、前日の日中に起きた対人トラブルのことであっても、子どもの頃の親との関わりに関するエピソードであっても、それが語られているのは、今、ここで、セラピストと共にいて、という状況のもとであり、その語りには「今・ここで・セラピストと共にいて」という刻印が張り付いている。

例えば、クライアントが前日に経験したエピソードとして、友達と話をしているふと寂しい気持ちになったことを話している場合を考えてみたい。クライアントが話しているエピソードそのものは前日の出来事であるが、その話が、今、セラピストの前で、セラピストに対して語られていることの意味を、セラピストは考える必要があるだろう。クライアントは、単に印象に残った出来事を報告しているのだろうか、前日に友達との間に感じた

³² ここで転移の問題に注目すると、事態はいささか込み入った様相を呈するようになる。つまり、クライアントの語りが差し向けられているセラピストは、必ずしも現実のセラピストであるとは限らない。同様に、クライアントとセラピストの関係も、現実のセラピストとの関係であるとは限らない。しかし、真に問われるべきなのは、クライアントにとって、セラピストが現実のセラピストであるか、転移的な含みを帯びたセラピストであるかの違いが、セラピー作用にどのような違いをもたらす可能性があるのか、である。

³³ 筆者の経験では、心理療法を学び始めた時期にある人たちとのスーパーヴィジョンにおいて、このことが念頭に置かれていない例を経験することは珍しくない。

その寂しさについてセラピストにわかってほしいのだろうか、それとも、今セラピストとともに面接室にいて漠然と感じている何かについて話しているのだろうか。

クライアントの語りが「今・ここで・セラピストと共にいて」という刻印を帯びていることは、クライアントの語りがセラピストに向けられていることの必要条件であるように思われる。そのような刻印を帯びていないクライアントの語りは、おそらくセラピストに向けられた語りにはなっておらず、そうした語りをセラピストは受け取るすべがないだろう。例えば、解離状態にあるクライアントの語りは、そのような例の一つであろう。同様に、セラピストが、クライアントの語りを「今・ここで・セラピストと共にいて」という刻印を帯びたものとして聞いていないならば、つまり、今ここでセラピストに対して差し向けられた語りとして聞いていないならば、セラピストはクライアントの語りを十分に受け取ることはできないだろう。

重要なのは、クライアントの語りが持つ、そのようなある種のパースペクティブ性を理解することであると、筆者には思われる。ここで筆者がパースペクティブ性という概念で注意を向けたいのは、クライアントの語りは、特定の時点に、特定の立場から、特定の状況をコンテクストとして、特定の他者に向けて行われるという性質を帯びているということである。したがって、クライアントの語りは、この世界の時空間のどこに定位しており、どの方向に開けており、誰に向けて語られているのかについて、セラピストが注意を払うことが決定的に重要であると思われる。なぜなら、このパースペクティブ性とその揺らぎ（定位する場所や、開けの方向や、語りのベクトルの揺らぎ）を見定めることなくして、クライアントの語りを理解すること、聞き入ることは、十分にはできないからである。このことは、セラピストはクライアントの語りにどのように聞き入ることができるのかという、次章のテーマに直結している。ここで再度強調しておきたいのは、クライアントの語りは「今・ここで・セラピストと共にいて」のものであり、クライアントのパースペクティブから、今、ここで、セラピストに向けられているものであるということである³⁴。

第4節 語ることと意味すること

これまで、クライアントの語りを再現ではなく構成として捉える捉え方について、クライアントの語りは「今・ここで・セラピストと共にいて」という刻印を帯びてセラピスト

³⁴ このことの意味をどのように受け止めて心理療法を行うかが、心理療法の実践の根本的な中核であると、筆者は考える。

に向けられていることについて、それぞれ見てきた。ここでは、それに加えて、クライアントが「語る」とクライアントが「意味する」ことの関係について検討しておきたい。

まず押さえておきたいことは、「語る」と「意味すること」は同じではないことである。一般に、クライアントは、自分の経験をセラピストに向けて語る。たとえ語りの形式が限りなく独白に近いものであっても、その場にセラピストがいて、そのことがわずかにでもクライアントに意識されているなら、その語りは、少なくともその一部は、セラピストに向けられたものである。

それが誰であれ、誰かに向けて語りかけるということは、その誰かに向けて何かを伝えようとする営みであると考えられる。ここで、クライアントが自覚的に伝えようとしている何かを、仮に「X」としよう。クライアントが「X」をセラピストに伝えようとするとき、その伝え方にはさまざまなやり方が考えられるが、一般的には、何らかのやり方で「X」を言語化して語ることだろう。例えば、セラピストに対して腹を立てているということを伝えたいとき、クライアントは「私はあなたに腹を立てています」と語るだろう。しかし、常にそうであるとは限らない。もっと婉曲なやり方で語ることもある。最近自分が腹を立てた別の人のエピソードを語ることで、セラピストへの腹立ちを伝えようとするかもしれない。その場合には、クライアントの語りの内容と、クライアントが伝えたいと思っていることにはズレが生じることになる。つまり、クライアントが語る内容そのものの中には、クライアントが伝えたい内容が直接的には含まれていない場合がある。そして、そのような場合は、けっして少なくないだろうと思われる。

このような場合には、セラピストは、クライアントが語る内容そのものを、辞書的・文法的に正確に理解するだけでは、クライアントが伝えたいこと（つまり、クライアントが意図する意味、以下、意図的意味と略記）を捉え損ねてしまうことになるだろう。ここでは、セラピストはクライアントが語る内容をどのように受け取って、どのようなコンテキストのもとに理解すればよいか問題になる。

実際には、事態はさらに複雑である。別の角度から考えてみたい。セラピストは、一般に、クライアントの意図が何であるかに差し当たり関わりなく、クライアントの意図をとりわけ斟酌することなく、クライアントの語りを何らかの意味で受け取るものである。そのようにセラピストが差し当たり受け取る意味を、ここでは仮に「Y」としておこう。セラピストが受け取る意味「Y」は、クライアントが語る内容の文字通りの意味と一致するとは限らない。むしろ、クライアントが語る内容の文字通りの意味とは異なる意味を受け取る

場合が少なくない。

ここで、イギリスの言語哲学者 Austin (1962) による区別を参考にして、前者のクライアントが語る内容の文字通りの意味を「発話的意味」、後者のクライアントの語りから受け取られる意味を「遂行的意味」と呼ぶことにしよう。先にも見たように、発話的意味と遂行的意味は一致するとは限らない。例えば、皮肉や、ほのめかしといった場合のように、発話的意味と遂行的意味とが異なることは、日常的によく生じる。このように、発話的意味と遂行的意味とが一致しないことそのものは必ずしも問題ではない。ただ、クライアントの語りを理解するときの問題になるのは、この「遂行的意味」が「どこに」帰属しており、何を反映していると理解するかである。それは、クライアントの意図的意味だろうか。非意図的意味だろうか。クライアントの意図とは関わりのないセラピストの受け取り方、つまり一般的な意味での解釈だろうか。あるいは他の何かだろうか。別の問い方をすれば、遂行的意味の効力は何に由来しているのだろうか。

このように意味の問題は複雑である。しかし、一般にコミュニケーションが意味のやり取りをめぐる営まれるのであれば、そして心理療法においてもやはりそうであるなら、この問題に一定の見通しを持っておくことが必要になると思われる。

本章では、クライアントは心理療法の面接において何を語るのか、語るとはどういう営みなのか、語ることにはどのような意味が伴うのか、といったことに焦点を当てて検討してきた。それは、次章で検討するように、セラピストはクライアントの語りをどのように聞けばよいのか、クライアントの語りをどのように理解すればいいのかを考えるための基礎としての、予備的な作業としての検討であった。このように見てくると、クライアントをセラピストが理解することは途方もなく困難なことのようにも思われる。それ以上に、セラピストがクライアントを理解するとはどういう事態のことを指しているのか、それこそが検討されねばならないことであるように思われる。

私たちは暗黙のうちに、理解することの方が自然であって、誤解が生じるのはイレギュラーな事態であると思っているのではないだろうか。誤解が生じるのは、どこかに間違いや不適切さがあるからだ、漠然と考えているのではないだろうか。しかし、事態はむしろ逆なのではないだろうか。誤解が生じる、あるいはわかり合えないことの方が自然であって、理解が生じる方がイレギュラーな事態ではないのだろうか。心理療法とは、はじめはわかり合えないクライアントとセラピストが、丁寧な営みを積み重ねて、苦勞の末に得難い理解にたどり着く、そのような営みではないのだろうか。理解とは、出発点ではなく、

目指されるべきゴールではないだろうか。

このように、クライアントとセラピストのコミュニケーションについて、そしてクライアントの語りをセラピストが理解するとはどのようなことであるのかについて、私たちが自覚的あるいは無自覚的にどのように考えているかが、私たちの心理療法の営みのあり方を大きく左右することになるのは、確かなことであるように思われる。

第6章 セラピストは何を聞くのか

心理療法において、セラピストはクライアントの話聞き、適宜クライアントの話に回答していく。セラピストがどのような応答を行うかは、クライアントの話をもどのように聞き、それをどのように受け止めるか、そしてセラピストの役割をどのようなものとして理解しているかに左右される。前章においては、クライアントの語りを理解する手がかりとして、経験の構成モデルに立脚した見方を提示した。本章では、前章での検討を踏まえて、セラピストはクライアントの語りをもどのように聞けばよいのか、どのように聞くことができるのかについて、いくつかの可能性を検討する。

第1節 心理療法におけるセラピストの役割

心理療法において、セラピストはクライアントの語りを聞くことに多くの時間と労力を費やす。セラピストがクライアントの語りを聞くことには、心理療法を進めるうえでどのような意味があるのだろうか。より端的に表現すれば、セラピストは何のために、何を目的に、クライアントの語りをも聞くのだろうか。このことについて、より本格的な検討は次章で行うが、本節において、まずは簡単に検討しておきたい。

上に述べた問いは、心理療法の作用に関わる問いでもある。心理療法では何が行われ、何が起きて、結果として何がもたらされるのか、心理療法の過程を動かしていくものは何であるのか、こうしたことを包括的に含むのが心理療法の作用についての考え方である。そして、心理療法の作用についての考え方と、セラピストが果たすべき役割についての考え方は密接につながっており、セラピストが具体的に個々の場面でどのように応答するかを暗黙的かつ明示的に規定するのは、そうした考え方であると思われる。

心理療法の作用を主な焦点とした検討はやはり次章で行うこととして、ここでは簡潔な見通しを述べるに留めておきたい。筆者の理解では、心理療法の作用の中核は、クライアントの経験の可能性の拡張にある。別の言い方をすれば、クライアントが自分の経験にそれまでとは別のやり方でも向き合えるようになること、それまで向き合うことのなかった経験にも向き合えるようになることである。そして、そのためには、セラピストの存在が不可欠であると筆者は考える。クライアントの語りにも聞き入り、クライアントが自らの経験を構成していく過程に立ち会うこと、ときには大きな困難を伴うその過程に共に取り組むこと、それがセラピストの役割であるというのが、経験の構成モデルに立脚する筆者の

見通しである。

心理療法を学び始めて間もない人たちから、「クライアントの話を聞いているだけでいいのですか?」「クライアントの話を聞いてきましたが、次に何をすればいいのかわかりません」といった声を聞くことがしばしばある。このような疑問の背景には、おそらく次のような素朴な心理療法の作用についての考え方があると思われる。それは、セラピストはクライアントの話を聞いてクライアントの問題を同定し、同定された問題の解決にクライアントと共に取り組むものだ、といった考え方である。そのような考え方においては、クライアントの語りを聞くことは、問題解決という次のステップのための手段と見なされていると言えるだろう。

筆者が本論文全体を通じて論じる、経験の構成モデルに立脚した心理療法の作用についての考え方においては、クライアントの語りを聞くことそのものが、心理療法の作用の本質的な一部である。それは、情報収集の手段でもなければ、仮説形成の手段でもない。本論文で論じる心理療法作用についての考え方においては、クライアントの語りについてセラピストが何を理解するかということ以上に、クライアントが自分の経験に新しい向き合い方をし、自分についての新しい理解に踏み出す過程に、セラピストがどのように立ち会うかが重要であると考えられる。そして、セラピストがクライアントの語りにどのように立ち会うかを左右するのが、クライアントの語りをセラピストがどのように聞き、それにどのように応答するのかという問題なのである。

それでは、クライアントの語りを聞くセラピストの聞き方には、どのようなものがあるのだろうか。例えば松木 (2015) は、「こころに出会うための能動的な聴き方」としての「支持的な聴き方」と、「こころを感知する聴き方」としての「精神分析的リスニング」とを提示している。そのうえで、それぞれの特徴と身につけ方を、前者を4つのステップ、後者を3つのステップに分けて論じている。筆者の理解では、松木の議論は、クライアントのこころをセラピストが理解するとはどういうことかという観点から、比較的素朴な聞き方から松木が立脚するクライン学派的な転移・逆転移理解を背景とした精緻な聞き方に至るまで、聞き方をステップアップする方法として、「聴き方」を論じたものである。

本節での筆者の関心と意図は、先述の松木とは異なるところにある。筆者は、セラピストによるクライアントの語りの聞き方として、それが心理療法の作用と直接に結びついているという観点を背景に、4つのタイプを取り上げて検討したい³⁵。それは、①クライエ

³⁵ ただし、以下に筆者が取り上げる「聞き方のタイプ」は、網羅的でも、相互排他的でもない。あくまで、セラピ

ントの語りを文字通りに受け止めて聞く聞き方、②クライアントが何を言わんとしているのかを聞く聞き方、③クライアントの語りをクライアントの心の状態の記述あるいは反映として聞く聞き方、そして、④クライアントの語りがどこに向かうのかを見届けようと努めて聞く聞き方である。以下に、それぞれの聞き方の特徴と、そのような聞き方がセラピストのどのような姿勢と関連し、心理療法をどのように導く可能性があるかについて検討する。

第2節 クライアントの語りを文字通りに受け止めて聞く

まず取り上げるのは、クライアントの語りをそのまま素直に、文字通りに、額面通りに受け止めようとする聞き方である³⁶。このような聞き方は、日常的に誰もがやっている、常識的な話の聞き方で、とても簡単そうに思えるかもしれないが、実際にはけっして簡単なことではない。

クライアントの語りを「文字通りに」、あるいは「額面通りに」受け止めるといっても、実際には、何らかのコンテキストを背景としなければ、私たちは語りの意味を受け取ることはできない。したがって、実際には、たとえその自覚がなくても、自分ではクライアントの語りを「文字通りに」受け止めていると思っているときにも、セラピストはクライアントの語りを何らかのコンテキストに位置づけて聞いていると考えられる。しかも、私たちはそのようなときにしばしば、無自覚のうちに、自分自身の生活経験を暗黙のコンテキストとして、クライアントの話聞きがちである。つまり、セラピストは知らず知らずのうちに、自覚的にはクライアントの語りを文字通りに受け取ろうとしているつもりでも、結果的には自分にはクライアントの語りがどのように聞こえるかという立場から、クライアントの話聞いていることが多いと考えられる。

クライアントの語りを文字通りに受け止めようとするうえで重要なのは、実は「文字通り」に聞くことそのものではない。重要なのは、クライアントの語りを、クライアントが自覚しているコンテキストにおいて、クライアントの自覚のあり方にそって、表現されている語りをそのままに受け取ることである。大事なことは、クライアントの語りがセラピストにどのように聞こえるかではなく、クライアントの語りを、そのコンテキストも含

ストの聞き方にはどのようなものがありうるかについての、発見的な目的での筆者の試行的な分類である。

³⁶ 上述の松木（2015）も、「ステップ①」として「クライアントが語り表すことをそのままに受け取り、そのままについていく」ことを取り上げているが、筆者が本節で論じようと試みているまさにその問題が、松木の議論では関心を払われることなく暗黙的な前提として埋もれているように、筆者には感じられる。

めて、クライアントの経験している世界そのものとして受け止めることである。これは見方を変えれば、クライアントの経験世界を想像的に理解するための聞き方であるともいえるだろう³⁷。

例を挙げて考えてみたい。

[クライアントの語りの例]

友だちが待ち合わせに10分ほど遅れてきたのに、「ごめん」の一言もなかったと語るクライアントに、そのときそのことをどう思ったのかをセラピストが尋ねたところ、クライアントは、「別に何も思わなかった」と答えた。

例えばこのとき、セラピストは次のように考えるかもしれない。クライアントは、本当は腹を立てていたのに、自分の本心を話していないのではないかと。そこで、セラピストは次のように言うかもしれない。「腹が立つ気持ちもあったかもしれませんが」と。それに対して、クライアントは、「ごめんの一言があってもいいのには思いましたが、腹は立ちませんでした」と答えたでしょう。セラピストは、さらにこう考えるかもしれない。クライアントは、まだ自分の本心を正直に話せないのだろうか、あるいは、自分が腹立ちを感じることを恐れているのだろうか。

上に例に挙げたようなクライアントとセラピストの間のやり取り、そしてセラピストの推論は、一般的でありふれたものだと思われる。ここでポイントとなるのは、セラピストはクライアントの話を文字通りには受け止めていないと考えられることである。セラピストの推論には、クライアントの語りの「背後」に、クライアントが直接語っていない「本心」が想定されていることがうかがい知られる。私たちは、セラピストとして、しばしばこのような話の聞き方をしていると思われる。それでは、私たちは、クライアントの話を聞くときに、どうしてそのような聞き方をするのだろうか。例えば、クライアントの語る話を、セラピストが自分の経験に置き換えて聞くような場合に、そのような聞き方になるのではないかと思われる。つまり、自分がクライアントと同様の立場にあったら、自分は何を感じるだろうかという暗黙の想定のもとに、クライアントの話を聞く聞き方である。そして、私たちはしばしば、とりわけ心理療法を学び初めて間もない人に比較的好く見られることであるが、そのような話の聞き方を、いわゆる「共感的」な聞き方であると誤解

³⁷ Rogers (1957) の共感的理解として一般に広く理解されているものに近いと思われる。

してしまっている場合がある。

クライアントの話を聞いて、セラピストは次のように考えるかもしれない。「自分だったら、待ち合わせに 10 分遅刻してきた友人が一言の詫びも言わなかったら、ちょっと腹を立てるだろう。それなのに、クライアントはクライアント自身の気持ちをそのようには言葉にしていない。クライアントは本心を語っていないに違いない」といったように。このような聞き方は、クライアントの語りを、セラピストの経験的コンテキストに位置づけて聞いた、セラピスト本位の自己移入的な聞き方と言えるだろう。そして、繰り返しになるが、私たちはしばしばそのような聞き方をしていると思われる。

セラピストは一般に、クライアントの話を「わかろう」「わかりたい」「理解しよう」「理解したい」と思う。このとき、私たちはしばしば、知らず知らずのうちに、「自分に」わかるように、「自分に」理解できるように話を聞こうとしがちであると思われる。しかし、心理療法において大事な話の聞き方は、クライアントの語りを「セラピストに」わかるように聞くことではなく、クライアントの語りを「クライアント自身に」わかるように聞くことではないだろうか。そして、そのような聞き方の延長として、結果的に、「セラピストにも」わかるようになるというのが実際であるように思われる。

セラピストが、クライアントの話を「自分に」わかるように聞こうと努めると、セラピストは知らず知らずのうちに、それを自分になじみのあるコンテキストに位置づけて聞こうとしてしまう。するとそれは、いつの間にか、セラピストの個人的な経験を通してクライアントの話聞く聞き方になってしまう。先程の例に戻れば、そのような場合に腹が立つのが自然であり、腹が立たないというクライアントのあり方は不自然である、といったセラピストの受け止め方にもつながりかねない。それは、場合によっては、クライアントの経験に聞き入るように努めているにもかかわらず、実際にはセラピスト自身の経験を思い浮かべているに過ぎないということにもなるだろう。セラピストがこのようなことに無自覚であり続けると、極端な場合、心理療法の暗黙的な目標は、クライアントがセラピストと同じような「セラピストにとって自然な感じ方・受け止め方」ができるようになること、といったものになる恐れさえあると思われる。

再確認すれば、クライアントの語りを文字通りに、額面通りに聞く、受け止めるとは、クライアントの語りをクライアントのコンテキストに位置づけて聞くことであった。それは先程の例を取り上げれば、「別に何とも思わなかった」というクライアントの発言を、クライアントのコンテキストに位置づけて聞くことである。しかし、ここでクライアントの

コンテキストとは何だろうか。筆者の考えでは、このような問いこそが、心理療法の営みの主要な焦点の一つであると思われる。これまで見てきたように、セラピストがいわば自己移入的に想定する「クライアントの本心」は焦点ではない。セラピストのコンテキストとは異なるクライアントのコンテキストにおいて、クライアントの語る経験がどのように紡ぎ出されて成立しているのかが焦点であると、筆者には思われる。

「別に何とも思わなかった」というクライアントの発言を、文字通りに、額面通りに聞く、受け止めるとは、セラピストが、「ああ、そうなんですね。別に何とも思わなかったのですね。」と、クライアントの言うままに聞き流すことではない。そのような聞き方は、そもそもクライアントの話を聞かない聞き方だと言ってもいいように思われる。なぜなら、そこでは、語られている言葉の辞書的な意味は聞き取られているかもしれないが、クライアントがその語りによって構成している経験には、セラピストは耳を傾けていないからである。つまり、そのような聞き方においては、クライアントの語りのコンテキストが考慮に入れられていないのである。

それでは、クライアントの発言を位置づけるべきクライアントのコンテキストとは何なのだろうか。それこそが、先程も述べたように、筆者が心理療法の営みの主要な焦点の一つと考えるものであり、セラピストが「わかりたい」「理解したい」と思うその対象であるべきものと筆者が考えるものである。

再び先程の例に戻って考えてみたい。なぜクライアントは 10 分待たされても「別に何とも思わない」のだろうか。セラピストにとっては不思議に思えるその感じ方が、クライアントにとっては自明のものであるのかもしれない。そもそも、それが自明であるとかないとか、そんな疑問や問いは、クライアントには思い浮かんだことすらないかもしれない。セラピストは次のように考えることができるかもしれない。「クライアントの経験のあり方は、セラピストの経験のあり方とは違っているようだ。自分にはまだわからないが、クライアントの経験のあり方はどのようになっているのだろうか、クライアントが生を営んでいるコンテキストは、セラピストが生を営んでいるコンテキストと、どのように重なり、どのように異なるのだろうか」と。このような疑問を抱きつつ、クライアントの語りに聞き入ろうと努める、それが筆者の考える、文字通りに、額面通りに、受け止める聞き方である。筆者の考えでは、この聞き方のポイントは、クライアントの話を聞いていてセラピストが感じる腑に落ちない感じ、「わからなさ」と、その「わからなさ」を、どのようなわからなさとして、セラピストが自分の中に抱えようとするかにある。

第3節 クライアントが何を言わんとしているのかを聞く

次に筆者が検討したいのは、クライアントの語りがセラピストに何を伝えようとしているのかに聞き入る聞き方である。ここには、クライアントは語ることを通して、セラピストに何かを伝えようとしているのだという暗黙的な前提がある。そして、そのような前提の背景にあるのは、前章において検討した、「今・ここで・セラピストと共にいて」というクライアントの語りのパースペクティブ性についての理解である。

この聞き方においては、クライアントがセラピストに向けて伝えようとしている何かは、クライアント自身に自覚されている場合もあれば、ほとんど無自覚の場合もあると捉えられる。そこでは、クライアントは自分が語る言葉の文字通りの意味とは別の意味を（も）セラピストに伝えようと、自覚的あるいは無自覚的に話をしていると捉えられる。

ここで、先ほど検討した、クライアントの語りを文字通りに聞く聞き方との相違を見ておきたい。クライアントの語りを文字通りに聞く聞き方においては、セラピストはクライアントの経験している世界をクライアントの経験しているままに受け取ろうと努めることに重点があった。そこでセラピストに潜在的に生じる問いは、クライアントの語る経験の世界の立ち上がりを規定しているのは何だろうかという、言わばクライアントの経験の成立条件に対する問いである。

これに対して、クライアントの語りが何を言わんとしているかを聞く聞き方は、クライアントはその話を通して、その話を語ることで、自覚的に、あるいは無自覚的に、何をセラピストに伝えようとしているかを受け取ろうと努めることに重点がある。前章で導入した「発話的意味」と「遂行的意味」の区別を援用すれば、クライアントの語りを持つ遂行的意味を捉えようとする聞き方である。そこでセラピストに潜在的に生じる問いは、クライアントはセラピストに何を受け取ってほしいのだろうか、セラピストに対して何が言いたいのだろうかという、クライアントのコミュニケーションの意図に対する問いである³⁸。

クライアントの語りを文字通りに聞く聞き方と、クライアントが言わんとすることを聞く聞き方とは、このようにその重点が異なる。重点が異なるからといって、それらが両立不可能なわけではない。しかし、実際には、セラピストが自覚的にであれ、無自覚的にであれ、何に重点を置いてクライアントの話を聞いているかによって、セラピストがクラ

³⁸ 経験の構成モデルの立場からすれば、厳密には、語り手の「意図」は、語りよりも前にあるのではなく、語ることを通じて事後的に発効すると捉える方が適切であると思われる。

イベントの話から何を「わかろう」とするかも異なってくるであろうし、そこから、クライアントに具体的にどのように応答し、どのように介入しようとするかも異なってくるであろうと思われる。

先ほども例に挙げた、待ち合わせに遅刻した友人のエピソードを語るクライアントについて考えてみよう。セラピストが、クライアントが何を言わんとしているかを聞くことに重点を置いている場合、この話をどのように聞くだらうか。例えば、セラピストは次のようにさまざまな可能性について考えるかもしれない。クライアントは、なぜ今このエピソードについて話をしているのだらう。単に事務的に記憶にある出来事を報告しているのだらうか。自分には困った友人がいるということを知ってほしいのだらうか。自分は遅刻に対して寛大であるということアピールしたいのだらうか。いや、やはり「本当は」腹が立つのだけれどそれを相手に伝えられなくて困っているということを言いたいのだらうか。あるいはひょっとして、セラピストは自分で気づかないところで何かクライアントに失礼な振る舞いをしているということを暗にほめかしているのだらうか。

セラピストがこのようにクライアントの話を聞くということは、クライアントの語りをセラピストに対するコミュニケーションとして聞こうとするということである。そこでは、クライアントの語りは、セラピストが距離を置いて対象化できる対象ではない。なぜなら、クライアントの語りの中に、セラピストの存在がすでに組み込まれているからである。クライアントの語りの中には、クライアントから見た、クライアントによって受け止められた、セラピストの存在が浸透しているのである。

このような理解に立って、クライアントの言わんとすることを聞こうとするためには、ここでもやはりクライアントの発言を適切に位置づけるコンテキストが不可欠である。そして、このスタンスにおいて重要となるコンテキストは、クライアントがセラピストの存在をどのように受け止めており、セラピストに対してどのようなニーズや期待や不安を抱いているか、である。クライアントが何を言わんとしているのかは、クライアントの発言を文字通りに分析してみてもわからない。クライアントがセラピストのことをどのように感じているかというコンテキストがわからなければ、クライアントが言わんとすることを理解することはできない。ここでは、セラピストが「わかろう」と努めるのは、クライアントがセラピストのことをどのような存在として感じているかということになる。

こうして、クライアントの語りをクライアントは何を言わんとしているのかという観点から聞くことに努めるセラピストは、クライアントはセラピストに、そして心理療法その

ものに、何を期待して今こうして話をしているのだろうか、という問いに絶えず向き合い続けることになる。そして、そのようなスタンスから、クライアントの語りを理解するための適切なコンテキストを探し続けることになる。

第4節 クライアントの語りをクライアントの心の状態の記述あるいは反映として聞く

次いで筆者が検討したいのは、クライアントの語りを、クライアントの心のうちにある内的イメージについての語りとして聞く聞き方である。心理療法の世界においては、ときに、「クライアントが語っているのはクライアントの心的現実である」といった言説が聞かれることがある。ここで筆者が検討したい聞き方は、そのような捉えられ方とも関連するものである³⁹。

一般に、この聞き方においては、クライアントが語っているのは、「現実」のことではなく、「内的現実」のことであると捉えられていると考えられる。そこでは、「現実」と「内的現実」が区別可能なものとして捉えられていることになる。それでは、それらはどのように区別されるのだろうか。

この区別について考えるには、思考の補助線として、心身二元論の考え方を導入しておくことが好都合だと思われる。心身二元論には実際には多様なバリエーションがあるが、ここでは素朴な形の心身二元論を導入しておきたい。簡潔に述べれば、心身二元論は物理的世界と心理的世界を別の次元の世界と考える立場である。ここでの筆者の議論との関わりで述べれば、心身二元論からは、私たちは物理的世界の中に生きている存在ではあるが、私たちが意識している世界は知覚的世界であって、物理的世界が何らかのやり方で私たちの心のうちに表象された世界であるという立場が導き出される。つまり、そこから導き出されるのは、私たちは物理的世界を私たちの意識に映し出して生きているという考え方である⁴⁰。

上に述べたような考え方を前提すれば、クライアントが語っているのはクライアントの内的現実であるという捉え方は、クライアントは自分の心の中に映し出されている世界を言葉で描写しているのだという捉え方と相性がいいことがわかる。例を挙げて考えてみたい。クライアントがセラピストに、「今日のセラピストはいつもに比べて、私の話に関心を

³⁹ このタイプの聞き方は、後にも触れるように一者心理学の考え方と親和性が高いと考えられる。

⁴⁰ 「心的現実」の問題に対する哲学からのアプローチとして、野矢（2016）の議論が参考になる。また、大森（1981）の「立ち現れ一元論」は、この問題への解答のあり方の一つとして興味深い。

持っていないように感じる」と話したとしよう。このようなクライアントのコメントを、セラピストはどのように受け止めて聞く可能性が考えられるだろうか。

まずは、このクライアントのコメントを、そのときのセラピストのあり方に対するクライアントのどちらかといえば否定的な、そうであってほしくないという願いを含んだ経験として、セラピストは聞くかもしれない。しかし、もう少し考えを進めてみると、セラピストの基本的な心理療法に対するスタンスのあり方によって、セラピストの受け止め方に違いが生まれてくることが考えられる。例えば、クライアントが語ることを、二者心理学的なスタンスから、「クライアントとセラピストの間の現実」と基本的に捉えるセラピストであれば、今日の自分のどのようなあり方がクライアントにそう感じさせるのだろうか、今日の自分はいつもに比べてクライアントの話に関心を持っていないのだろうか、自問して考えるかもしれない。一方で、クライアントが語ることを、一者心理学的なスタンスから、「クライアントの内的現実」と基本的に捉えるセラピストであれば、今日のクライアントはなぜセラピストをいつもと違ったように感じるのだろうか、クライアントの心の中に何が起きているのだろうかと考えるかもしれない。例えばこのようなセラピストの受け止め方の違いは、その後のセラピストの応答のあり方や心理療法の過程への関与のあり方に違いを生む可能性が高いだろう。そしてこのことは、突き詰めれば、やはり心理療法の作用についての考え方の相違につながると思われる。

ここでは、後者の立場の心理療法作用についての考え方に焦点を当てたい。後者の立場は、ある種の一者心理学的な立場として捉えることができる。この立場においては、筆者の考えでは、次のように想定されていると考えられる。「クライアントは、現実を受け止めるにあたって、さまざまな加工を行い、独自の知覚的世界、あるいは表象的世界を作り上げる。クライアントが語る経験は、そのようにしてフィルタリングされ、加工されて生み出された世界であり、それは『現実』と一致することもあれば一致しないこともある」と。このとき、クライアントの語りをクライアントの内的現実についての語りとして聞くセラピストは、クライアントの語る「内的現実」が「現実」とどの程度一致しているのかを、しばしば比較考量しながら聞いていると思われる。そして、「内的現実」と「現実」の不一致が著しいところに、クライアントの歪曲、あるいは心の病理の存在を想定しやすくなる。そのような立場のセラピストにおいては、セラピーの目標はそうした歪曲を修正することであり、セラピストの介入的応答を通じてそうした歪曲が解消されることが心理療法の作用であるとして定式化されると思われる。

このような聞き方において、セラピストが「わかろう」と努めるのは、クライアントの語りのどの部分に「歪曲」が存在するかということになると考えられる。そこでは、クライアントの語りはどこで「現実」から離れてしまうのか、クライアントの語りはどこまで現実に沿っているのかを理解することが、セラピストの姿勢の基本となるだろう。そして、セラピストはある種の客観的な判定者の役割を演じることになると思われる。

本論文の、そして筆者の立場は、上に述べたような心理療法作用についての考え方に疑問を投げかけるものであり、それとは別の心理療法作用の可能性を検討するものである。したがって、筆者はこの聞き方とは異なる、さらに別の聞き方の可能性を検討したい。

第5節 クライエントの語りがどこに向かうのかを見届けようと努めて聞く

ここで筆者が最後に取り上げて検討したい聞き方は、クライアントの語りを、いままさに経験が構成されている過程として、そしてその過程がどこへ向かい、どこへ進もうとするのかを見届けようとする聞き方である。

この聞き方の背景には、第3章において検討したように、自分の体験は自分一人では経験へと構成することができない、自分の体験を経験へと構成するには実在の、あるいは想像上の他者の存在が不可欠であるという考え方がある。Stern (2010) は、遭難することによりたった一人で孤立する極限状況に置かれた人物を主人公とするフィクション作品を複数取り上げて論じることで、経験の構成における「立ち会うこと (witness)」の決定的な意義を明らかにしている⁴¹。

クライアントの語りの行き先を見届けようとする聞き方とは、このような観点からすれば、クライアントの経験の構成に立ち会おうとする聞き方である。それは、とても積極的な聞き方であるように筆者には思われる。そこには、セラピストの能動的な関与がある。つまり、クライアントの語りのどの部分を聞き届けることができ、どの部分は聞き届けることができないのかは、セラピストの聞き方、すなわちセラピストの関与のあり方に左右されると考えられる。ただしここでは、そもそもクライアントが何をどのように語り、セラピストがどのように聞くかを、クライアントにとってもセラピストにとっても暗黙的に強く規定しているのが対人関係の場であったことを、改めて思い出す必要がある⁴²。

⁴¹ Stern は具体的な作品例として、Theodore Sturgeon 原作の映画『縮みゆく人間』、Tom Hanks 主演の映画『キャスト・アウェイ』、そして Daniel Defoe の小説『ロビンソン・クルーソー』を取り上げている。

⁴² 能動的で積極的であることは、意のままであることを意味しない。第3章で検討したように、こうしたセラピストの能動性は、セラピーにおける対人関係の場に強く制約されている。

それでは、それは具体的にはどのような話の聞き方になるのだろうか。何度も取り上げた、待ち合わせに遅刻した友人のエピソードを語るクライアントの例について検討してみたい。

これまでに見てきたように、セラピストの話の聞き方としては、クライアントの経験のコンテキストや、クライアントとセラピストの間の対人的なコンテキストを「わかって」とする聞き方が考えられた。あるいは、クライアントの心的現実、対象関係の布置といったことを「わかって」とする聞き方も考えられるところであった。それでは、クライアントの経験の構成に立ち会う聞き方とはどのような聞き方なのだろうか。それは、第一に、クライアントの語りが今まさに経験を生み出しつつあるということ意識した聞き方である。クライアントは、すでに形作られた経験を説明しているのでもなければ、特定の意図があってセラピストに話をしているのでもない。話をしていく過程そのものが、それらを今形作るのである。つまり、あるコンテキストが先にあって、そこで語りが生み出されているというのでもない。語ることに、語るそばから、コンテキストと語りの両方を同時に生み出しているという捉え方である。語りも、そのコンテキストも、今まさに流動しつつある。しかも、経験の構成モデルに立てば、その過程にセラピストもまた不可避免的に組み込まれている。セラピストのあり方が、クライアントの語りへの聞き入り方が、クライアントの語りに大きく影響する。そこでは、セラピストは、単にクライアントの語り<を>聞くのではない。クライアントの語り<に>参画しているのである。

このような観点から見れば、クライアントの語りは、クライアントの閉じた体験のみを反映しているのではない。クライアントの語りには、今セラピストと共にいるという体験が、セラピストの現実のあり方が反映している。クライアントの語りは、クライアント個人の体験を反映しているだけでなく、クライアントとセラピストの二人の体験のあり方も反映している。心理療法の面接における二人のあり方が、クライアントがそのとき何を語り、どのような経験を構成し、またどのように経験を構成するかを左右する。クライアントとセラピストが、クライアントの体験のどの部分に触れることができ、どの部分に触れることができないかは、二人のあり方に左右される。このようなセラピストの聞き方は、すぐれて対話的な聞き方であると言える。そしてそのとき、セラピストは積極的な聞き手であり、積極的な対話者であると言える。

以上、本章では、クライアントの語りを聞くセラピストの聞き方として、4つのタイプを取り上げて、それぞれの特徴とそこで暗黙的に前提とされているもの、そしてそうした

聞き方が心理療法の過程をどのような方向へと導く可能性があるのかについて検討した。
次章では、クライアントの語りを聞くセラピストのこうした聞き方が、心理療法作用に関連して持つ意義について改めて検討する。

第7章 クライエントの語りをセラピストが聞くことの意義⁴³

第5章ではクライアントは何を語るのかについて、第6章ではセラピストは何を聞くのかについて、それぞれ検討を行った。すでに第6章でも部分的に論じたように、クライアントが語ることとセラピストが聞くことは、相互に深く関連しあっており、その関連こそが、改めて検討されねばならない。つまり、クライアントの語りをセラピストがどのように聞くかが、クライアントの語りにどのように影響するのか、それを心理療法の作用という観点からどのように考えることができるのかという問いが、探究されねばならない。本章が取り組むのは、そのような問題である。

第1節 問題の所在

公認心理師の資格が法制化され、数年後には、公認心理師の資格取得のために整備されるカリキュラムで学んだ有資格者の誕生が見込まれている。このような歴史の節目に立ち会っている私たちは、改めて心理臨床のあり方について、自らに問い直すことを避けることはできない。

筆者の実感では、臨床心理士養成指定大学院で学ぶ大学院生や若い臨床心理士たちと接する中で、彼らがクライアントの話を「聞いていない」と感じさせられる機会が増えてきている。クライアントが、なぜその時、そのようなやり方で、その話をしているのかに、積極的な関心を持たない人たちが増えていくと筆者には感じられる。クライアントが「語る」ことの意味と、セラピストが「聞く」ことの意味を、心理臨床を学び始めの時期はもちろん、私たちは常に自らに問いかけ続ける必要があるのではないだろうか。

現在、心理療法のオリエンテーションには、大きく分けて、実証主義的な考え方に基づくものと、社会構成主義的な考え方に基づくものがあると捉えられる(例えば、McLeod, 1997)。一般に、前者が普遍化の方向を目指すのに対して、後者は個別性を重視する。こうした考え方の違いは、それぞれの心理療法の実践のあり方、セラピストの訓練のあり方、そして心理療法の研究のあり方の違いにも反映している。

いずれの心理療法のオリエンテーションにおいても、その実践においては、クライアントとの面接が基本となることは言うまでもない。クライアントの話を聞き、クライアントと話し合うことは、あらゆるセラピストにとって、欠かせない活動である。しかし、面接

⁴³ 本章は、小松(2018)の一部を書き改めて加筆修正を施したものである。

において、クライアントの話をどのように聞き、クライアントと何をどのように話し合うかは、セラピストの依拠するオリエンテーションによって異なってくる。そうした相違は、それぞれのオリエンテーションが、主としてどのような理論に基づいており、心理療法の作用についてどのような仮説を持っているかによるものである。

総じて、実証主義的なアプローチにおいては、クライアントの話を聞く主たる目的は、クライアントが直面している問題の性質とメカニズムを適切に定式化して、エビデンスに基づいた最もふさわしい介入を選択することにあるだろう。そこでは、クライアントの話は、主としてクライアントの個人心理内に想定される、何らかの一定の心理的構造や過程を記述するものとして、あるいはそうしたものをセラピストが読み解くべきものとして、聞かれることになるだろう。クライアントが生きる現実、クライアントの主観的な経験のあり方や、クライアントが獲得してきた行動のパターンのあり方として捉えられるだろう。そして、クライアントの生きる現実が変容するためには、それらを変容させる介入が目指されるだろう。このようなアプローチにおいては、基本的には、聞くことはアセスメントのための情報収集の一手段であり、クライアントが語る行為は、セラピストのあり方から独立したものとして捉えられるだろう。

これに対して、社会構成主義的なアプローチにおいては、クライアントの話を聞く主たる目的は、クライアントの語りを生み出すことそのものにあるだろう。そこでは、クライアントの話は、クライアントが生きている現実のあり方がそのまま直接的に表現されたものとして聞かれるだろう。クライアントが生きる現実とは、クライアントが他者とのあいだに具体的に営んでいる関係のあり方として、他者と共に共同で構築されているものとして捉えられるだろう。そして、クライアントの話が、その内容や語り口や筋立てにおいて変容していくことが、そのままクライアントの生きる現実の変化として捉えられるだろう。このようなアプローチにおいては、聞くことはクライアントの語りへの参画に他ならず、クライアントが語る行為は、不可避免的にセラピストのあり方と織り合わされるものとして捉えられるだろう。

こうした大きな二つの潮流に対して、伝統的な心理療法の一つである精神分析的な心理療法の位置づけは微妙である。なぜなら、実証主義的なアプローチも、社会構成主義的なアプローチも、その現代的なあり方の源流をたどれば、精神分析的な心理療法の基礎にある精神分析に対するアンチテーゼとして生まれてきた側面があるからである。一方で、精神分析的な心理療法の世界に目を向けてみると、哲学や社会科学全般の「言語論的転回」や「関

係論的転回」と軌を一にするように、1990年代頃から、Stephen A. Mitchell が主唱者となり、関係精神分析という立場が提唱されてきた (Mitchell, 1993 : 岡野ら, 2011)。関係精神分析は、「今ここで」の関係に、つまり面接においてクライアントとセラピストとのあいだに生じる様々な水準の相互作用に、臨床的なリアリティを求めることを共通の認識としている。そこには、主な立場だけでも、自我心理学派、クライン学派、独立学派、自己心理学派、対人関係学派といった多様なオリエンテーションのセラピストが参画している。しかし、一口に「今ここで」の関係に臨床的なリアリティを求めると言っても、クライアントとセラピストのあいだの相互作用を、個人内心理の主題として、基本的には実証主義的なスタンスに親和性のある枠組みから理解する立場から、対人間の現実を主題として、社会構成主義的なスタンスに親和的な枠組みから理解する立場まで、その立場は様々である。

このような状況の中で、筆者が本章で目指すのは、個人を対象とした精神分析的な心理療法の立場から、とりわけ対人関係精神分析に立脚した精神分析的な心理療法の立場から、セラピストがクライアントの話をどのように聞くのかを主題として、クライアントが「語る」ことと、セラピストが「聞く」ことの意味を理論的に考察することである。その方法として、「語る」ことと「聞く」ことの意味を、セラピストが抱いている、そしてセラピストが依拠するオリエンテーションが立脚している、暗黙的な認識論的前提にさかのぼって検討する。その検討を通して、セラピストが抱く暗黙的な前提の違いが、「聞く」ことにどのような違いをもたらすかを明らかにするとともに、そうした違いを自覚することが私たちの臨床実践に何を意味することになるかについて考えたい。こうした検討全体を通して、「語る」ことと「聞く」ことが心理療法において持つ本質的な意味について改めて考えたい。

第2節 クライアントの語りと経験の関係

面接においてクライアントが語るのは、出来事、気持ち、思い、身体感覚といった、広い意味でのクライアントの経験であると言えるだろう。一般に、セラピストは、クライアントの語りを聞いて、クライアントの経験を理解しようとし、クライアントがセラピストに伝えようとしていることを受け止めようと努める。クライアントの語りと経験との関係について改めて考えてみると、私たちの多くは、例えば、次のような暗黙の想定を抱いているように思われる。それは、「クライアントの心の中には、クライアントの経験があり、クライアントはそれを言葉にして話す。セラピストは、クライアントの話を聞いて、クラ

イベントの語りの基にあるクライアントの経験を、セラピストの心の中で再構成する」といった想定である。

これまで論じてきた Stern の未構成の経験の概念に照らせば、先ほど取り上げた暗黙の想定には、「経験はそれ自体として既定の意味を持つ」という前提が含まれていると捉えることができる。そこでは、語ることは記述することとして捉えられている。このような、経験にはそれを経験する主体とは独立した既定の意味があるという前提は、実証主義の考え方に親和性が高い。このような考え方においては、一つの客観的な現実が存在する。現実には、正しく捉えられるか、誤って捉えられるかのいずれかである。このような考え方は、エビデンスを重んじる行動療法や認知行動療法の立場と親和性が高いと言えるだろう。

これに対して、未構成の経験の概念は、現実を対人間の相互作用の中で生み出されるものと捉える社会構成主義との親和性が高い。社会構成主義は、個人から独立して客観的に存在すると想定される現実よりも、関係の中で生まれる現実の方を重視する立場である(例えば、Gergen, 1997)。このような立場においては、クライアントが、「客観的な現実」を正しく歪みなく捉えているかどうかではなく、クライアントがどのようなやり方で、どのような現実を自分の世界として生きているかが問題になる。例えば、体験過程を重視するフォーカシングや、家族療法をベースとしてナラティブを重視するアプローチは、より社会構成主義に親和性のある立場として捉えることができるだろう。

筆者は、経験とその語りとの関係を理解するうえで、Stern の考え方に依拠しつつ、それを拡張する形で、「経験の構成モデル」という立場を提唱する。Stern 自身は、すでにはっきりとした輪郭と意味を備えている抑圧された無意識的な経験との対比で、解離された無意識的な経験として未構成の経験の概念を提唱した。これに対して筆者は、この概念の持つ含意を拡張して、私たちの経験一般に適用したいと考える。筆者が提唱するのは、「無意識的な経験は、すべて未構成の状態にある」という考え方である。このような考え方にしたがえば、クライアントの語りとは、すでに心の中ではっきりとした輪郭と意味を備えた経験を、言葉で「記述する」ことではない。まだはっきりとしない経験を、言葉にしてかたどって「構成する」ことである。

第3節 経験の構成モデルから見たクライアントの語りの意義

私たちが経験の性質を、そして言葉の働きを、どのように捉えるかによって、クライアントに対するセラピストの関わり方や、その面接の目標についての考え方は左右される(例

えば、吾妻，2011)。そこで、経験の構成モデルは心理療法の実践に対して、とりわけクライアントの語りを聞くことに関わって、どのような意義を持つのかを以下に検討したい。

心理臨床の営みにおいて、クライアントとセラピストの関係のあり方が重要であり、それが営みの成否を左右することは、一般常識に属する、広く共有された経験的な認識と言えるだろう。しかし、改めて考えてみたとき、それはどのような意味においてであろうか。

素朴に考えてみるなら、クライアントとセラピストの良好な関係は、クライアントが「心を開いて」自分の経験を語るのに好都合であると思われる。私たちは一般に、関係が良好である方が、クライアントは自分の経験にアクセスしやすく、またそれを表出することが容易であると考えがちであろう。そこでは、例えば、誰の目を気兼ねすることもなく、自分自身のためだけに日記を書くように、率直に自分の経験を表現することが目指されていると捉えることができる。この場合、クライアントが語ることは、クライアントの内面をできるだけ曇りなく、率直にセラピストに伝えることにある。そして、セラピストには、クライアントがそのように率直に語れるように、その語りを妨げないように、クライアントの語りに寄り添うことが、その姿勢として求められるだろう。このような立場においては、クライアントの経験の「著者」はクライアント一人だけであり、また、クライアント一人だけではあねばならない。ここでは、クライアントの語りは、セラピストがクライアントの直面する問題を定式化するための手段として位置づけられるだろう。

クライアントの経験は、語ることによってかたどられると捉える経験の構成モデルは、これとは異なる考え方をたどることになる。そこでは、クライアントとセラピストの関係は、クライアントの語りがクライアントの経験をどのようにかたどるかに影響を及ぼす要因として捉えられる。この場合、クライアントの語りの意味は、自らの経験を言葉にしてかたどることそのものにある。そうすることで、クライアントは自らの経験を対象化して向き合い、それについて考えることができるようになる。クライアントは、それまであまり注意を向けてこなかったことについて、あるいはこれまである決まったやり方で意識してきた経験について、はじめて、あるいは改めて、セラピストに向けて語ることを通じて、経験の新しい構成を行う。それは、経験についての新しい気づきを生む。このとき、セラピストには、クライアントが経験を構成する営みに不可欠な他者としてクライアントの語りを聞くことが、その姿勢として求められる。このような考え方においては、クライアントの経験の「著者」はクライアント一人ではありえない。セラピストもまた、不可避免的に

クライアントの経験の「共同著者」の一人となるより他ない。ここでは、クライアントの語りは、それ自体が心理療法の作用そのものの一部として位置づけられるだろう。

第4節 クライアントの語りと対人関係の場

経験の構成モデルに対しては、次のような疑問が提起されるかもしれない。それは、「クライアントが語ろうとする経験が、まだはっきりとしない漠然としたものであるなら、それを言葉にして話すことは、そもそもできないのではないか？」という疑問である。クライアントは、そもそも語りたことがあるからこそ面接を求め、セラピストに向けてそれを語ろうと努めるとするのが一般的な理解だろう。確かに、もしクライアントが純粋に独りであるのなら、まだはっきりとしない漠然としたものを言葉にしようとするのではないだろうし、そもそも言葉にすることはできないだろう。だからこそ、クライアントの語りを聞くセラピストがクライアントと共にいることが、本質的な意味を持つのである。Stern (2010) は、経験の構成には、語り差し向けられ、その語りを聞く他者の存在が不可欠であることを指摘し、そうした過程を「立ち会うこと」と表現している。

Stern (1997) の考えでは、経験は放っておけば自ずと意識化されるわけではない。経験を意識化して構成するには、そこに能動的に注意を向ける必要がある。そこで Stern は、Sullivan (1953a) の考え方を参照して、経験に注意を向けずに未構成のままにしておくことを、解離の働きとして捉えている。そのような捉え方にしたくれば、私たちは日常的に自分の経験のかなりの部分を解離していると言えるだろう。私たちは通常、何か特別な理由がなければ自分の行動に注意を向けないし、たとえ注意を向けても、私たちが自分で意識化できるのは、自分の行動のごく一部に過ぎないだろう。

私たちが自分の行動に注意を向けて意識化する典型的な場面の一つは、誰かを相手に自分の行動を振り返って話す場面である。つまり、私たちの経験の多くは、他者との関わりの中で構成されると考えることができる。ただし、他者との関わりは経験が構成される必要条件ではあっても、十分条件ではない。他者との関わりの中にあっても、構成されない経験がある。経験となりうる潜在的に多様な可能性のうち、どの可能性が経験として意識化され意味づけられるかは、つまり、経験の構成のされ方は、その他者との関係のあり方によって、例えばそこでの安心感や不安のあり方によって、左右されるのである。

私たちが話す内容や考えを展開する筋道は、私たちが誰と共にいて誰に向けて語るのかによって、多かれ少なかれ影響される。一般に、私たちが語る内容は、それが誰に向けら

れているかというコンテクストに左右されると同時に、そのコンテクストから意味をくみ出す。そうした意味では、クライアントは、たとえセラピストから明確にそのように指示されても、自分の思うままに「自由に」話すことはできない。クライアントは、セラピストの存在に影響を受けて、セラピストと共にいるというコンテクストにおいて、セラピストに向けて語る以外の話し方をすることは、基本的にできないのである。

面接の場におけるクライアントとセラピストのように、他者と共にいて互いに影響を及ぼしあっている場を、Stern (1997) は、「対人関係の場」と呼ぶ。Stern の考えでは、対人関係の場は、経験の構成の可能性の条件であると同時に、その限界を規定する制約条件でもある。私たちはしばしば、誰かと一緒にいる場を、心地よく感じたり、堅苦しく感じたり、つかみ所がないと感じたりする。私たちは、そうした場を、日常的に主に触感的な感覚を通じて感知している。そして、しばしば、私たちが感知しているものは、単なる比喩的表現ではない。文字通りに、身体的な感覚として、息苦しく感じたり、胸が詰まる感じを持ったりする。そうした意味では、対人関係の場は、単なる抽象的な概念ではなく、具体的な作用を及ぼす、何らかの種類の実在であるとも考えられる。

クライアントとセラピストのあいだに生じるものについては、間主観性の観点から論じられることが多い。精神分析における間主観性に関する議論としては、Ogden (2004) の「アナリティック・サード (the analytic third)」の概念や、Benjamin (2017) の「サードネス (thirdness)」の概念がよく知られている。このように、クライアントとセラピストのあいだにあるものの作用を心理療法にとって本質的なものとみなす立場は、現代の精神分析的な心理療法において一定の位置を占めている。それらに共通しているのは、心理療法における近代的な主観・客観図式への批判と、伝統的にセラピストが持つべきとされてきた姿勢の捉え直しという主題である。ここで重要なこととして確認しておきたいのは、あいだは、あくまで主観と不可分でありながらも、主観に還元し尽くせないことである。

第5節 経験のコンテクストのありか

現代の精神分析的な心理療法において、面接関係において生じることはすべてクライアントの心の中のドラマが映し出されたものであり、セラピストはそうしたドラマが映し出される「空白のスクリーン」であるべきだという、過度に単純化されたモデルを素朴に信じているセラピストは、もはやほとんどいないと思われる (Hoffman, 1983)。面接において生じることに、面接過程の進み方に、セラピストが影響を及ぼすことを、ほぼすべてのセ

ラピストが認めるだろう。しかし、クライアントとセラピストのあいだに生じることを、どのように理解することができるかは、けっして単純な問題ではない。こうした問題について、ここでは、ある面接の断片を例として示して考えたい。

クライアントは、小学生の息子と暮らす母親である。いつも気丈に子どもの世話を頑張り続けてきたクライアントが、学校で問題行動を繰り返す息子について、ひとしきり直近の出来事を話した後に、少し沈黙してから、セラピストには少し唐突に感じられたことに、「どうして私の子どもは普通じゃないんだろう……。もう嫌だ」と、肩を落とし、ため息と共に吐き出すようにつぶやいた場面について考えてみたい。この語りを、セラピストはどのように聞くことができるだろうか。

例えば、クライアントの語りを、セラピストは話を聞いてはくれるが、自分を十分には助けてくれていないという暗黙的な非難の気持ちの表明として聞き、セラピスト自身の無力感にも注意を向けながら、そのような暗黙的な非難をクライアントに固有の対人関係のパターンと結びつけて考えようとするかもしれない。あるいは、クライアントの語りの響きに、それまでとは少し異なる調子を聞き取り、「もう嫌だ」という言葉が、この面接の中でどこから生まれてきたのかに関心を寄せるとともに、それまでクライアントの話を理解できているつもりでいたセラピスト自身のあり方を振り返ろうとするかもしれない。

もちろん、上に挙げた二つの例は、必ずしも相互排他的ではないし、セラピストの聞き方の主な可能性を尽くしているわけでもない。ここで注意を向けたいのは、二つの例の相違点である。これらの例におけるセラピストの聞き方は、いずれも今ここでの面接関係をコンテキストとしてのものであるが、両者には、そのコンテキストがクライアント及びセラピストの主観の中にあると捉えられているのか、クライアントとセラピストのあいだにあると捉えられているのかに違いがあると考えられる。そして、この違いは、セラピストの聞き方に本質的な違いをもたらすと考えられる。

私たちの経験を意味づけるコンテキストは自分の心の中にある、あるいは自分の心の働きこそがそうしたコンテキストであるという考え方は、伝統的な立場において一般的に受け入れられている考え方であると思われる。この立場においては、クライアントが「もう嫌だ」と語るのは、今ここでの面接関係をコンテキストにしたものであると捉えられるとともに、そのコンテキストは外在的な面接関係をクライアントが主観的に受け止めたものとして捉えられるだろう。そして、しばしば、そうした受け止め方にはクライアントに固有のパターンがあるとみなされ、そのようなパターンがクライアントのパーソナリティの

特徴として捉えられる。そのような捉え方からすれば、経験を意味づけるコンテキストは、主としてクライアントの主観のあり方に規定されると想定されるだろう。このような想定からすれば、セラピストがクライアントの経験の意味づけに何らかの介入を行おうとするなら、クライアントの主観的な受け止め方がその焦点となるだろう。例えば、精神分析において伝統的に解釈と呼ばれてきた介入技法は、その代表的な例の一つであろう。そのような介入においては、例えば、抑圧を解除することで無意識的な空想を意識にもたらす作用が想定されているだろう。

経験を意味づけるコンテキストは他者と自分とのあいだにあると考える経験の構成モデルの立場においては、今ここでの面接関係というコンテキストは、あくまで主観に対して独立しており、主観のみによって左右され尽くすことはない。それが対人関係の場という考え方の要点である。このような立場からは、経験の意味づけは、対人関係の場が変容することを通じて、その対人関係の場で構成できる経験の可能性が広がることによって変容すると捉えられる。そのような想定からすれば、セラピストがクライアントの経験の意味づけに何らかの介入を行おうとするなら、クライアントとセラピストのあいだの対人関係の場のあり方が焦点となるだろう。そして、経験の構成モデルの立場からすれば、対人関係の場に影響を及ぼす主要な源泉の一つが、クライアントの語りに対するセラピストの聞き方に他ならない。そこでは、例えば、解離を解消することによって、それまで目を向けられることのなかった自分のあり方を意識にもたらす作用が想定されているだろう。

こうした相違は、Gill (1994) が、内的なものとの外的なもの、および生来的なものとの経験的なものとの関係の問題を背景に、セラピストの振る舞いが対人過程としてクライアントに及ぼす影響について、セラピストによって理解のあり方に違いがあることを、一者心理学と二者心理学の違いの観点から論じていることとも重なる。同様の問題は、クライン派の Steiner (2006a, 2006b) と対人関係精神分析学派の Levenson (2006) が、逆転移とエナクトメントの評価をめぐる行った討論における、双方の立場の違いにも反映している。

第6節 対人関係の場と語りを聞くセラピストのあり方

ここで大きな問題となるのは、対人関係の場が介入の焦点となるということが、何を意味しているのかということである。この問題について考える素材として、ここで、Stern (2010) の臨床ヴィネットを検討したい。以下に、筆者による要約を示す。

中年期にさしかかり始めた独身女性であるクライアントとの心理療法を始めたセラピストは、その早い段階から、クライアントはクライアントなりのやり方で精一杯自分自身の苦しみについて話しているにも関わらず、どうしてもクライアントの心に近づくことができないという無力感を抱いていた。セラピストには、クライアントの訴えに対する自分の理解や応答が、どのように努力しても表面的で皮相的なものでしかないと感じられ、そのことにクライアントもまた欲求不満を感じていることが伝わってきていた。このままでは、クライアントは心理療法から離れていくだろうと、セラピストは懸念していたが、自分の無力感も膠着した関係もあまり変化しない状況が続いた。

そんな時期のある面接中に、セラピストは、自分が何を言うべきか確信が持てないままに、二人のあいだに起きているこの状況について、そのことをクライアントがどう感じているとセラピストである自分が考えているかについて、クライアントに改めて語りかけはじめた。セラピストには、クライアントがいつもとは少し違った反応を見せているように感じられ、面接室内の雰囲気には何か変化が生じたように感じられ始めた。その変化がどのようなものであるかを明確に捉えることはできなかったが、セラピストは自分が何を言おうとしているのかもはっきりしないままに、次のような言葉を発していた。それは、それまで一度もセラピストの頭に浮かんだことがなかった考えだった。

セラピストは、「あなたはずっとひとりぼっちだったのではありませんか？ あなたは本当に自分のことをわかってもらったと感じたことが、これまでなかったのではないのでしょうか？」とクライアントに話したのだった。これに対して、クライアントは、ひとしきり涙を流して泣き、しばらく沈黙した後、「ずっと私はひとりぼっちだったんです」と答えた。そして再び沈黙した後、自分は確かに一度も誰かに理解されたと感じたことがなかった、両親とのあいだでさえもそうであったと語り始めた。このセッションが終わる頃には、クライアントとセラピストがそれまでとはまったく異なる何かを始めたことが、二人には明らかに思われた。

このエピソードが生じるまで、クライアントとセラピストは狭い幅の経験の構成に閉じ込められているかのようであった。Sternはこの状況を振り返って、自分にとって受け入れがたい自分のあり方である「自分でないもの (not me)」(Sullivan, 1953b) を、クライアントもセラピストも互いに防衛的に解離し続けていたことから生じた行き詰まりとして

説明している。このエピソードにおいて、セラピストは不確かなままに、手探りで進みはじめ、クライアントの反応に導かれて、セラピストもクライアントも、身体感覚と気持ちの変化を伴って、結果的に思いがけない場所にたどり着いたのだった。この行き詰まり状況の打開の背景で生じていたのが、対人関係の場の変化であったと考えられる。しかし、この変化を生み出したものが何であるかを具体的に特定することは難しい。Stern 自身は、それをクライアントについてのセラピストの新しい認知が生じたこととして考察しているが、一方で、そうした新しい認知がなぜ他ならぬそのときに生じたのかを説明することは容易ではないし、ましてやどうすればセラピストがそのような新しい認知を獲得できるのか、そのための対人関係の場の変化をもたらすことができるのかを説明することは、それ以上に難しいだろう。

自我心理学や対象関係論をオリエンテーションとする伝統的な立場のセラピストであれば、別の観点から、Stern の介入こそが解釈に他ならないと考えるかもしれない。セラピストの感じていた皮相感や無力感はクライアントからの投影同一化の産物であり、それを転移—逆転移の布置の表れとして理解したうえで、それはクライアント自身の感覚でもあることを伝えられたことが、行き詰まり状況を解消させたのだという理解の仕方である。クライアントの経験の変容をめぐるこうした理解と実践の方法は、Bion (1962) の革新的な発想による功績が大きい。

そのような理解も十分に可能だと思われるが、Stern のヴィネットの要点は、なぜそれまで一度もセラピストに思い浮かばなかった理解が、そのときに初めて思い浮かんだのかという問いにあると思われる。Stern の考えでは、そのことこそが、その理解を可能にするようなクライアントとセラピストそれぞれの自分のあり方が、共に面接の場で防衛的に解離されていたことの徴候に他ならない。そのような意味で、Stern はそれを、新しい理解による経験の構成であると捉えていると考えられる。

Stern の介入を解釈と捉えるか構成と捉えるかの違いは、何を意味しているのだろうか。前者が意味するのは、それが、たとえ曖昧な形ではあっても、クライアントの心のあり方としてクライアント個人の中に解釈以前から存在していたということである。そこでは、解釈は、クライアントの心の中にあったものをセラピストの心の中に移し替え、それを変容させてクライアントの心に戻す働きとしてイメージできるだろう。後者が意味するのは、それがクライアント個人の心の中に以前には存在しておらず、新しい理解とともに初めて二人のあいだに生まれたということである。そこに生まれた新しい経験は、クライアント

だけのものではなく、クライアントとセラピストのものである。そこでは、経験は本質的に他者とのあいだに共有されるものである。ここには、心理療法においてクライアントとセラピストが何を成し遂げようとしているかについて、理念の大きな差異がある。伝統的な立場において解釈の技法が本質的とみなされていることに対しては、Benjamin (2017) は、セラピー関係の間主観的性質を重視する観点から、また Boston Change Process Study Group (2010) は、クライアントとセラピストのあいだに生じる無自覚的な相互交流と相互調整を重視する観点から、それぞれ批判的な見解を示している。

ここで、Stern のヴィネットを、経験の構成モデルを背景として、クライアントの語りを聞くセラピストのあり方という観点から、見直してみたい。私たちは、日常的に、物事を慣れ親しんだやり方で処理することに安心感を抱きがちである。面接においても、一般に、自分の経験についてのクライアントの語り方も、その語りについてのセラピストの聞き方や理解の仕方も、面接を重ねるにつれて、次第に、その面接の中で慣れ親しんだやり方へと収斂していきやすいだろう。それは一面では、クライアントの直面している問題の諸パターンが姿を現わすとともに、それをセラピストが把握して理解できるようになる過程として見ることができる。しかし同様に、他方では、面接における対人関係の場が、クライアントの語りとセラピストの聞き方を制約する結果、一定のやり方に収束してくるように見えるとも捉えられる。つまり、前者は、クライアントに内在するパターンが、反復される中で明確になってくるという理解であり、後者は、対人関係の場のあり方が、クライアントの経験とセラピストの理解を形作るやり方を規定して制約するという理解である。

対人関係の場はセラピストの聞き方を規定するが、それと同時に、セラピストの聞き方が、クライアントの語りとの相互作用を通じて、対人関係の場を生み出しているとも言えるだろう。このような観点から見ると、Stern のヴィネットでセラピストに新しい理解が生じたことは、セラピストの聞き方の変化と並行していたと考えることができる。

私たちはセラピストとして、クライアントの語りを、なるべく早い時期に的確に理解したいと望んでいたたり、理解しなければならぬという暗黙の圧力を感じていたたりすることが多いだろう。このことは、私たちには十分には自覚できない形で、クライアントとの相互作用に影響を及ぼし、クライアントの語りや経験を「見定める」という求心的な方向に私たちを導いていきやすいのではないだろうか。私たちは、セラピストとして一定の役割を果たすことと引き換えに、クライアントとの相互作用を一定の範囲内に制約することに不可避的に関与していくのだろう。それが、しばしば、時にはそれと気づかれることすら

なく、私たちを行き詰まりの状況へと導く。経験の潜在的に多様な可能性は解離され、別のあり方の可能性は見失われる。常にクライアントの語りを初めて出会うときのように聞くことは、実際に不可能であるし、それが望ましいとも限らない。しかし、面接が行き詰まるとき、私たちに必要なのは、いつのまにか慣れ親しんだ聞き方とは異なる、経験の構成の別の可能性を生み出す、新しい聞き方ではないだろうか。

クライアントの語りを聞くことが、クライアントの新しい経験を生む。しかし、やがて対人関係の場は柔軟性を失い、語りとその聞き方は硬直し始める。そして、その硬直はまた、セラピストの聞き方の変化がクライアントの新しい語りを生み出すことで乗り越えられていく。心理療法とは、そのような過程の繰り返しの中で、クライアントの経験が新しい可能性に開かれて豊かになっていくことによって、進んでいくものではないだろうか。経験の構成モデルが提示するそのようなパースペクティブにおいて、聞くことはセラピーの本質的な位置を占める。そこでは、セラピストの聞き方とは、方法 (to do) の問題であるよりも、あり方 (to be) の問題であると思われる。

第7節 残された課題

本章は、クライアントの語りを聞くという、セラピストにとって不可欠の営みの根底に、経験とその語りの関係に関する暗黙の捉え方の違いという認識論的問題があることを示し、それがクライアントの語りを聞くというセラピストの臨床実践を根底から規定していることを明らかにした。そして、精神分析的心理療法における一つのオルタナティブなオリエンテーションとして、Stern の立場を基盤とした経験の構成モデルを論じた。

クライアントの語りと経験との関係の捉え方の違いは、それに無自覚なままに実践を営んで済まされる問題ではないと、筆者には思われる。私たちにとって、自分自身が拠って立つスタンスを常に吟味し直すことは、セラピストとしての倫理的責務でもある。語りを記述として捉える見方は、実証主義と親和的であり、収束的に技法的手続きを共通化しやすい。それに対して、語りを構成として捉える見方は、個別性と多様性を重視するものである。その志向性は拡散的であり、一定の技法的手続きを示すことは原理的に難しい。このことは、例えば経験の構成モデルのような見方に基づいた臨床実践を進めるうえで、またそうした志向性の臨床実践を学ぶうえで、大きな困難を引き起こすことが予想される。

このことに関連して、Tublin (2011) は、セラピストが面接においてとる行動とその選択は、セラピスト個人のものであるばかりでなく、セラピストが属している広い意味での

セラピー文化において共有されている暗黙的な価値や理想にも導かれていることを指摘している。そのうえで、技法の問題を、あらかじめ示されていて正しくしたがるべき方法と手順の問題としてではなく、セラピストが目指す臨床的な意図に沿って、セラピストがとった行動や選択の適否が論じられるべき問題として捉える見方を提示している。

こうした Tublin の指摘を参考にしつつ、クライアントの語りに対するセラピストの聞き方が、どのようにセラピーを動かす、時に行き詰まらせるのか、そうした行き詰まりはどのように乗り越えられるのか、聞き方が新しくなるとはどういうことなのかといった問題について、引き続き考えて行く必要がある。そのためにも、面接における対人関係の場、あるいはその間主観的性質と、クライアントの、そしてセラピストの経験のあり方との関連について、臨床実践の中から理解を深めていくことが、今後の課題である。

第3部 心理療法の過程とその行き詰まり

—エナクトメント概念を中心に—

第8章 心理療法の過程の停滞や行き詰まり

心理療法の過程はいつも順調に進むわけではない。むしろ、停滞や行き詰まりはいつでも起こりうるし、実際に起きるものである。本章では、心理療法の停滞や行き詰まりに焦点を当てて検討を行う。クライアントとセラピストの間で、心理療法の停滞や行き詰まりはどのようにして生じるのか、それはどのようにして乗り越えられるのかといった問題について、概略的な見通しを得ることが本章の課題である。

第1節 クライアントの語りに変化が生じないとき

経験の構成モデルに立脚した観点からは、心理療法が順調に進めば、それまで未構成だった経験の構成が少しずつ進み、クライアントの語りは多少なりとも変化していくと捉えられる。しかし、心理療法の過程においては、クライアントの語りがかたくなに変化しない局面が生じる場合がある。クライアントの語りが変わらないとき、クライアントの経験のあり方も、その受け止め方も変わらないままであることが考えられる。そのような状況にあるとき、クライアントの体験の新たな構成は生じず、未構成の経験は潜在的な状態に置かれたままになる。これが、心理療法において生じる行き詰まりの一つの例であると考えられる。

クライアントの語りに変化が起きにくくなっているとき、また、そもそも語りの変化が生じにくいクライアントの場合、クライアントが経験する「事実」と「解釈」が隙間なく密着していて、その間のスペースがほとんどないことがしばしばある。つまり、クライアントが語ったことは、クライアントにとって、「事実」そのものである。そのようなクライアントの語りを、別の視点から、別のコンテクストの中で、検討することは許されない。極端な場合には、クライアントが語ることは、一言一句クライアントが語るまさにその通りなのであって、クライアントが使う表現以外の表現も許されなければ、クライアントが語っている内容以外のものはそこに一切含まれてはならない。そこでは、クライアントが語ることに関する、クライアントのものとは異なるセラピストの独自の理解は寄せつけられず、そもそもあってはならない。そのような場合、クライアントにすれば、「私が語っていることが事実なのです！ それ以上でも、それ以下でもありません！」ということになるだろう。

経験の構成モデルの見方においては、語ることは、本来的に、形も意味もまだ定まって

いない事態を、経験として形作り、自覚的な意味の世界に引き入れることであった。しかし、そのような見方をするためには、一つの語りは、可能な経験のあり方の一つに過ぎないこと、無数にある語りのどれが「正しい」語りなのかを問うことは無意味であることが、クライアントに（そしてセラピストにも）受け入れられていなければならない。つまり、自分が語る経験には、常に別のあり方、別の語られ方があり得るということが、理解され、受け入れられていなければならない。

経験の構成モデルでは、クライアントの語りを、そして経験の構成のあり方を規定するのは、対人関係の場であった。そうした観点からは、クライアントの語りが増えない、新しい経験の構成が生じないということは、対人関係の場がそのような変化の可能性を制約しているのだと考えられる。とりわけ、そうした対人関係の場の制約が強く働く場合、クライアントはその対人関係の場の性質におびやかされて、新しい経験の構成に必要な好奇心を維持するだけの安心感を抱くことができず、経験の構成の新しい可能性が損なわれるのだと考えられる。こうした捉え方は、心理療法の過程の停滞を、クライアントのパーソナリティに由来する「抵抗」と捉える立場とは一線を画していることに注意が必要である⁴⁴。心理療法の過程の停滞についての捉え方の基礎には、心理療法の作用に関する考え方が異なる。心理療法の過程の停滞についての捉え方の違いが、心理療法の作用に関する考え方のどのような違いに由来するのかについては、次章以降で検討する。

第3章において検討したように、対人関係の場の制約が強く働き、経験の構成の自由が大きく損なわれている場合、そこでは解離が生じていると考えられる。解離が生じている状況では、一般に、経験の新しい構成や統合が困難になっている。なぜなら、経験の新しい構成や統合のためには、現状とは別の新しいコンテキストや新しい要素との結びつきが不可欠であるが、それこそが、解離が生じている状況においては生じないからである。

Stern (1997) によれば、解離は、弱い解離と強い解離の大きく2種類に分けて考えることができる。弱い解離は、防衛的性格の少ない状態であり、その状態を脱することが比較的容易である。例えば、セラピストの方が、クライアントがまだ考えたことがない経験の可能性に気づき、それに目を向けて、クライアントと話し合うことで、自発的には困難だったその気づきを、クライアントは自分自身の経験として受け入れることが、それほど困難を伴わずにできるような場合である。例えば、ある仕事の約束を「なぜか、うっか

⁴⁴ 抵抗についての伝統的な捉え方と経験の構成モデルのとらえ方との違いについては、第5章において別の観点からも触れている。

りと」忘れてしまい、相手に迷惑をかけてしまったと語るクライアントに、セラピストが、もともとその約束には気が進まなかった可能性があるのではないかと応じたところ、クライアントが確かに自分にはそういう気持ちもあったと気づく、といった場合が考えられる。このように、弱い解離は、特別にそれを避ける理由があるわけではないが、経験の構成の可能性の幅が狭くなっており、自発的に他の可能性を考えることが難しくなっている状態であると理解される。

もう一方の強い解離は、防衛的な性格の強い状態であり、その状態を脱することには大きな困難を伴う。強い解離は、経験の構成の他の可能性を考えないという消極的な意味ばかりでなく、潜在的に自分を脅かす経験の構成の可能性を積極的に回避するという意味合いを強く含んでいる。このような強い解離が面接関係において現出してくるとき、そこで生じる事態を、Stern (2010) はエナクトメント (enactment) として理解するのである。

このように、経験の構成モデルにおいては、面接が停滞したり行き詰まったりしている状況を、クライアントに、あるいはクライアントとセラピストの双方に、解離が生じている状態として捉えることができる。

第2節 停滞や行き詰まりとしてのエナクトメント

エナクトメントという言葉は、一般に何かが実際に行動に移されていることを意味する言葉である。したがって、日本語に訳される場合には、文脈によっては、「実演」と訳されるとぴったりする。Stern のエナクトメント概念についての詳細な検討は、次章以降で行うこととして、本章では、Stern の考えるエナクトメントの概略的なイメージを、筆者なりの見解も織り込みながら見ていく。

まずは、心理療法の過程を離れて、一般的な状況を考えてみたい。これまでも見てきたように、経験の構成モデルの観点からすれば、私たちは、自分の体験の一部しか自覚的な経験として構成していないと考えられる。私たちの体験の大部分は、無自覚なままにとどまっている。面接におけるクライアントの語りは、体験のそうした無自覚な部分を、言葉によって自覚的なものとして構成していく過程であった。しかし、どこまで自発的に語りが進んでも、自分の経験にならない体験が残ると思われる。どんなに注意深く内省しても、自分の何気ない仕草や振る舞いのすべてを自覚することはできないだろう。自分の「癖」が行動に現れているのを、自分だけが知らないという経験は、多くの人にあるのではないだろうか。このとき、他者の目には明らかに観察可能な言動であるにもかかわらず、その

当人には経験されていないという事態が生じていることになる。それが、筆者の考えでは、言葉の最も広い意味でのエナクトメントであると言える(ただし、次章で検討するように、Stern の用語法としてのエナクトメントはもっと限定的な意味である)。このように考えてみれば、エナクトメントには、比較的容易に自覚的な経験になりうるものから、経験となることが非常に困難なものまで、幅広いスペクトラムが想定可能であると思われる。

経験として構成することが困難な体験は、当人にとってどのようなものであるのだろうか。それは当人自身にとって、端的に存在しない、つまりまったく感知されないか、何となくもやもやとしたものとして感じられるか、感知はされても自分自身のものではないと感じられるか、こうした体験であると考えられる。

言葉の広い意味においてエナクトメントとして捉えられる状況においては、私たちは、自分の振る舞いやあり方の一部に気づいていないか、ある出来事に関する自分の理解にとらわれている、つまり経験の構成の特定のやり方に固執して他の可能性を考えられない。こうしたことが、心理療法の停滞や行き詰まりにおいて生じている可能性が考えられる。そのように考えるとすれば、心理療法を進めていくうえでは、しばしば生じてくるエナクトメントの状況を、一つ一つ解消していくことが課題となると言えるであろう。

こうしたエナクトメントの解消が比較的容易であるのは、自分にとっては未知の、自分の経験の可能性についての他者による言及が、自分に対する肯定的関心に基づいていると感じられ、自分自身を過度に脅かさないと感じられる場合である。例えば、「疲れているようだね」という他者からの声かけは、それが自分に対する気遣いに発したものと感じられ、そのときの自分の感覚にしっかりと感じられれば、自分の経験の構成に利用できる。つまり、声をかけられる前には疲れを自覚していなかったとしても、「ああ、言われてみれば、確かに自分は疲れているようだ」と感じるができる。

反対に、エナクトメントの解消が、すなわち自分の言動を経験として構成することや、他の構成の可能性について考えることが困難であるのは、次のような場合であると思われる。それは、他者による自分の経験の可能性についての言及が、自分のあり方や思いや意図を責めるものであるように感じられるときである。例えば、先ほどと同様の「疲れているようだね」という他者からの声かけが、自分の挨拶の無愛想さをとがめるコメントであるように聞こえる場合などである。そのような場合には、他者からの声かけをそのまま受け止めることができず、自分の振る舞いやあり方について、それまでは持っていない新しい気づきを得る機会として生かすことができない。このように、エナクトメントの解消の

難易度を左右するのは、そのとき当人が感じている安心感や安全感である。それはつまり、そのときの対人関係の場の性質である。

このような状況は、心理療法の面接場面でも容易に起こりうるものである。セラピストの応答や介入が、クライアントの経験の可能性を探究する比較的純粋な好奇心に基づいているというよりも、クライアントに対する批判や非難を明示的あるいは暗黙的に含むような場合である⁴⁵。そして、心理療法場面において、エナクトメントの解消を極度に難しくするのが、エナクトメントがクライアントにもセラピストにも生じている場合である。この事態を Stern は相互エナクトメントと呼ぶ。それは例えば、クライアントとセラピストが互いに、相手の自己本位的な部分や敵意的な部分に注意を向けるばかりで、自分自身にもあるそうした部分が相手のそうした行動を引き出している可能性をまったく考慮できない場合である。このような状況では、しばしば、互いに「正しいのは自分で、相手が間違っている」と主観的には感じられているものである。

しかし、エナクトメントを解消するうえで、実はそれ以上に難しいのは、そもそもエナクトメントが生じていることに気づくことであると思われる。なぜなら、エナクトメントは、言わば「表れない現れ」だからである。つまり、それはそもそも無意味なノイズとして無視されやすいのである。どういうことなのか、説明を試みたい。

第1節の終わりで少し述べたように、エナクトメントが生じている状況は解離が生じている状況でもある。解離が生じている状況では、経験の新しい構成は生じにくい。そして、解離が生じているときに自覚されていないものは、未構成の状態にある。未構成の経験は、当人自身の自覚にはなくても、当人の言動やあり方として、他者にとっては観察可能なものとして現れることがある。それがエナクトメントである。

さて、未構成の経験は、特にそれが防衛的に強く解離されている場合には、当人自身に自覚されないばかりでなく、その現れを観察することができる立場にいる他者にとっても、はっきりとつかまえることが難しいと考えられる。抑圧された経験であれば、それはすでに特定の意味づけを受けており、他の経験とも意味連関の中でつながりを持っているので、当人は自覚していなくても、それを観察できる立場にいる他者にとっては、それが何であるかを見て取りやすい。なぜなら、そこに現れているものには、意味が表れているからで

45 ここで注意したいのは、クライアントが「セラピストから批判されていると感じる」という場合、伝統的な転移論の文脈で、例えばそれをクライアントに固有の内的経験と捉えるか、後に検討する Stern のエナクトメント論の文脈で、クライアントとセラピストの間に「実際に生じている」事態と捉えるかによって、セラピストの応答のあり方やセラピーのあり方そのものが違ってくることである。このことについては、改めて第10章で検討する。

ある。それは言わば、「表れる現れ」である。他方で、解離された経験の方は、それが現れているとしても、それ自体がはっきりとした意味をまだもたないので、それが何であるか観察者にとってもよくわからない場合がある。そこに現れているものに、意味が表れていないのである。それは言わば、「表れない現れ」である。そうして、そもそもはっきりしないものは、よほど注意深くそれを探していない限りは、見逃されやすいし、たとえ注意深く探そうと努めていても、そもそも自分が何を探しているかはっきりわからなければ、やはりそれに気づくことは難しい⁴⁶。

比喩を用いて説明を試みたい。街中のざわめきに耳を傾けているときに、かすかな声でも、人の声とわかる音声で自分に理解できる言葉が発せられていれば、私たちはそれに気づくチャンスがある。しかし、音としてはある程度の大きさがあっても、声として認識されず言葉としても分節されないような音が聞こえても、たとえそれが物理的には音として聞こえ続けていたとしても、私たちはそれに気づくことがとても難しいだろう。このように、エナクトメントして現れているものは、そもそも「図」になりにくく、「地」の中に埋もれているので、そもそもそこに何かがあると捉えることが難しいのである。

第3節 エナクトメントが生じているとはどういう事態なのか

心理療法の停滞や行き詰まりは、気がついたときにはいつのまにか解消している場合も少なくないと思われる⁴⁷。しかし、停滞や行き詰まりが執拗に続く場合、そしてそれがエナクトメントの生じている状況として捉えられる場合、そのエナクトメントを解消しなければ、心理療法の過程は前に進まない。エナクトメントを解消し、乗り越えるためには、まずクライアントかセラピストかのいずれかが、エナクトメントが起きていることに気づかねばならない。その困難さは、前節の終わりに述べた通りである。それでは、私たちはエナクトメントにどのように気づき、それをどう乗り越えていくのだろうか。

エナクトメントは、Stern の定式化にしたがえば、解離された自己のあり方を相手のあり方として経験することとして捉えることができる (Stern, 2010)。それは筆者の視点から記述し直せば、相手と自分との間に生じている事態のうち、自分の主体性に帰属するものとして経験することが困難な体験を、相手の主体性に帰属するものとして構成すること

⁴⁶ Stern (2010) は、プラトンの対話編で知られるソクラテスとメノンの対話を参照して、この問題を提起している。

⁴⁷ あるいはむしろ、停滞や行き詰まりが生じていたことすら気づかれることなく、それらが自然に解消している場合も少なくないだろう。

である。例えば、二人の間に怒りがあるのが感じられるが、怒っているのは自分ではなく、相手の方だという経験の仕方である。「怒る」という自分のあり方が自分を脅かすと潜在的に感じられていると、そうした経験の構成が困難になるというわけである。しかし、この状況には、実はさまざまな難問が含まれているように思われる。

第一に、私たちはそもそも自分の感情状態をどの程度適切に経験として構成できるのかという問題がある。例えば、私は自分が悲しい気持ちであることをはっきりと自覚しているとす。しかし、相手には私が悲しんでいるようにはまったく見えないとしよう。このとき、「悲しんでいる」という私の自覚と、「悲しんでいるようには見えない」という相手の見方のどちらが正しいのだろうか。

私たちの日常的な実感としては、私の自覚が正しくて、相手の見方が誤っていると簡単に言えそうである。つまり、自分がどのような感情状態にあるかについては、自分が、そして自分のみが、特権的にアクセスできると、ほとんどの人が考えるであろう。しかし、私たちはしばしば日常的に、相手の感情を的確に読み取っているのではないだろうか。先ほどの、二人の間での怒りの感情の帰属をめぐる例について考えてみたい。

例えば、私は自分が怒っていないことをはっきりと自覚しているとす。そうして、怒っているのは相手の方に違いない、確かにそうだと感じるとす。そのとき、相手が「自分は怒っていない」と言ったらどういうことになるだろうか。自分の感情状態にアクセスできるのはその人自身のみであるという素朴な立場を守るなら、私たちは相手の言葉にうなずくしかない。この場の空気に「怒り」がみなぎっていることは、ありありと感じられる。しかし、自分が怒っているのでも、相手が怒っているのでもないとしたら、いったい怒っているのは「誰」なのか。

また、私が相手の言い分に納得できない場合はどうなるだろうか。そんなはずはない、相手は嘘をついている、あるいは不誠実だと、私は相手を責める気持ちを抱くかもしれない。しかし、そうなると、先ほど見た「自分の感情状態への特権的アクセス」のルールに抵触することになってしまう。つまり、相手の感情状態について、相手の言い分が誤りであり、私の言い分の方が正しいと主張できる根拠が、私にあるだろうか。

Stern の定式化を、解離された感情を実在するものとして実体的に理解しようとする、次のような事態が生じているように見えるかもしれない。「怒っている自分」という自分のあり方が解離されて、「本来自分のものであるはずの怒っているという経験」が、相手が経験していることとして捉えられるのだと。しかし、このような理解の仕方が解決困難な問

題を抱え込むことになるのは、今見た通りである。そうであるなら、私たちには別の見方が必要になる⁴⁸。

それでは、クライアントの経験に焦点を当てて考えてみよう。クライアントには何が経験されているのだろうか。クライアントが経験しているのは、端的に「セラピストが怒っている」様子である。これを、例えば、「自分は怒っていない」というセラピストの経験（そして発言）とつきあわせるところから解決の難しい問題が生まれる。というのも、このような場合、つい私たちは、「どちらの言っていることが正しいのだろうか」という思考の筋道に誘い込まれやすいからである。しかし、それはけっして唯一の筋道ではない。「どちらの言っていることも正しい」という思考の筋道もあるのではないだろうか。

「セラピストは怒っている」というクライアントの経験は、それ自体は正しいとも誤りとも言えない。心理療法において本当に重要なコミュニケーションの過程は、これに対する「私は怒っていない」というセラピストの経験とともに始まると考えることができる。二人の経験、そしてそれぞれの経験に基づいた二人の発言の見かけ上の齟齬は、どのように生じているのだろうか。そこからクライアントとセラピストの二人は何を学ぶことができるのだろうか。

ここで視点を切り替えて、セラピストからクライアントを見たときに、クライアントの方こそが怒っているように見えるとする（このような状況はよく生じる）。このとき、セラピストは自分が経験している状況について、どのように考えるだろうか。

精神分析の伝統的な理解の仕方を単純化して示せば、次のようになるかもしれない。クライアントは「本当は」怒っているのだが、自分が怒っているということを認めることができずに、「自分の怒り」をセラピストに投影しているのだ、と。なぜなら、自分（セラピスト）が怒りを感じていないことは自分自身には明らかなのだから。このような理解の仕方の前提となっているのは、怒りの感情は、クライアントが認めようが認めまいが、そこにすでにあるという考え方である。この同じ状況を経験の構成モデルに立脚するセラピストなら、どう考えるだろうか。

経験の構成モデルに立脚するセラピストなら、自分にはクライアントが怒っているように見えるが、クライアント自身は自分の内的状態について、（未構成という意味で）まだ気づいていないのだろうと考えるかもしれない。クライアントは「自分が怒っている」とは

⁴⁸ このような説明は、伝統的な立場になじみのある人たちには、「投影」や「投影同一化」の概念を思い起こさせることだろう。この点については、第10章で検討している。

経験していないようだが、セラピストについては「怒っている」と経験している。クライアントにそう見えるのなら、自分（セラピスト）自身では（未構成という意味で）まだ気づいていない、怒りの感情が自分にはあるのだろうかと考えてみるかもしれない。つまり、このモデルにしたがうセラピストにとって、自分（セラピスト）に関するクライアントの発言は、自分（セラピスト）の内的状態を正しく言い当てているかどうかによって評価されるのではなく、自分（セラピスト）にとって未構成の経験を構成する可能性を開く手がかりとして評価されると考えられる。そして、このようなセラピストの姿勢は、クライアントに対しても差し向けられることになる。つまり、セラピストがクライアントに対して行うコメントへのクライアントの反応は、そのコメントを受け入れるか受け入れないかという観点からではなく、そのコメントに関心を示し、自分（クライアント）の経験の可能性を広げる可能性を考える手がかりにするか否かという観点から評価されることになる。

このように考えたときに明らかになるのは、Stern の定式化は、事後的に成立する事態についての説明として理解されるべきだということである。たとえ、説明としてはそう聞こえるとしても、解離された自分のあり方は、エナクトメントが始まる出発点ではない。つまり、ことの始まりの時点においては、解離された自分のあり方は基本的に未構成の状態にある。それは、私たちが日常的に使う言葉の意味では、まだ存在していない。解離された自分のあり方は、それまで未構成だったものが構成されてはじめて明確な姿を現し、言葉の一般的な意味で存在するようになる。つまりそれは、エナクトメントが解消してはじめて出会える到達点なのである。つまり、エナクトメントが解消するとは、解離されて意識から遠ざけられていた実在について意識することではなく、解消された後に事後的に成立する意味を意識するということだということである。別の言い方をすれば、エナクトメントがあって、それが解消されるのではなく、エナクトメントが解消されて初めて、それがエナクトメントだったのだと、事後的に理解されるということである。

本章では、心理療法の過程の停滞や行き詰まりを、エナクトメントという観点から捉える観点を導入した。解離の働きを基本とした Stern のエナクトメントに関する理解を基礎づけているのは、精神分析における伝統的な理解のあり方とは異なる理解のあり方であると、筆者には思われる。次章においては、この問題を取り上げて検討する。

第9章 関係精神分析におけるエナクトメント概念⁴⁹

—Stern, D. B.のエナクトメント論を中心に—

本章では、前章で導入し、その概略を示した Stern のエナクトメント概念について、改めて検討を行う。まずは精神分析の分野におけるエナクトメント概念の歴史と位置づけを振り返ることから始めて、伝統的な立場が重視してきた転移・逆転移の概念とどのように違うのかについても適宜述べていくことで、Stern のエナクトメント概念を通じて得られる展望を検討する。さらに、そのような検討を通じて、伝統的な立場と経験の構成モデルの立場との違いについての筆者の見解を示す。

第1節 エナクトメントの基本概念

近年、精神分析および精神分析的な心理療法の領域において、エナクトメントという術語が、文献や討論の中で使用される頻度が高くなって来ているように思われる。精神分析臨床において、エナクトメントは対象関係と対人関係の接点であると言われる (Gabbard, 1995; 岡野, 2003)。しかし、英国の現代クライン派や対象関係学派と北米の関係精神分析学派⁵⁰とでは、それぞれの歴史的な発展の違いを背景として、エナクトメントについての議論と考え方には、多くの共通点とともに違いも認められる (Bonovitz, 2007; Brown & Lane, 2000; Gabbard, 1995)。

また、エナクトメントの術語としての用法の拡大に伴って、この術語が本来持っている意味が曖昧になると、その概念としての有用性が損なわれてしまいかねない。本章では、そのような問題意識から、近年わが国においても注目を集めつつある北米の関係精神分析学派の考え方に軸足を置きながら、エナクトメント概念の意義を検討する。その流れの中で、Stern のエナクトメント概念を取り上げて、その特徴と臨床的可能性を論じる。そのうえで、エナクトメントをめぐる議論の論点の整理を試みる。

エナクトメント (enactment) は、動詞 enact を名詞化した言葉である。もとになっている動詞 enact の辞書的な意味は、①a. 法律を制定する、(受身の形で) 法律で～と規定されている、b. 提案などを実行に移す、(受身の形で) 出来事などがくり返し生じる、②

⁴⁹ 本章は、小松 (2014) に加筆修正を施したものである。

⁵⁰ 関係精神分析学派には、精神分析に属するさまざまな学派とオリエンテーションが含まれるが、本章で関係精神分析学派として主として論じるのは、対人関係精神分析の流れを汲む関係精神分析学派の考えである。

劇などを上演する、役を演じる、といったものである（小西・南出, 2001）。日本語の訳語としては、「実演」「再演」といった言葉があてられることもあったが、近年ではカタカナ表記のまま使われることが多くなっているようである。

エナクトメントは、精神分析以外の領域でも術語として使われている。家族療法においては、家族間のコミュニケーションを実際にセラピストの前で演じてもらう技法の名称として、エナクトメントという術語が用いられている（Minuchin, 1974）。

精神分析の領域においてエナクトメントが術語として自覚的に用いられるようになったのは、Jacobs（1986）が最初だとされる（McLaughlin, 1991）。Jacobs は、標準的な分析技法に沿ったセラピストの介入や態度として現れる逆転移に注目し、逆転移のうちでも、セラピスト自身に一層気づかれにくく、微妙な表れ方をするものをエナクトメントと呼んだ。

ただし、エナクトメントという言葉そのものは、それ以前から精神分析の文献の中で使われてきた（McLaughlin, 1991; 大矢, 2009）。術語として自覚的に使われる以前と以後を通じて共通しているのは、エナクトメントには、クライアントまたはセラピストの無意識的な内的過程が、外部から観察可能な行動に表れているという意味が含まれていることである。

無意識的な内的過程が行動に表れるという点では、エナクトメントの概念と行動化の概念との異同を問題にすることができる。行動化は、Freud（1914）においては、精神分析治療の場面で患者が記憶を想起する代わりに行為として反復する現象を指して用いられた。そこでは行動化は、精神分析治療に対する抵抗の表れの一つと見なされていた。その後、この術語の用法は拡張され、心理療法場面で起きるかそれ以外の場面で起きるかを問わず、心理療法にとって好ましくない、言葉にされて語られることなく実行される衝動的な行動全般を指すようになっていった（Sandler ら, 1992）。

これに対してエナクトメントは、転移および逆転移がクライアントおよびセラピストの振る舞いとして面接関係に表れたものを意味する術語として用いられることが多い。その際に、クライアントとセラピストの間の対人過程に注目する点が、行動化との違いと見ることができる。つまり、エナクトメントには、無意識的なものの単なる行動への表れではなく、それを通じて他者に対して何らかの影響を及ぼす過程という意味が含まれている。

また、エナクトメントは投影同一化の概念との関連で論じられることも多い。例えば、Gabbard（1995）は、エナクトメントと投影同一化の考え方には相違点はあるものの基本

的に共通する部分が多く、エナクトメントの概念は立場の異なる諸学派の間に議論のための共通基盤を提供していると指摘した。また Brown と Lane (2000) は、投影同一化が防衛の一つのタイプを指す術語であり (Klein, 1946)、主体が自己の望ましくない部分を対象へと排出する過程をその本質とするのに対して、エナクトメントの本質は空想された他者との関係ないし相互交流を現実化することであり (Chused, 1991)、それは防衛的過程ではなく、対人間の接触を確立する企てであると指摘している。

本章においてはひとまず、エナクトメントを「クライアントの転移、セラピストの逆転移、そしてクライアントとセラピストの間の無意識的な相互交流が、心理療法の場におけるそれぞれの振る舞いや二人の間の関わり合いとして現れること」と、やや緩やかに定義して以下の検討を進めたい。

エナクトメント概念には、その術語としての導入以来、一定の共通基盤に立脚しながらも、論者によりさまざまな意味で用いられてきたという経緯がある。以下に、術語としての用法の拡大とともに明確にもなってきた、それを使う論者によるエナクトメントについての見解の相違の具体例を取り上げる。

第2節 エナクトメントをめぐる見解の相違

現代クライン派の Steiner (2006a, 2006b) と、対人関係論を源流とする関係精神分析学派に属する Levenson (2006) との間で交わされた誌上討論は、双方の学派間の見解の違いを浮き彫りにする好例として取り上げられる (Ivey, 2008; 大矢, 2009)。

Steiner (2006a) は、エナクトメントは基本的にクライアントにとってもセラピストにとっても心理療法の過程を損なう有害なものであるという立場を取る。Steiner の考えでは、エナクトメントが生じることを避けることはできないとしても、その有害性を抑えて心理療法に活用するためには、セラピストはエナクトメントを慎重にモニターしなければならない。そして、行動に現すのではなく、エナクトメントは考えられて言葉に置き換えられなければならない。そして Steiner は、逆転移概念と同様に、エナクトメント概念もまた、有用性が過大評価されて濫用される恐れがあると指摘した。

行動として現れているエナクトメントを、思考することおよび言葉にすることに置き換えていくことを重視する Steiner に対し、Levenson (2006) は、そのような区別が無効であり、セラピストがクライアントに言葉で語りかけることの中には、常に必然的にエナクトメントが伴うことを指摘した。そして、Steiner は対人関係ではなく、その根源にあると

想定するクライアントの内的な空想を重視し、それを心理療法において扱おうとしているのに対して、Levenson は、エナクトメントがクライアントの対人関係世界を認識するための絶好の機会であることを指摘した。

このような Levenson の指摘に対して、Steiner (2006b) は、エナクトメントを容認するだけでなく望ましいとさえ考えることこそが、最も厄介なエナクトメントであると指摘した。そして、あくまでエナクトメントと言葉で語ることは区別すべきであり、エナクトメントは、言葉で語ることに含まれない、主体から分裂排除されて投影されたものを表していると指摘した。

この討論に対して、大矢 (2009) は議論の噛み合わなさを指摘しており、それは両者の拠って立つ理論的背景の違いに由来するものだと考えられる。そうした理論的背景の違いは、後で触れるように、エナクトメントに対する理解のあり方の違いにとどまらず、何を心理療法の目標と考えるかについての違いや、具体的にどのような技法で心理療法に取り組むかの違いをも生み出していると考えられる。そこで次に、学派間の理論的背景の違いに触れた比較エナクトメント論とも言うべき文献を二つ取り上げる。

Brown と Lane (2000) は、古典派（現代フロイト派あるいは現代自我心理学派）と関係精神分析学派の見解の相違を、包括的な文献レビューを通じて論じている。

Brown と Lane によれば、古典派の中では次の三つの観点が共有されている。①エナクトメントは無意識的な対人間のプロセスであり、それは言葉ではコミュニケーションすることができないクライアントの精神内界を明らかにする。②逆転移の現れとしてのエナクトメントには分析の場で起きている相互交流が反映している場合がある。③エナクトメントは遠い過去の病的パターン再現であり、患者の過去の再構成に役立つ場合がある。このように共有された観点がある一方で、④エナクトメントはクライアント一人が生み出しているのか、クライアントとセラピストが共に生み出しているのか、⑤エナクトメントは有用なのか、避けるべきなのか、という2点に関しては意見が分かれることを指摘した。

Brown と Lane によれば、関係精神分析学派においては、エナクトメントは、他の方法ではコミュニケーションできない、解離されたあるいはまだ象徴化されていない経験、記憶、情動、自己状態、対象関係、空想、葛藤、ニードといったものを、無意識的な情動を通じて伝える過程であると理解されている。関係精神分析学派にとって、解離されたものはエナクトメントを通じてしか現れ出ることができないのであり、エナクトメントは解離された無意識にアクセスする不可欠の手段である。上に述べた④については共同で生み出して

おり、⑤については有用であると考えるのが、関係精神分析学派に共通した立場である。

Brown と Lane は結論として、古典派と関係精神分析学派のエナクトメントに対する考え方の違いは、その背景となる哲学の違いに由来するものとして、二つの学派の間で互いに異なる、次の4つの観点を挙げている。①古典派の心理学が精神内界的、一者的で、生物学に基礎づけられているのに対して、関係精神分析学派の心理学は対人关系的、二者的で、環境からの影響を重視する。②古典派がかつて意識されていた経験を抑圧することを主要な防衛機制と見なすのに対して、関係精神分析学派は経験がはじめから意識から締め出されている解離を主要な防衛機制と見なしている。③古典派が無意識を、抑圧されたり追い出されたりした衝動、葛藤、願望、情動の貯蔵場所であると見なすのに対して、関係精神分析学派はそれに加えて、外傷的であるために意識に入ることを許されなかった自分や他者についての経験をも無意識に含めて考える。④古典派が治癒を解釈と情動的に経験された洞察を通じて無意識が意識化されることと考えるのに対して、関係精神分析学派は治癒を自己の感覚が拡張されてそれまで解離されていた諸側面を自己に含むようになることと他者と健康な関係を持つ自己を経験できるようになることと考えている。

現代クライン派と関係精神分析学派におけるエナクトメント概念の相違を論じているのは Bonovitz (2007) である。Bonovitz の理解では、現代クライン派にとってのエナクトメント概念は、クライアントとセラピストとの間の今ここでの転移—逆転移と投影同一化の相互作用を記述する方法の一つであり、エナクトメントは、クライアントからセラピストへ向けられる一方向的な過程と見なされる。それは避けがたく生じてくるが、エナクトメントには心理療法に対する何らかの抵抗が含まれており、何よりもセラピストがセラピストとして機能することを妨げる。現代クライン派にとって、エナクトメントは、投影同一化によりセラピストが負わされる対象の性質を通じて、クライアントの内的対象関係を認識する手段の一つである。

これに対して関係精神分析学派の考えでは、エナクトメントは無意識的な空想ばかりでなく、外界で生じている現実の出来事にも由来しているとする。関係精神分析学派は、内的対象関係の起源は他者との相互交流の場にあると理解している。したがってクライン派に比べて、セラピスト自身の関わりを持ち方とセラピスト個人の心理の影響を重視する。関係精神分析学派は、エナクトメントにおいてセラピストが負う役割を、クライアントの内的世界から外界へ投影された対象の単なる複写ではなく、セラピストのパーソナリティからも内的対象関係からも影響を受けて形成されたものと見なす。そこでは、エナクトメ

ントはクライアントとセラピストの間の双方向的な過程であることが強調される。

ただし Bonovitz は、こうした強調点の相違はあるものの、エナクトメントに対する両者の考え方は実際には非常によく似ていることも指摘している。例えば、Bonovitz はクライン派から Feldman (1997) の臨床ヴィネットを、関係精神分析学派から Mitchell (1993) の臨床ヴィネットをそれぞれ取り上げて比較検討を行い、Feldman もクライアントのエナクトメントに対するセラピスト自身の内的対象関係の反応を論じているし、Mitchell もエナクトメントに反映しているクライアントの内的対象関係を論じていることを指摘している。

そのように指摘した上で Bonovitz が注目するのは技法上の違いである。Feldman がセラピストの内的対象関係のテーマを解釈に直接的には反映させないのに対して、Mitchell はクライアントがセラピストの振る舞いの意図をどのように考えるのかを、クライアントとオープンに話し合おうとする。関係精神分析学派は心理療法関係の共同構築性を強調して、エナクトメントへのセラピスト自身も気づいていない関与のあり方を心理療法の主題の一部として取り上げる。これに対してクライン派は、クライアントがセラピストをどのように体験し、対象としてのセラピストにどのように関わるかを心理療法の主題とするのであり、セラピストの主観性のあり方は直接には心理療法の主題とはならない。

Bonovitz の指摘が適切であれば、エナクトメントの理解の仕方に共通点の多い両者の間にそれにもかかわらず違いがあるとすれば、それは単なる技法の違いではなく、何が心理療法の主題であり、何が心理療法の目標であるかの考え方の違いにあると思われる。そのような違いを明瞭に提示している論者の一人として、以下に Stern のエナクトメント論を検討する。

第3節 Stern のエナクトメント論

はじめに、Stern (2010) が提示しているエナクトメントをめぐる5つの命題を以下に要約する。

- ①エナクトされた経験および解離された諸状態は象徴化されえない。したがってエナクトメント以外の形では顕在化しない。エナクトされた経験は未構成の経験である。
- ②解離された諸状態は象徴化されていないので、私たちが自分の一部と見なす心の諸状態と葛藤的な関係になることもなければ、意識的に認識できる形で心の中に存在することもない。

③エナクトメントは解離の対人関係化である。一人の心の内部で経験されえない葛藤が二人の心の中で、あるいは二人の心を行き交って経験される。クライアントが解離した状態はセラピストが経験し、クライアントが経験する状態はセラピストの心の中で解離されている。したがって、二人とも何が起きているかについて部分的な認識しか持てない。

④エナクトメントは内的葛藤の現れではない。エナクトメントの中にいる二人の間の外的な葛藤は強力であったとしても、エナクトメントは内的葛藤の欠如の産物である。

⑤エナクトメントは、内的葛藤が生まれたときに終息する。それは、エナクトメントの中で二人がそれぞれ別々に経験している二つの解離された状態の両方が、二人のうちのだらかの意識の中で構成可能になり、葛藤として経験可能になったときである。

上に要約した諸命題が Stern の基本的な見解であるが、これらを読み解くには、その前提となる Stern の考え方についての理解が必要になる。なお、Stern の考え方の全体像とそのユニークさについて知るうえでは、Holms (2011) による簡潔かつ的確なレビューが役に立つ。

Stern は、社会構成主義の考え方と Gadamer の哲学的解釈学とを背景に、経験の意味は対話を通じて構成され、生まれるものであるという立場を基本としている。個人にとっての経験は、個人の主観を離れた客観的な意味をもたず、個人が対話を通じてそれを意味づけることで初めて意味をもつと考える。そのようにして意味づけられる前の、まだどのような意味が形作られるか定まっていない、可能性にとどまっている経験を、Stern は未構成の経験と呼ぶ。それはまだ象徴化されていない経験であり、自分自身の経験の一部ではあっても、まだ意識化されたことがない経験である (命題①に関連する論点)。Stern 自身も述べているように、未構成の経験は、まだ象徴化されておらず意識化されていないという点で、Bion (1962) のベータ要素 (beta elements)、Bollas (1987) の未思考の知 (unthought known)、Fonagy ら (2002) のメンタライズされていない経験 (unmentalised experiences) などと部分的に重なる概念だと考えられる (Stern, 2010)。

Stern は、解離を弱い解離と強い解離に区別して論じている。弱い解離は、防衛的意味合いのほとんどない、まだそれについてはっきりと考えたことがないために経験が未構成のままにとどまっている状態である。これに対して強い解離は、防衛的な意味合いの強い、「自分 (me)」と「自分でないもの (not-me)」(Sullivan, 1953b) との解離であり、「自分でないもの」は、「自分」の統合を脅かす恐ろしくて危険なものであって、そもそも自分という意識に属するものとはみなされていない (命題②に関連する論点)。このように、解離

を複数の自己 (selves) あるいは自己状態 (self-states) の関係として理解する視点は、関係精神分析学派の多くの論者たちに共有されている (例えば、Bromberg, 1998)。

Stern の考えるエナクトメントは、心理療法の場にいる二人の当事者の一方が解離している未構成の経験 (弱い解離)、あるいは自己状態 (強い解離) が、二人の間の交流を通じてもう一方の当事者に影響を及ぼし、その結果、相手に属するものとして経験され、相手もまたそれを自分のものとして経験している事態である (命題③に関連する論点)。それはとりわけ、「自分でないもの」の解離を維持するために、相互交流の多様な潜在的な意味の可能性のうち、ある特定の硬直した見方に基づいて相手に接するという形で実現される。ただし、解離されたものがすべてエナクトメントとして現れるとは限らない。解離されたものの一部は、明瞭に顕在化することなく、無意識的であり続けると考えられる。エナクトメントと投影同一化との関連について、Stern は投影同一化を一方向的な過程として理解し、エナクトメントが相互的であることを強調している。また、解離と分裂との関連については、一般に分裂が一人の心の中で生じるプロセスとして理解されるのに対して、解離 (特に強い解離) はエナクトメントの形で二人の心の中に生じるプロセスであるという見解を示している。

Stern はセラピストに生じるエナクトメントを、クライアントに由来する反応のみによって生じるのではなく、クライアントとの相互交流の影響とセラピストの個人心理とが結びついた産物として理解する。エナクトメントがクライアントにもセラピストにも生じている場合、それは相互エナクトメントと呼ばれる。相互エナクトメントは、解消の難しい行き詰まりに陥りやすい。この状況においては、クライアントもセラピストも互いに自分が解離しているものを自分のものとして経験できずにいると考えられる。

ここでは、上記の Stern の考え方の概略をつかむために、以下に、Stern (2010) が相互エナクトメントによる行き詰まりとその解消の過程を説明する例として提示している臨床ヴィネットを要約して示す。

クライアントは、能力はあるが子どもっぽさを残した 30 代の男性。学業や仕事のチャンスをとことく駄目にしてきた人で、心理療法には熱心であり、セラピストに深い感謝を表明していた。一方で、セラピストに説得されてこれまでのような気ままな生活を送ることができなくなることを恐れてもいた。クライアントにもセラピストにも満足の行くように思われた 1 年半の面接の後、セラピストは漠然とした違和感を持ち始めた。セラピストには、心

理療法が、非常に微妙にはあるが、これまでのように興味深く生き生きとしたものには感じられなくなってきた。クライアントの方も、ベストを尽くしていると言い続けてはいたが、それまではうまくいっていると感じられていた学業面で、あからさまな失策を重ね始めた。少し後になってから、クライアントが陥っている状況は、かつて両親との間で陥っていた状況とぴったりと重なることが、二人の間で理解され始めた。クライアントは、表向きは熱心で活発な忠実な息子であった。しかしクライアントは同時に肝心の学業には失敗し続けたのだった。やがてクライアントとセラピストは次のような理解にたどりついた。クライアントには、両親が自分に寄せる期待は自分の気持ちをまったく無視しているとしか思えず、そのことにいつも腹を立て失望してきた。しかしクライアントは、両親の自己愛の傷つきやすさと両親への愛情から、後ろめたさのあまり直接に抗議することができずにきた。抗議する代わりに、両親が喜ぶであろうことに劇的な失敗をくり返してきたのだった。

セラピストとの間には次のようなことが生じていたと二人の間で理解された。クライアントは初め、セラピストと協力的な関係を持ち、多くの成果を上げ始めた。しかし、セラピストがクライアントの上げる成果に満足を感じ始めてから、クライアントは腹立ちを感じ始め、自分がやっていることは自分のためというより、セラピストのためなのではないかと思いはじめた。そこからクライアントは、あたかもセラピストが自己愛的な満足を必要としているかのようにセラピストに應對し始めた。セラピストはクライアントのこうした変化に気づかなかった。クライアントの両親がそうであったかもしれないように、セラピストはクライアントの偽りの協力とへつらいに満足を覚え続けていた。クライアントには、セラピストとの関係を維持していくためには、セラピストに満足を提供し続けなければならないと無意識的に感じるだけの十分な理由があったのだった。つまり、クライアントからの関わり方に反応してセラピストは逆転移を発展させ、それによってクライアントの転移を強化していた。このことが二人の関係の行き詰まりを生んだのだった。

この臨床ヴィネットにおいて、セラピストは自己愛的な満足を経験しており、クライアントを失望させていることは解離していたと **Stern** はコメントする。そしてクライアントの方は、セラピストを満足させる試みを解離し、セラピストに対する失望を経験していた。つまり、こうした二つの自己状態が、一人の心の中で葛藤を形成するのではなく、互いに解離したものを相手が経験するという形で、対人間の葛藤として現れていたと理解された。**Stern** は、実際にクライアントを失望させている自分の無意識的な関与に気づき、そのこ

とに対する後ろめたさに気づくことで、はじめてそれらを自分の中の葛藤として経験することができるようになったのだと説明している。こうして、セラピストが自分の感じ方の変化に気づき、それを通じてクライアントの態度の変化に気づくことで、クライアントとセラピストの双方が互いに相手に対して無意識的に行っていることが理解できるようになった。そして、二人の間に何が起きているのかについてクライアントと話し合うことで、解離の対人関係化として生じていたエナクトメントが解消されて、二人の関係は変化したのであった。その結果、それまで自分に認めることができなかつた「自分でないもの」を、クライアントは受け入れられるようになり、クライアントに変化が生じたと考えられる。

このように、Stern にとって、エナクトメントは、それに気づき、認識し、経験として意味づけることで、自己のあり方、および他者と自己との関係のあり方が拡張する、いわば心の可動域が拡張するための、不可欠の契機であると言えるだろう。

第4節 論点の整理

(1) 見解の相違点

エナクトメントに関する議論の多様性は、二つの極を軸に整理することができると思われる。一方の極は、エナクトメントを、エナクトメントに先立ってすでに個人の中に存在しているがまだ意識されていないものの現れとして捉えることを重視する立場である。もう一方の極は、エナクトメントを、エナクトメント以前には意識できる形ではまだ存在していないものが対人関係に結晶化した現れとして捉えることを重視する立場である。

例えば、前者の極は、エナクトメントは転移—逆転移や内的対象関係が対人関係化したものであるという捉え方である。このような捉え方においては、エナクトメントに先立って、例えばその原型となる転移空想といったものが存在すると想定されるだろう。そこでは、エナクトメントは無意識的ではあるが個人の心の中に形を成して内在しているものの現れであるという点が強調される。

これに対して、後者の極は、エナクトメントはエナクトメントとして現れて初めてはっきりとした形を成して存在するようになるものであるという捉え方である。そのような観点からすれば、あらかじめ個人の中に内的なプロセスがあつてエナクトメントが生じるのではなく、エナクトメントが生じることで、それが個人の中で内的なプロセスとして経験される可能性が生まれると考えられる。Stern のエナクトメント概念は、後者の極の立場の典型例の一つと言えるだろう。

エナクトメントをめぐる議論の多様性は、それぞれの論者がこの両極の間のどこに自らを位置づけているかの差異から生まれていると見ることができる。そして、このような捉え方の違いが、Bonovitz が指摘するような技法の違いに結びついていると考えられる。

前者の極の立場では、クライアントのエナクトメントとして現れたものは、これまでは未知であったとしても、あくまでクライアントの心に内在するものであり、たとえ実際にはセラピスト個人のパーソナリティや対象関係がエナクトメントに影響していたとしても、クライアントについてのセラピストの主観的な経験をクライアントに伝えたり、クライアントと話し合ったりすることは、少なくとも外的外れでしかないだろう。

後者の極の立場では、クライアントのエナクトメントとして現れたものは、セラピストもまたそのエナクトメントに不可避的に関与している共同構築の産物である。そこに現れたものは、それが現れたコンテキストに深く結びついている。エナクトメントの意味は、クライアントとセラピストが相互に関与することで形成されるそのコンテキストにおいて、はじめてはっきりと形作られるのである。そこに現れたものは、クライアントの心の中にすでにあったものに尽きるものでも、セラピストの心の中にすでにあったものに尽きるものでもなく、クライアントとセラピストの意識的および無意識的な交流を通じて、二人の間に現れたものである。換言すれば、それは二つの主観性の間に広がる間主観的領域に現れたものである。間主観的領域は、それぞれの主観性を含みつつも、それを越え出ている。間主観的領域に現れるものは、個人の主観性に還元し尽くすことはできない。だから、二人がそれぞれの経験を持ち寄って話し合うことが必要とされるのである。その結果として、二人の間に起きていたことが、二人それぞれに自分の心の過程の一部として、いわば「自分」という心の領域が拡大される形で、主観的に意味づけられ経験されるのである。

(2) エナクトメントへの気づき

エナクトメントは、多くの場合、心理療法の行き詰まりを生むと捉えられてきた。あるいは、心理療法の行き詰まりをエナクトメントが起きている状況としてセラピストが捉え直すことで、そうした行き詰まりが打開される経験が積み重ねられてきた。

心理療法の行き詰まりは、伝統的には、面接関係に生じている転移—逆転移をセラピストが捉え損ねている事態として理解され、取り組まれることが多かったと言えるだろう。そうした伝統の中で、エナクトメントに着目するということは、転移—逆転移がクライアントおよびセラピストの微細な行動の表出に表れていることに改めて焦点化して注目する

取り組みであると言えるだろう。

現代的なエナクトメント論の特徴は、とりわけセラピストの側の微細な表出に検索の焦点が置かれた点にあると言えるだろう。つまり、セラピストが前意識のレベルで主観的に経験している感覚や感情に注目する古典的な逆転移の活用から、セラピスト自身が自覚していない行動の表出、セラピスト自身の意図を裏切る行動の表出への注目を通じて逆転移に気づくというアプローチである。

ここで問題になるのは、セラピストは、自らのエナクトメントにどのようにして気づくことができるのかということである。自覚していない行動の表出や、ぼんやりと気づかれている行動の表出は、セラピストの鋭敏な内省によって自ら気づかれる可能性があるだろう (Jacobs, 1986; McLaughlin, 1991)。しかし、セラピストの意図を裏切る、あるいは意図を越えた行動の表出は、原理的にも、セラピスト自身の内省によってはつかむことができないだろう。このような場合には、セラピストが自らのエナクトメントに気づく契機は、クライアントに求めるほかない。つまり、クライアントがセラピストの振る舞いをどのように経験しているかを知ることが、セラピストのエナクトメントを告げ知らせる契機となるのである (Bonovitz, 2007)。Stern の考えを援用すれば、セラピストが解離しているものはクライアントが経験しているのであり、クライアントの経験とセラピストの経験を同時にセラピストが、あるいはクライアントが、経験できるようになることが、エナクトメントを乗り越え、そこから何かを学ぶ契機なのである。

私たちは、自分が何をしているつもりでいるかを主観的に振り返ることはできても、実際に自分が何をして相手にどのような影響を与えているかを内省のみで知ることはできない。私たちは、クライアントの言葉に耳を傾け、クライアントのあり方に寄り添うことに努めることを通してのみ、クライアントと共にいるときの自分自身についての認識を広げることができるだろう (例えば、Casement, 2002)。同様に、Chused (2003) も指摘しているように、そうしたセラピストの姿を目の当たりにし、そうしたセラピストと共にいることを通じて、クライアントもまた自分自身についての認識を広げることができるのではないだろうか。

第5節 残された課題

改めて Steiner と Levenson との間の討論を振り返れば、Steiner から見れば、後者の極の立場を取るセラピストの関わり方は、クライアントとの悪しき共謀関係に陥るリスクを

免れない。エナクトメントを容認し、エナクトメントに身を委ねることを否定しない立場は、セラピストの隠れた自己愛的な満足の問題の反映である可能性を排除できない。また、クライアントについてのセラピストの主観的経験をオープンに話し合うことを自己開示技法の一種と見なす立場からすれば（例えば、Sedlak, 2009）、それは心理療法において探究すべきテーマを、クライアントに安心感を与えてクライアントとの表面的に良好な関係を維持しようとするセラピスト自身の逆転移により覆い隠してしまうやり方に映るだろう。

エナクトメントについての理解の仕方の違いが心理療法の過程にどのような違いをもたらすのか、私たちは自分のエナクトメントにどのようにして気づくことができるのか、こうした問題について、本章ではいくつかの手がかりを得るにとどまった。これらの問題について理解を深めていくためには、詳細な事例検討の積み重ねを通じて、さまざまな立場のセラピストが、それぞれの立場の違いを認識し、それぞれの立場のコンテクストから心理療法の目標や心理療法の技法の意味を吟味した上で、互いに相手の立場に理解を深めつつ対話を重ねていくことが不可欠だと思われる。

第10章 エナクトメント論とその射程

前章では、精神分析の分野におけるエナクトメント概念を概観し、その中に Stern のエナクトメント概念を位置づけ、エナクトメント概念をめぐる見解の多様性を生んでいるいくつかの論点について検討を行った。本章では、前章の検討を引き継ぎ、Stern のエナクトメント論についての検討を深める。その中で、伝統的な転移論と Stern のエナクトメント論の相違について検討することを通じて、伝統的な立場と経験の構成モデルの立場との違いについても論じる。

第1節 Stern のエナクトメントの定式化

前章においても検討したように、Stern (2010) がエナクトメントに与えている最もシンプルな定式化は、「解離の対人関係化 (interpersonalization of dissociation)」というものである。クライアント個人の心の中で葛藤になりえないものが、クライアントとセラピストの間の対人葛藤として現れるというのが、その基本的な理解の仕方である。個人の心の中で葛藤が生じるには、互いに相異なる心のあり方や自分のあり方が共に個人において意識可能であることが必要である。したがって、解離された状態にあり、そもそも未構成の経験は、はっきりと意識されようがないのだから、個人の心の中で葛藤を形成しえない。そのような、クライアント個人の中では葛藤になりえない、クライアント自身の経験としては未構成の経験が、クライアントとセラピストの間で、対人葛藤として「実演される」のがエナクトメントであると理解される。そして、エナクトメントが起きている状況では、クライアントは解離されて未構成に留まっている自分自身のあり方については、自覚することも考えることも難しい。このような状況が、心理療法の停滞や行き詰まりとして現れてくると捉えられる。

ここで、第8章において用いた、怒りの帰属をめぐるエピソードの例を再び取り上げる。ここでは、話を非常に単純化して、クライアントには、心穏やかな自分というあり方と、怒りに満ちた自分というあり方があると想定することにする。クライアントが、この両方の自分のあり方を自覚できており、自分には心穏やかなあり方と怒りに満ちたあり方の両方があると経験できていれば、つまり心穏やかなあり方と怒りに満ちたあり方という葛藤が自分にあることが自覚されていれば、特に問題は生じない。しかし、心穏やかなあり方は自覚できるが、怒りに満ちたあり方は自覚できない、そのような自分のあり方を経験と

して構成したことがない、つまり怒りに満ちた自分のあり方は未構成である場合には事情が変わってくる。

まず改めて確認しておきたいのは、この場合、自覚されない、怒りに満ちた未構成の自分のあり方は、抑圧されているのではなく、解離されているということである。第2章で検討したように、自覚されていないものが、抑圧されているのか、解離されているのかを区別するのは、自覚されていないものの性質であった。それが一度経験として構成されて意味づけられたうえで自覚されなくなっているのであれば、それは抑圧されていると捉えられる。それに対して、それが一度も経験として構成されたことがなく、意味づけられたこともなければ、それは解離されていると捉えられるのであった。

このように考えるとき、悩ましいことに、例えば「怒りに満ちた自分という経験は未構成である」という表現は、それを受け取る人を誤った思考の道筋に導きやすい。なぜなら、いくら未構成であると説明されても、「怒りに満ちた自分」は十分に縁取られて意味のある内容を持つように聞こえてしまうからである。したがって、煩雑さをいとわずに正確に表現しようとするならば、「後に経験として構成されたときには怒りに満ちた自分として構成される可能性があるが、現在の時点では未構成に留まっている自分のあり方」とでも表現すべきである。しかし、これではいかにもぎこちなくて使い勝手が悪い。「怒りに満ちた自分という経験は未構成である」という表現は、そのような含意の省略表現であることに注意が必要である。

さて、解離された「怒りに満ちた未構成の自分」は、クライアントに自覚されることはなくても、非言語的で無自覚な交流のレベルでは、セラピストとの間で交流し、セラピストとの関係の中に何らかの不明瞭な形で立ち現れると考えられる。例えば、クライアントには無自覚な振る舞いとして現れるクライアントの怒りに満ちた自分に呼応して、セラピストの方には、セラピストの怒りに満ちた自分が作動し始めるかもしれない。このとき、クライアントには、あくまで「怒りに満ちた未構成の自分」は自覚できないが、セラピストの振る舞いに現れたセラピストの怒りは、クライアントにもはっきりと見ることができるとする。このような場合に、クライアントには、自分は心穏やかである一方、セラピストは怒っているという経験が生じることになる。これが、自分の中で葛藤として経験できないものが、相手との関係において二人の間の葛藤として経験されるということの意味である。

上のような説明に触れると、前章でも論じたことであるが、伝統的な立場の考え方にな

じんだ人であれば、多くの人が「投影同一化」(Klein, 1946; Ogden, 1977)のことを思い浮かべるであろう (Stern, 2010)。確かに、Stern がエナクトメントが生じていると捉える状況は、伝統的な投影同一化の考え方で十分に説明可能なものに見えるだろう。このことについては、後でも触れるが、ここで注意を促したいのは、Stern のエナクトメント論と伝統的な投影同一化の概念とでは、心理療法においてセラピストには何が認識可能なのか、心理療法の作用は何なのかについての基本的な考え方が、大きく異なっているということである。それらは、同じような現象に対する単なる説明の仕方の違いを意味しているのではなく、基本的な考え方の違いを意味しているのである。筆者が本論文で一貫して取り組んでいるのは、伝統的な立場と、Stern のエナクトメント論が立脚している考え方およびそれを筆者が拡張した経験の構成モデルとの間には、言葉遣いや使う概念の違いといった表面的で形式的な相違ではなく、より基本的で根本的な相違があるという主張である。

再びエナクトメントの検討に戻る。エナクトメントが起きている状況では、クライアントの経験やものの見方は一面的な硬直化したものになりやすく、その時点でのクライアントの見方とは別の見方からその事態を捉え直し、新しい経験を構成することが難しくなる (Stern, 2010)。そういう意味で、心理療法は停滞や行き詰まりに陥ることになる。心理療法の過程が前に進むためには、エナクトメントが解消され、クライアントの経験やものの見方の柔軟性が回復する、あるいは獲得される必要がある。

上に説明したような理解に基づいて、図式的に説明すれば、エナクトメントが解消するとは、クライアントがセラピストとの間に対人葛藤として経験しているものが、クライアント個人の心の中の葛藤として経験されるようになること、つまり、自分の「外」で起きていると経験してきたものが、自分の「内」にも起きているという経験を構成するようになることである。それは、見方を変えれば、「単なる出来事」にすぎないものが、かけがえのない「私の経験」になることでもあると言えるだろう。そういう観点からすれば、エナクトメントを解消することは、単に停滞した心理療法を前に進めるための技術的な問題ではなく、それ自体が心理療法を進める上で不可欠のステップであると言える。そういう意味では、次節で検討することであるが、Stern が立脚する立場および経験の構成モデルにおいてエナクトメント概念が占める位置は、伝統的な立場において転移の概念が占めている位置に類似していると言えるだろう。

もう少し、先ほどの例に基づいて検討したい。先ほどの例では、クライアントから見て、クライアント自身は穏やかなあり方の自分であり、セラピストは怒りに満ちているという

対人間の葛藤としてエナクトメントが起きていた。この状況が続く限り、クライアントは怒りに満ちた自分というあり方を、自覚的に経験することができない。つまり、エナクトメントが起きている状況においては、クライアントの経験の幅が狭くなり、クライアントにとっての「自分の経験」の幅が狭くなるのが大きな問題なのである。したがって、この例においてエナクトメントが解消されるということは、クライアントが、怒りに満ちた自分というあり方を経験として構成できるようになり、自覚するようになることである。それによって、クライアントに自覚できる経験の幅が広がるばかりでなく、クライアントが自覚的に自らに許容できる自分のあり方の可能性の幅が広がるのである。

ここでも、やはり人によっては、「エナクトメントとその解消」という考え方が「転移とその解消」という伝統的な考え方とあまり変わらないように受け取るかもしれない。確かに、そのような受け取り方は自然であり、それら二つはどこが違うのかという疑問がわくのも当然であると思われる。次節において、このことを検討したい。

第2節 伝統的な転移論との相違

面接状況の中で生じているクライアントとセラピストの関係の問題は、伝統的な立場では転移(セラピストにとっては逆転移)の問題として論じられてきた(Bateman & Holmes, 1995)。転移の概念はその論者によって強調点はさまざまに異なるが、ここではそれらの共通点を筆者なりに抽出する形で、転移とは、クライアントには生活史の中で身につけてきた対人認知、対人関係形成の固有のパターンがあって、それが面接状況において活性化して再現されるという現象であるとする⁵¹。こうしたクライアントに固有のパターンを生み出す起源として、伝統的な立場においてはクライアント個人の対象関係がしばしば想定されてきた。

転移の考え方においては、面接状況においてクライアントとセラピストの関係として現れるものは、もともとクライアントの心の中に形を成してあるものだと想定されている。これに対して、Sternのエナクトメント論においては、面接状況においてクライアントとセラピストの関係として現れているものは、クライアントの心の中でまだ形を成していないのだと捉えられる⁵²。そして、そういう意味では、それは通常の意味では「心の中にあ

⁵¹ ただし、このような捉え方は、より古典的な転移の考え方に当てはまるものであることに留意が必要である。

⁵² BatemanとHolmes(1995)は、転移についての古典的な理解と現代的な理解との違いを論じる中で、現代的理解には「潜在的な意味の現れ」という観点が含まれていることを指摘しており、転移のすべてがすでに形作られたものの現れであるとは言えない。

る」とは必ずしも言えないものである。このように、さしあたりは、転移論とエナクトメント論の違いは、面接状況に現れているものが、すでに形を成したものであるか、つまり抑圧されたものであるか、まだ形を成していないものであるか、つまり解離されたものであるか、どちらと考えるかの違いだと理解することができる。

しかし、このような理解に対しては、しばしば次のような反論が提出される。抑圧されているにしろ、解離されているにしろ、結局はクライアントに属するものが現れているのだから、どちらでも同じことではないか、それをわざわざエナクトメントという別の概念で捉えることに積極的な意味はないのではないか、という反論、あるいは疑問である。筆者の見解では、この反論は妥当ではない。なぜなら、そのような反論においては、おそらくはエナクトメント論の基盤となっている解離の働きと抑圧の働きの違いが、十分には理解されていないように筆者には思われるためである。

Stern は、Sullivan (1953a) の考えを踏まえて、解離の基本的な働きを、ある特定の「対象」に注意が向けられていないこととして理解している。なかでも、Stern が注目するのは、経験の構成と解離の関係である。Stern が臨床的に注目する未構成の経験は、経験それ自体が丸ごとまったく自覚されないという現象であるよりも、出来事としての、生じた事象としてのレベルでは自覚されているが、その出来事が表す意味の可能性の一部が自覚されていない現象であると捉えることが適切であると、筆者には思われる。例えば、セラピストの態度が冷たいというクライアントの経験においては、さしあたり、セラピストは疲れているのかもしれない、体調が悪いのかもしれない、他の心配事に気をとられているのかもしれない、自分がセラピストを不快にさせる振る舞いをしているのかもしれない、といった可能性については未構成であり、解離されていると捉えられる⁵³。

これまで検討してきたように、ある経験のあり方が未構成であるということは、その主体にとって、その経験のあり方は端的に存在しないということである。したがって、解離の働きは、何かある特定の経験の可能性の現実化を妨げることではない。なぜなら、妨げられる対象そのものが、まだ存在していないからである。解離の働きは、そのとき実際に現実化している経験のあり方以外の経験のあり方に目を向けないこと、他の可能性を考慮しないことにある。より積極的な見方をすれば、そのとき実際に自覚されている経験のあり方で、自分の世界を覆い尽くすことにあると言えるだろう。それは、比喩を用いて言え

⁵³ ただし、解離には強度のスペクトラムを想定することが可能であり、ごく弱い解離から強力な解離まで、一口に解離されていると言っても、その強度にはさまざまなものがあることに注意する必要がある。

ば、恋人と二人きりになるために、自分たち二人以外の邪魔な他者をみんな部屋の外に追い出すのではなく、そもそもその主体には恋人しか目に入っておらず、実際には二人以外に邪魔な他者がいたとしても、そのことにはっきりとした注意を向けることなく（「眼中にない」）、部屋には自分と恋人の二人きりだと思い込んでいるような状態である。

さて、このように解離されているものは、その主体にとっては、端的に存在しない。伝統的な転移論が基本的に依拠している抑圧の考え方によれば、転移の原型となる無自覚的な対人関係のパターン、あるいは対象関係は、「存在しているが無意識的である」、あるいは「無意識的に存在している」と捉えられるだろう。これに対して、Stern のエナクトメント論が依拠する解離の考え方は、エナクトメントの状況に現れているものは、「存在していない。だからそもそも意識されるはずもない」というものである。別の説明の仕方をしてみたい。転移論においては、面接関係に現れているものはコピーであり、そのオリジナルはクライアントの心の中に無自覚な形で存在すると捉えられる。これに対して、エナクトメント論においては、転移論におけるコピーとオリジナルの関係の、オリジナルにあたるものが存在しないのである。

このように、解離されているものは、そもそも存在しないのだから、もともとその主体に属していたと言うこともできない。つまり、解離されていたものが自覚されるようになるということは、何かあるものが、無意識的な水準から意識的な水準へと位相が変化するということではない。それは、潜在的だった可能性の一部が現実的なものへと変化することであり、それはある種の創造の働きとして捉えることができるものである。このことは、伝統的な転移論においては、無意識的なものに対する「洞察」がしばしば重んじられることと対照的である。なぜなら、「洞察」という概念および表現には、「隠れている本質を見抜く」というニュアンスが強く含意されているからである。

このように、抑圧モデルに基づく転移論も、解離モデルに基づくエナクトメント論も、結局は同じことを言っているに過ぎないという批判は、的を射ていないというのが筆者の見解である。これら二つの立場は、相互に基本的な点から見方が異なる、互いに代替的な考え方であるというのが、筆者の見解である。

第3節 心理療法の作用に関する見解の相違

面接状況の中で生じているクライアントとセラピストの関係の問題を、伝統的な転移論にしたがって考えるのと、エナクトメント論にしたがって考えるのとでは、実践的にどの

ような相違が生じ、問題になるのだろうか。

おそらく、最も問題になるのは、心理療法の過程で生じるさまざまな事象のうちで何が心理療法を前に進め、展開させる働きをしているのかについての考え方の違い、つまり心理療法の作用に関する考え方の違いである。なぜなら、心理療法の作用に関する考え方の違いは、心理療法においてセラピストが何をすべきかに関するセラピストの考え方の違いに、そして実際の応答と介入のあり方の違いに直結する可能性が高いからである。

転移論においては、クライアントの対人関係の持ち方、捉え方の歪曲の根底にある、抑圧の解消による無意識的であったものの意識化が中心的な心理療法の作用になるかもしれない。例えば、そこでは、セラピストにはクライアントの対象関係を正しく理解することが求められるだろう。転移として現れてきているのは、クライアントの心の中にすでにある原型のコピーとして捉えられる。そのような捉え方のもとでは、セラピストの姿勢は求心的に真実を探究するというものに傾きやすいだろう。セラピストは、クライアントの無意識を読み取る人という位置に自らを置きやすく、主観を排した（主観を介することも）客観的な正しい解釈に到達するという志向性を持ちやすいだろう。

エナクトメント論においては、クライアントの対人関係の持ち方、捉え方の可能性が限定されているその根底にある、解離の解消による経験の新しい構成が中心的な心理療法の作用として想定される。例えば、そこでは、セラピストにはそのとき実際にクライアントが行っている経験の構成とは別の経験の可能性を探究することが求められる。エナクトメントとして現れてきているのは、クライアントにとってはまだ自分のあり方として経験されたことのない、自分のあり方としては考えられたことのない未知のものとして捉えられる。そのような想定のもとでは、セラピストの姿勢は遠心的に可能性を模索するというものに傾きやすいだろう。セラピストは、クライアントをそのときクライアントが自覚していることの外へと誘い出す人という位置に自らを置きやすく、クライアントがオルタナティブな見方にアクセスしやすくなる対話を目指すという志向性を持ちやすいだろう。

簡略化していえば、転移論においては、クライアントの無意識を読み解くセラピストの正確な解釈力が要請され、エナクトメント論においては、クライアントの経験の多様な構成が可能になる対人関係の場を築くセラピストの対話力が要請されるのである。

こうした心理療法の作用に関する考え方の違いが私たちの心理療法への向き合い方にもどのような影響をもたらす可能性があるのか、伝統的な立場とは異なる経験の構成モデルが開くパースペクティブはどのようなものであり、その射程がどのようなものであるのかに

については、終章において改めて検討し、その見通しを示したい。

終章へと進む前に、伝統的な立場と、Stern が立脚する立場および経験の構成モデルとの相違点を別の角度からも検討するために、Stern 自身の臨床ヴィネットを通じて、心理療法の過程の行き詰まりをエナクトメントの解消として捉えるとはどのようなことであるのかについて、次章において検討する。

第11章 エナクトメントが解消する過程

—Sternの臨床ヴィネットの検討—

本章では、第7章でも取り上げたSternの臨床ヴィネットを主な題材として、エナクトメントが解消する過程について、その道筋を追うと共に、そこで何が起きていたのかについて、筆者の観点から検討を行うことで、Sternのエナクトメント論と経験の構成モデルについての理解を深めることを目指す。

第1節 Sternの臨床ヴィネットに見るエナクトメントの過程

まずは、エナクトメントが解消する過程について、Sternの臨床ヴィネットをたどりながら、Stern自身がその過程についてどのように理解しているかを検討する。

ここであらかじめ注意を向けておくべきことがある。それは、エナクトメントの過程を説明するにあたって、それをエナクトメントが生じる過程の方から見ていくか、エナクトメントが解消する過程の方から見ていくか、いずれの方法をとるかによって、エナクトメントの理解の仕方に本質的な違いが生じる可能性があることである。これまでにも繰り返し見てきたように、エナクトメントの基礎にある解離された未構成の経験は暗黙的に存在する、あるいは捉え方によってはむしろ存在しないものであり、エナクトメントが生じる過程の方から見ていくと、どうしても「暗黙的に存在する＝存在しない」ものが、すでに存在しているかのような記述と説明になりやすい。そうした記述と説明は、誤解に誘い込むものに陥りやすい危険性がある。

そのため、ここでは、エナクトメントが生じる過程ではなく、エナクトメントが解消する過程の方から説明していきたい。実際の臨床場面においても、エナクトメントが生じる過程は私たちには不可視であり、私たちにできるのは、クライアントとセラピストの間にすでにエナクトメントが生じた後に、あるいはすでに生じている間に、それをエナクトメントとして理解し、新しい気づきを得ることにすぎないと考えられる。

ここで取り上げるのは、第7章でも取り上げた、Stern (2010) が挙げている臨床ヴィネットである。第7章では、クライアントの語りをセラピストが聞くことの意義というコンテキストで取り上げた臨床ヴィネットを、本章では、エナクトメントが解消される過程というコンテキストで改めて取り上げて検討する。以下に、Sternの臨床ヴィネットを筆者が要約したものを再び示す。

中年期にさしかかり始めた独身女性であるクライアントとの心理療法を始めたセラピストは、その早い段階から、クライアントはクライアントなりのやり方で精一杯自分自身の苦しみについて話しているにも関わらず、どうしてもクライアントの心に近づくことができないという無力感を抱いていた。セラピストには、クライアントの訴えに対する自分の理解や応答が、どのように努力しても表面的で皮相的なものでしかないと感じられ、そのことにクライアントもまた欲求不満を感じていることが伝わってきていた。このままでは、クライアントは心理療法から離れていくだろうと、セラピストは懸念していたが、自分の無力感も膠着した関係もあまり変化しない状況が続いた。

そんな時期のある面接中に、セラピストは、自分が何を言うべきか確信が持てないままに、二人のあいだに起きているこの状況について、そのことをクライアントがどう感じているとセラピストである自分が考えているかについて、クライアントに改めて語りかけはじめた。セラピストには、クライアントがいつもとは少し違った反応を見せているように感じられ、面接室内の雰囲気には何か変化が生じたように感じられ始めた。その変化がどのようなものであるかを明確に捉えることはできなかったが、セラピストは自分が何を言おうとしているのかもはっきりしないままに、次のような言葉を発していた。それは、それまで一度もセラピストの頭に浮かんだことがなかった考えだった。

セラピストは、「あなたはずっとひとりぼっちだったのではありませんか？ あなたは本当に自分のことをわかってもらったと感じたことが、これまでなかったのではないのでしょうか？」とクライアントに話したのだった。これに対して、クライアントは、ひとしきり涙を流して泣き、しばらく沈黙した後、「ずっと私はひとりぼっちだったんです」と答えた。そして再び沈黙した後、自分は確かに一度も誰かに理解されたと感じたことがなかった、両親とのあいだでさえもそうであったと語り始めた。このセッションが終わる頃には、クライアントとセラピストがそれまでとはまったく異なる何かを始めたことが、二人には明らかに思われた。

見方によっては、この臨床ヴィネットは何の変哲もないありふれた過程に見えるかもしれない。しかしこの過程を、Stern はエナクトメントの過程として、しかも相互エナクトメントの過程として捉えて理解している。それはどのような理解の仕方であるのかを、以下に検討する。

この面接過程は、セラピストの心にある考えが浮かんだことで大きく展開したのだが、重要な点は、その考えがセラピストの心に浮かぶ時点までは、セラピストにはその考えをもつこと、そのアイデアについて考えることがまったくできなかつたということである。セラピストに思い浮かんだ考えそのものは、ごく自然な、後から振り返れば自明のものと言ええるような考えであった。つまり、そのことを考えること自体は、けっして難しいことではなかつたはずである。にもかかわらず、それまでは、セラピストにはまったく考えることができなかつたのである。これが、エナクトメントが生じていたことを示唆する重要なサインの一つである。エナクトメントが生じている状況では、未構成の経験の可能性のうち、どれほど意識的、意図的に努力しても、ある特定の経験の構成の可能性に、クライアントもセラピストも思い及ぶことができないのである。そして、どうしても構成できなかつた経験の可能性が何であったかは、実際に構成が可能になった後でしか、つまり事後的にしかわからないのである。

ここで、未構成の経験と抑圧された経験の違いを、筆者が重要と考える「表れ」と「現れ」の観点から、改めて確認しておきたい。抑圧された経験は、象徴化された経験である。象徴化された経験は、象徴化されているからこそ、それ自体とは別のものを介して表現されうる。例えば、言葉にされた経験は、経験（の一部）を言葉で表したものである。言葉はもはや経験そのものではないが、他の言葉やイメージと比喻、連想、象徴といった関係で結びつき、そうした結びつきを介して伝達可能になる。象徴化された経験は、たとえ抑圧されていても、何らかの形で現れてくる。そして、その現れには意味が表れている。このことは、Freud (1900) が夢分析の例を通じて示した通りである。このことを筆者は「表れる現れ」と呼ぶことにする。「表れる現れ」については、私たちはそれが何であるかを、何を表しているかを、連想などをたどることを通じて、考えることができる。

これに対して、未構成の経験すなわち解離された経験は、まだ象徴化されていない。つまり、何らかの意味で解釈されてもいなければ、理解されてもいない。それは、まだそれそのもののままであり、別の何かとして表されていない(表象されていない)。したがって、それはそれそのままであり続けており、伝達不可能な状態にある。それは、それそのままとして現れることはできる。それがエナクトメントであると捉えられる。しかし、その現れには意味が含まれていない。意味が表れていない。このことを筆者は「表れない現れ」と呼ぶことにする。「表れない現れ」について、私たちは考えることができない。しかし、「現れ」である以上、そこにあるのであり、そこに何かがあることを、私たちは、もし十

分に注意深ければ、感じとることができる可能性がある。

Stern の考えは、筆者なりの見解を補って説明すれば、以上のようになると思われる。このような理由で、エナクトメントが生じている間は、つまり解離されている未構成の経験がエナクトされている間は、それは確かにそこにあるのに、それについて考えることができないのである。このことは、セラピストが、膠着した面接状況を変化させる肝心の何かが自分には理解できていないことに漠然とは気づきつつも、それが何であるかについて、どうしても適当な考えに思い至らなかったことにも、よく表れていると思われる。

セラピストにある考えが浮かび、それがクライアントとの間で共有され、面接の過程を大きく動かしたということは、それまではエナクトメントとして現れていたものが、エナクトメントではなくなった、エナクトメントが解消したということである。ここでただちに少なくとも3つの問いが思い浮かぶ。①エナクトメントが解消したことで何がわかったのか、②エナクトメントが解消したことで何が変わったのか、③エナクトメントが解消した理由は何であるのか、といった問いである。これらの問いは、相互に関連し合い、重なっている問題に差し向けられている。以下に、順に検討する。

第2節 「何がわかったのか？」

まず、第一の問いの「何がわかったのか」について検討する。明らかになったのは、「誰も本当の自分をわかってくれない」という経験であり思いであった。そして、クライアントは、「誰も本当の自分をわかってくれない」＝「セラピストは本当の自分をわかってくれない」という経験として自分の体験を構成する代わりに、事実として、セラピストは自分（クライアント）をわかっておらず、自分の心に届く関係を作れていないという状況として、つまり、自分の経験のあり方としてではなく、現実のセラピストのあり方（有能性の不足）の問題として、この面接状況を経験していたのであった。ここで繊細な注意を要するのは、この見方は、「誰も本当の自分をわかってくれない」という経験が、すなわち抑圧された経験がすでにあったから、「セラピストは自分（クライアント）のことをわかっていない」という経験の仕方をしたのだという理解の仕方とは異なるということである。そのような理解の仕方をするすれば、それは前章で検討した転移論に接近した見方だと言えるだろう。

もし事態が後者のようであったのなら、クライアントかセラピストのどちらかが、もっと早くにその事態に気づいた可能性が高い。しかし実際には、そうではなくて、クライエ

ントはまさに現実によりありありと「セラピストは自分をわかってくれない」と経験していたのである。そしてそういう意味では、セラピストは実際にクライアントをわかっていなかったのである。あるいは、次のように考えてみるのが有益であると、筆者には思われる。それは、クライアントは「誰も本当の自分をわかってくれないと経験する代わりに、セラピストは自分をわかってくれないことに欲求不満を感じた」のではなく、「セラピストは自分をわかってくれないという現実で苦しんだ果てに、誰も本当の自分をわかってくれないという経験が可能になった」のだという考え方である。

「Aの代わりにBを行った」という形式の説明は、どうしてもAこそが本来的であり先行しているという認識（錯誤）を生みやすい。それ以上に、私たちは、行動は内面の表れであるという考え方に深く慣れ親しんでいる。私たちは自他の行動を「表れる現れ」として捉えがちである。「行動化」という概念が、私たちの中で有意義なものとして共有されているのがその例である。

しかし、その逆の過程もあるはずだと筆者には思われる。むしろ、私たちの発達の最初期には、逆の過程の方こそが多くを占めているのではないだろうか。子どもの振る舞いを周囲の大人が意味づけていくことで、子どもはその大人たちと共に生きる環境に自らを調整していく。それが内面化の過程であると捉えることができる。そのような文脈で考えてみれば、エナクトメントに現れているものは、「隠れた意味」を読み解かれるべきものではなく、おそらくはじめて内面化されるべきものである。あるいは、別の観点から言えば、エナクトメントに現れているものは、本来的にまだ内省不可能な、内省可能になる以前のものであると言えるだろう。

また、もう一つの問題として、一度「誰も本当の自分をわかってくれなかった」という経験の構成が可能になると、実際にこの例ではクライアント自身がそのように発言しているのであるが、それは決して今始めて経験されたこととしてではなく、「ずっと以前からそうだったのだ」という経験として、しばしば受け止められる（Stern, 2017b）。そのときはじめて言葉で構成された経験であるにもかかわらず、遡及的に過去からずっとそうだったという経験が成立するのである⁵⁴。つまり、ずっと以前から、今生まれた経験が今生まれた形と同じ形で構成されたものとして存続してきたかのような、ある種の錯誤が生じやすい。その結果、それはもともとからその形で、象徴化された経験すなわち抑圧された経験として存在していたと、事後的に理解されやすいのである。

⁵⁴ これは主体による経験のパースペクティブ性をもつ必然的な帰結の一つであると思われる。

こうした考え方をする点で、Stern は必ずしも孤立しているわけではない。第4章において、Stern の立場との類似点を論じた Gendlin にも、やはり Stern と似た考え方が認められる。例えば、池見 (2016) は、Gendlin の哲学の立場から、フォーカシングにおいて、フォーカサー (語り手) の話をリスナー (聞き手) が聞き入る状況で起きることを、追体験という観点から論じている。池見が強調するのは、語り手の体験が聞き手の追体験を通じた交差によって豊かなものになる時、そこでは新しい体験が生まれているということである。池見は、心理療法におけるクライアントの気づきの瞬間の語りには、「ずっと～だった」という形をとる特徴があることを指摘する。池見によれば、Gendlin はこのような過程を、体験が推進されることで過去が変わることと捉え、そのようにして変化した過去を、「推進された過去」(carried forward was) と呼んでいたと言う。こうした捉え方は、Stern の臨床ヴィネットについても理解にも、十分に適用され得るように思われる。

このように考えるならば、Stern の立場においては、エナクトメントは、未構成の経験が新しく構成されていくうえで必然的に生じる過程であると言えるだろう。そして、後でも述べるように、エナクトメントはけっして一人で解消することはできない。Stern が「解離の対人関係化」と定義しているように、それは必然的に対人関係における振る舞いとして現れる。つまり、それには必ず他者 (たとえ想像上のものであっても) が必要である。対人関係の中の振る舞いとして「今ここ」に現れているものに注意を向けて、それについて考えることができはじめて、エナクトされていたものが主体にとっての経験として構成されるのである。

このような考え方は、エナクトメントを、とりわけセラピストの側のエナクトメントを、基本的に心理療法にとって有害なものとし、可能な限り避けるべきだと考える、多くの伝統的な立場と好対照である (例えば、Steiner, 2006a, 2006b)。経験の構成モデルの立場では、心理療法に有害に働くとすれば、それはエナクトメントが生じることそのものではなくて、破壊的なエナクトメントに対処できないことによると考えられる。

第3節 「何が変わったのか？」

次いで、第二の問いの「何が変わったのか」について検討する。それまでけっして思い浮かばなかったある考えが思い浮かぶ、つまり、それまでけっして構成することができなかった経験が構成される、これは大きな変化である。その以前と以後とで、いったい何が違うのだろうか、何が変わったのだろうか。これまで検討してきた経験の構成モデルから

導かれる推論は、以前と以後とで対人関係の場が変化したのだという推論である。

私たちが構成する経験の可能性の幅は、私たちが経験を構成するコンテキストに制約される。そしてそのコンテキストとは、そのとき私たちが置かれている対人関係の場であるというのが、経験の構成モデルの基本的前提の一つである。私たちが経験を構成して、それを自覚にもたらすには、それを言葉にするよりほかない。言葉にするということは、一般に言葉を用いるということは、社会的な過程であり、私たちが誰とともに、誰に対してその言葉を発するのかという具体性と切り離しては考えることができない。

面接関係において、クライアントもセラピストも、自分の体験についてある一定の経験の構成しか行えず、他の経験の構成の可能性が思い浮かばないという状況は、その対人関係の場が、二人の当事者の経験の構成の可能性の幅を厳しく制約していることを意味していると推測される。つまり、その対人関係の場において可能な経験の構成は、二人の安心感と安全感を脅かさない範囲内に限定される。だからこそ構成可能なのである。そして、その可能性の外部は、二人のどちらにとっても、不安を誘発するものであるために、そこへ出て行くことができない。より正確に言えば、自分たちの経験の構成に、それ以外の可能性があることそれ自体に思いたらないのである。そこでは、二人は実際には狭い経験の可能性の中に閉じ込められているのであるが、二人にとってはそれこそが世界の全体になっているのである。考えるべき外部は存在しない状況なのである。

ただし、Stern のこの臨床ヴィネットにおいては、セラピストは、セラピストとしての専門性および臨床経験から、考えるべき「外部」があることを知的には理解していた。自分たちが「閉じ込められている」エナクトメントの状況にいることを知的には理解していた。しかし、それにもかかわらず、そのあるはずの考えるべき「外部」を、セラピストは実際には具体的に考えることができなかったのである。このことが私たちに伝えるのは、対人関係の場の制約は、私たちの思考の自由をも大幅に制限するものだということである。私たちは、個人的な意志の力、知的な思考の努力のみでは、この状況を乗り越えることは容易にはできないように思われる⁵⁵。

Stern の立場ならびに筆者が経験の構成モデルと名づける立場では、対人関係の場とそこにおける経験の構成を左右する大きな要因の一つは不安である。そして、Stern が論じるエナクトメント論においては、エナクトメントが生じている状況においてクライアント

⁵⁵ 経験の構成モデルの立場を取らない臨床家はこのような見解をとらないだろう。この状況はセラピストの専門家としての努力によって乗り越え可能であり、乗り越えられないのは、セラピストの逆転移の問題であり、それはつまり教育分析の不十分さ故であると考えられる。

とセラピストの不安を誘発するのは、「自分ではないもの」(Sullivan, 1953b) という自分のあり方である。それはそもそも自分のあり方として経験されたことのない自分であり(弱い解離の働き)、あるいは、自分のあり方として経験されたことがあっても、苦痛のあまりに防衛的に否認された自分のあり方である(強い解離の働き)。未知の自分のあり方にしても、受け入れ難く否定されるべき自分のあり方にしても、私たちはそれについて、自分のこととして考えることができないし、自分一人では、自分の経験として構成することができないのである。

このような状況を変える可能性があるのが、心理療法の営みに他ならない。心理療法において育まれる対人関係の場は、私たちの経験を大きく制約すると同時に、クライアントとセラピストそれぞれの個人的な意図と意志を越えて、私たちの経験の可能性の限界の辺境の方向へと、私たちを動かして連れて行くのである。

そのような状況の後に、セラピストにそれまではけっして思い浮かばなかったある考えが生じたということは、それ以前にその対人関係の場に変化が生じていたことが推定される。Stern (2010) は、心理療法の作用について論じる中で、メンタライゼーションの考え方(Fonagy ら, 2002; 上地, 2015) を参照して「内省が先か変化が先か」という問題を論じているが、経験の構成モデルから考えを進めていくなら、「変化の方が先」ということになる。あるいは、「変化と内省が同時」ということになる。それは、内省やセラピストの解釈による洞察がクライアントの変化をもたらすのだとする伝統的な心理療法の作用に関するモデルとは異なる考え方である。それでは、対人関係の場が変化したということ、心理療法の作用という文脈において、私たちはどのように理解することができるのだろうか。

第4節 「理由は何であるのか？」

こうして、私たちは第三の問いの「エナクトメントが解消した理由は何であるのか」という問いに導かれる。私たちは、エナクトメントが解消して新しい経験の構成が可能になったのは、対人関係の場の変化によるものだという考えをここまで見てきた。それでは、対人関係の場の変化をもたらすものは何なのだろうか。何が作用して、対人関係の場の変化が生じてエナクトメントが解消されるのだろうか。

Stern 自身の考察は、この問いに対する回答を保留しているように見える。あるいは、Stern の考察を突き詰めていけば、より正確には、「それは原理的にわからないものである」というのが、Stern の回答になると思われる。対人関係の場が経験の構成の可能性の幅を

制約し、その対人関係の場が変化することで新しい経験の構成が可能になる、この見方には一定の妥当性があると考えられる。しかし、なぜ、どのようにして、他ならぬそのときに、対人関係の場の変化が生じたのか、それについては確かなことを答えることは難しい。それが Stern の基本的な立場である。

これまでも繰り返し検討してきたように、そもそも対人関係の場は、二人の当事者によって、自覚的な意図と無自覚的な相互交流を通じて形成されるものと考えられるのであった。それは、クライアントとセラピストの間に生じる、それ自体自律的に働くシステムとして捉えることができるものである。それは、クライアントやセラピストから影響を受けるとともに、クライアントやセラピストに影響を及ぼす。しかし、そのシステムの大部分は、クライアントもセラピストも互いに無自覚なレベルの相互交流によるものだと想定される。したがって、対人関係の場というシステムを、意図的に動かすことはおそらくとても困難であろう。とはいえ、例えばドイツの社会学者 Niklas Luhmann の考え方を参照すれば (Kneer と Nassehi, 1993)、自律的に働くシステムも、クライアントとセラピストというシステムにとっての外部的な環境から常に影響を受け続けているのであるから、常にある程度の揺らぎを生じていると考えられる。そのような揺らぎを吸収して、それ自体を安定した状態に保つのが、システムの働きに他ならないと思われる。

しかし、複雑系科学の考え方によれば、小さな揺らぎも、それが拡大してゆけば、システム全体を変質させるほどの大きな変化に導くことがある (吉永, 1996)。小さな揺らぎとは、面接関係のシステムにおいては、クライアントあるいはセラピストに生じる、セッションごとの、あるいはセッション内の、ほんのちょっとした変化、かすかな違和感、いつもとのわずかな差異であろう。それが拡大するとは、どういうことなのだろうか。

それは、その小さな揺らぎに注目し、意識に上らせておくことだろう。Stern (2010) は、これを「気持ちの引っかかり」、「何かが引っかかる感じ」と呼んでいる⁵⁶。そして、そこから発展してもう少し形がはっきりしてきたものを「新しい認知」と呼んでいる。これらに対して敏感になり、意識に留め置く努力が、システムの変化、つまり対人関係の場の変化を生み、それが新しい経験の構成を可能にすることにつながる。これが、Stern の考えから帰結する回答であると、筆者には思われる。

私たちは、どうすればエナクトメントが生じていることに気づくことができるのだろうか。

⁵⁶ Stern の言う「引っかかる感じ」を、Gendlin が言う意味でのフェルトセンスとして理解することもできるように思われる。

エナクトメントが生じていることに気づけたとしても、それを解消する道筋をどうすれば見つけることができるのだろうか。私たちは、この問いに対するアルゴリズム的な解法を持ち合わせていない。私たちにできるのは、クライアントの語りに耳を澄まし、目を凝らし、それを味わい、嗅ぎ、触感として受け止め、それが私たちの心とからだにどのような反応をもたらしているのか、感覚を研ぎすまして感知すること、あるいは、感知できないまでも、それにしっかりと「ついていく」ことではないだろうか⁵⁷。面接状況において、少しでも自分がそのような状態でいられる機会が多くなるのが、私たちが実践を通して心理療法について学び、自らを訓練していくうえで、目指されるべきことではないだろうか (Tublin, 2011)。

比較的単純な因果的思考は、私たちにとって必ずしも困難なものではない。しかし、システムの振る舞いの解析となると、それが複雑であればあるほど、私たちの理解力の限界を越えている可能性が高い。面接関係におけるシステム、すなわち対人関係の場を解析する可能性があるとするならば、現時点では、それはディープラーニングを装備した人工知能技術ではないだろうか。しかし、私たち自身にとっても大部分無自覚でしかない相互交流を、果たして人工知能技術に扱いうる形式のデータとして記述することができるだろうか⁵⁸。ここには、私たち人間とはどのような存在かという、古くて新しい問題が横たわっているように、筆者には思われる。

⁵⁷ この点については、第4章でも論じた Gendlin のフェルトセンスやフェルトシフトといった考え方、そしてフォーカシング志向心理療法の実践が大いに参考になると思われる。

⁵⁸ 同様の問題が、統計的なエビデンスを重視する姿勢にも当てはまる。

終章 経験の構成モデルの可能性

本論文の最後となる本章においては、経験の構成モデルは今後の心理専門職と心理療法のアイデンティティにとってどのような意味を持ちうるのか、現代社会における経験一般のあり方に対してどのような意味を持ちうるのか、そして、心理療法家のアイデンティティにとってどのような意味を持ちうるのかについて、筆者なりの見通しを述べる。そうすることで、序章における問題提起に対して、経験の構成モデルがどのように答えることができるのかを示すこととする。そのうえで、本論文にまとめた筆者の研究の今後の課題について述べることで、本論文を締めくくる。

第1節 エビデンス重視の姿勢と経験の構成モデル

(1) エビデンス重視の姿勢の課題

序章において見たように、公認心理師の資格は、その制度設計の経緯からしても、エビデンスを重視する性格を強く有している。エビデンスの重視が意味するものは、エビデンスのある実践を重視する姿勢であろう。このとき、エビデンスのある実践とは、特定の問題に対する特定の支援法に対して言われるものであるだろう。つまり、特定の問題に対して、特定の 방법으로支援することが、偶然レベル以上の確率で一定の効果をもたらすということである。筆者の理解する範囲での、こうしたエビデンス重視の基本姿勢について、筆者が疑問に思うこと、問題にすべきであると思うことを、以下に指摘する。

エビデンス重視の姿勢においては、まず問題が特定されねばならないと思われる。身体医学をモデルにすれば、原理的には、正確な診断が下されなければ有効な処置を行うことができない。その場合、より精密な疾患モデルとより正確な診断技術の確立が要請されることになる。実際に現代医学はそのような方向で発展してきたと言えるだろう。一方でそのような発展は、「疾患を診て患者を診ない」という批判をも生んできた。このような先例にならうならば、「問題を見てクライアントを見ない」ということにつながるリスクを否定できないように思われる。そして、問題の同定からこぼれ落ちる部分についての対応が後回しになることも懸念される。データ化やモデル化に馴染まない、クライアントの個別性が、セラピストから見えにくくなっていくことを、筆者は恐れる者である。

また、エビデンスの重視は、必然的に一般化と普遍化への志向を強く含んでいる。問題の定式化が正確であり、適用される対応とその技法が適切であれば、一定の効果が期待さ

れるのであり、そこには、誰がアセスメントを行ったのか、誰が対応を実施したのかという個別的な要素は考慮されない。むしろ、そのような個別的な要因に左右されないことが、より高いエビデンスとされるだろう。このような姿勢は、心理療法の技術化を目指すものであり、そうした技術化の行き着く先は、人間の営みの AI 技術による代替であると筆者には思われる。その実現可能性に対して、筆者は強く懐疑的であり、たとえ実現したとしても、その効用は非常に限定的であろうと考える。第 11 章の最後にも述べたように、ここには「人間とはどういう存在か」「人間的であるとはどういうことであるか」という問いが深く関係してくるものと思われる。

エビデンスがあるとは、筆者の理解では、もたらされた結果が偶然に左右されたものではないことが確認されているということの意味している。逆に言えば、エビデンスがない、弱いとは、そうした効果が確認されていないということであって、無意味であるとか、無効であるとかを意味しないことに十分な注意を払う必要があると思われる。エビデンス重視の姿勢においては、事態が複雑で検証が困難である問題や、「効果」の発現に長期間を要する対応のあり方については、後回しになりやすいリスクがあることを十分に認識しておく必要がある。「エビデンス」というものの持つ意味を、その適用範囲と限界について、より深く正確に理解することが、言うまでもなく求められる。

(2) 経験の構成モデル

経験の構成モデルは、エビデンス重視の姿勢が重んじるいずれの点からも遠くに位置しているように思われる。経験の構成モデルは、問題の同定を目指すところからスタートするわけではない。問題の性質に応じた一定の対応の手順があるわけでもない。クライアントとセラピストの取り組みがどのような効果をもたらすかが見通されているわけでは必ずしもなく、むしろ何が生じるかが予測困難な、発見的な性格を強く含む営みである。そして何よりも、経験の構成モデルにおいては、セラピストが一人の個人として意図的および非意図的にクライアントに対してどのように振る舞うかが、避け難く面接過程を左右することが見込まれている。セラピスト個人の人格的要因を、そもそも原理的に排除することができないと考える立場である。

エビデンスを重視する姿勢と対比して経験の構成モデルの特徴をこのように説明することを試みると、少なくとも次の 3 つの疑問を投げかけられることが予想される。一つ目は、経験の構成モデルにおいてはアセスメントは不要なのかという疑問、二つ目は心理療法を

進めるにあたって目標を定めないのかという疑問、三つ目はセラピストには技法を身につける訓練は必要ないのかという疑問である⁵⁹。以下に、これらの疑問に対する回答を試みておきたい。

アセスメントはもちろん必要である。クライアントがどのような問題で困っていて苦しんでいるのか、それはどのように成り立ち、維持されているのか、そうしたことについてのアセスメントがなくては、当面の面接の方向性を定めることができない。しかし、それは暫定的な性格のものであり、選択すべき技法や手順を見定めて確定させることがアセスメントの主たる目的ではない。

目標も当然必要である。クライアントが何を望み、何を面接に期待しているのか、現状からどのような変化が生じることが望ましいことなのかといったことについて、クライアントとセラピストが話し合うことは不可欠である。しかし、目標を定めることは、その目標にたどり着くためのルートやステップを設計することが目的ではない。

技法を身につけること、そのための訓練をきちんと行うことは、決定的に重要である。ただし、「技法」についての考え方に、他のオリエンテーションとの違いがあると思われる。第7章の末尾においても Tublin (2011) を参照して述べたことであるが、経験の構成モデルにおける技法は、一定の介入技法とその手順から成るものであるよりも、セラピストの振る舞いの適否を判断評価するための理念の枠組みとそれを吟味検証していくための議論の積み重ねという観点から理解されるべきものであると思われる。したがって、当然のことながら、面接におけるセラピストの振る舞い方に独善性や恣意性は許されない。オリエンテーションを問わず心理臨床家および心理療法家として必要な、社会人としての常識的な振る舞い、心理専門職としてのコミュニケーションの技術、そして心理専門職としての高度な倫理観と倫理的な判断力、およびそうした判断を実行する力は、言うまでもなく、訓練を通じて身につけられねばならない。

筆者は経験の構成モデルを、対人関係精神分析をオリエンテーションとする Stern の臨床理論に立脚して論じてきた。しかし、この考え方は、すでに第4章でも論じたように、対人関係精神分析という一つのオリエンテーションにその有効な適用範囲が限定されるものではないと筆者は考える。そこで、以下に4つのオリエンテーションを取り上げて、経験の構成モデルとそれぞれのオリエンテーションとの接点について、簡潔に見通しを示し

⁵⁹ 筆者は実際に、Stern が 2013 年に来日したときに日本で開催されたセミナーの場で、フロアからまさにこれらの質問がなされる場面に遭遇した経験がある。以下の論述は、その時の Stern の回答を下敷きにして示している。

たい。

はじめに取り上げるのは、フォーカシング志向心理療法である。フォーカシング志向心理療法は、第4章で論じた Gendlin の考え方をベースとした心理療法である。そこでは、フォーカシングの手法を用いた体験課程の推進が目指されている。Gendlin の考え方と Stern の考え方には多くの共通点があることは、第4章で検討した通りである。立脚している観点と術語に違いはあるが、池見（2016）が前概念的なものの概念化の過程として指摘しているものは、経験の構成の過程とかなりの程度重なり合うものであると思われる。

次いで取り上げるのは、システム論的な考え方に基づく心理療法である。経験の構成モデルが立脚している二者心理学の考え方は、クライアントの直面している課題を家族システムに代表される対人間のシステムのあり方から生じていると捉えるシステム論の考え方との間に多くの共通点があると思われる。しかしながら、経験の構成モデルがクライアントとセラピストの関係に注意を払いながらも、心理療法の焦点はクライアントの経験のあり方の変化に置かれているのに対して、システム論的な考え方に基づいた心理療法は、クライアントが組み込まれているシステムそのものに変化を生じさせることに焦点を置き、その目的に沿ってさまざまな技法を駆使していく点で、これらのオリエンテーションの間には、心理療法の目標についての考え方と具体的な心理療法の進め方にはっきりとした違いがあると言える。しかし、双方のオリエンテーションによる心理療法の過程において生じていることには、見かけ上の相違の大きさにもかかわらず、その根底においては共通する原理を見てとることができる可能性があるのではないかというのが、筆者の見通しである。

三つ目に取り上げるのは、近年わが国でも積極的に紹介されているオープンダイアローグの取り組みである（Seikkula & Trimble, 2006; 斎藤, 2015）。Mikhail Bakhtin の「多声性」をめぐる思索（北岡, 1998）をベースとして、多数の関係者の間の異なる声による対話を通じて、経験の意味を新しく生み出していくという取り組みは、他者に立ち会われていくことではじめて経験は構成されていくと考える経験の構成モデルと、その根本の哲学の部分で共通するものがあると思われる。オープンダイアローグは狭い意味での心理療法としての取り組みとは言えないと思われるし、そのミーティングのセッティングのあり方も本論文で論じてきたようなタイプの心理療法の標準的な設定とは大きく異なるが、その場において生じている作用の本質に関しては、その共通性に今後注目していくべきであると筆者は考える。

最後に取り上げるのは、伝統的な精神分析の立場である。本論文全体を通じて論じてきたように、伝統的な精神分析の考え方と、経験の構成モデルの考え方には大きな違いがある。しかし、この二つの立場は、必ずしも相互排他的な立場ではないというのが、筆者の見通しである。クライアントとセラピストの間で、クライアントとセラピストそれぞれに生じることは、一者心理学に根ざした伝統的な精神分析と、二者心理学に根ざした経験の構成モデルの、どちらか一方のみの見方によっては、いずれによっても十全には理解し尽くすことはできないだろうと思われる。この両者の観点が、相互補完的に働くことが、精神分析的心理療法の実践がよりクライアントにとって有意義なものとなっていくうえで必要となってくるであろうというのが、筆者の見通しである。

総じて、心理療法の歴史は、個人内システムのあり方を焦点とする心理療法から、対人間システムのあり方を焦点とする心理療法へと、その焦点を移行させてきたと見ることができるというのが筆者の認識である。私たちの経験の構成のあり方が対人関係の場に、対人間システムのあり方に左右されているのであるとするなら、私たちが心理療法の実践のあり方について考えるうえでは、私たちの個人間の関係をより大きな文脈で規定している社会のあり方にも、やはり目を向けねばならないだろう。

第2節 現代社会における経験の危機と経験の構成モデル

序章においては、Reed (1996b) の議論を参照して、経験の危機について筆者なりの考えを素描したが、ここでは、ドイツの思想家 Walter Benjamin の考えを参照しながら、改めて別の観点からも経験の危機について考え、それに対して経験の構成モデルが持ちうる意義について見通しを示しておきたい。そうすることで、序章で示した見通しについて、筆者の考えを示す。以下、Benjamin の思索を取り上げるにあたっては、柿木 (2019) を参照する。

Benjamin は、1930 年代の戦間期に『パサーージュ論』として構想された一連の論考の中で、経験の問題を複数の論考において取り上げている。Benjamin の理解では、近代の社会では技術の発達に伴い、経験として言葉にすることができない体験が増大している。それまでの私たちの知覚のあり方の限界を超えるような情報の氾濫に身を晒し続けることで、人々はそうした情報をありきたりのやり方でやり過ごすことで身を守ることに忙殺されて、自分の体験から何事かを経験として物語るものが困難になり、一切の経験ができなくなっていく方向へ向かいつつあるというのが、Benjamin の同時代に対する批評であり診断で

あった（柿木, 2019）。

前世紀の前半、第二次世界大戦が始まる前の時期の社会を生きる中で書き留められた、このような Benjamin の見立ては、驚くほど現在の私たちを取り巻く状況にそのまま当てはめることができると、筆者には思われる。Reed の議論もそうであったが、技術の進展による私たちの知覚体験の拡張は、逆説的に、私たちの経験を窒息させ、私たちが生きる経験の領野を狭隘化させているように、筆者には思われる。

このような歴史的および社会的文脈の中に位置づけるとき、経験の構成モデルには、窒息させられ、破壊されつつある様に思われる経験に、その潜在的な可能性の息吹を取り戻すことを可能にする、ある意味ではとても野心的な考え方が含意されていると、筆者には思われる。日常的な経験の中では、無意味なもの、無価値なものとして見過ごされているもの、そもそもそこに何かがあると感知すらされていないもの、そうしたものに取り巻かれていることが、私たちの生きづらさを必要以上に増幅しているのかもしれない。そうした未構成のもの広大な領域に、心理療法という営みにおいて、クライアントとセラピストが分け入り、そこから新しい経験の可能性を見出していくこと、そこに経験の構成モデルに立脚する心理療法の本質的な価値があるのだと、とりわけ現代社会においてはそうした営みが必要とされているのだと、筆者は考える。

第3節 経験の構成モデルと心理療法家のアイデンティティ

このように経験の構成モデルを現代社会の文脈に位置づけるとき、経験の構成モデルに立脚する立場からは、心理療法家のアイデンティティについて、どのように考えることができるであろうか。

序章で述べたように、筆者には、現行の公認心理師制度の目指す専門家像は、Schön (1983) が述べているところの専門的技術者モデルに合致したものであるように思われる。これに対して、経験の構成モデルに立脚する心理療法家像は、反省的実践家モデルに近いものとして捉えることができるものであるように思われる。変化と流動化の激しい現代社会において心理臨床の専門家として役割を果たすうえでは、最先端の知見とエビデンスに基づいた実践は確かに不可欠であると思われるが、それだけでは決定的な不足があることを、私たちは深く認識することが極めて重要であると筆者は考える。

今現在私たちの目の前に起きていることは、決して単なる所与の事実ではない。先ほど取り上げた Benjamin も示唆するように、私たちが自らの体験を、その個別性と独自性を

大切にしながら、他者と共有可能な新しい経験として、その表現を練り上げていくことこそが、私たちが歴史、社会、文化の前に、それらを不動の所与として、ただその制約の中で生きるのではなく、新しい可能性を見出し、今あるのとは別の現実へとたどり着くために、必要とされることであると、筆者は思う。それを自由と呼ぶならば、「経験のための戦い」は、そのまま「自由のための戦い」へと繋がっている。

経験の構成モデルに立脚する心理療法家は、クライアントが十分に考える機会もないままに現実に応答することにも、恣意的に現実を都合よく切り取ることに、いずれにも与しないと筆者は考える。クライアントとセラピストの対人関係の場において経験が立ち上がる過程を繰り返す中で、私たちが生きている現実の制約と限界、そしてそれと同時に可能性を、深く掘り下げて認識する苦闘に踏み出そうとする姿勢を持ち続けることが、経験の構成モデルに立脚する心理療法家のアイデンティティであると思われる。そして、こうしたアイデンティティのあり方は、経験の構成モデルと接点を持つ他のオリエンテーションの心理療法家にも、広く共有されることが可能なものであると思われる。

第4節 今後の課題

終章である本章においては、経験の構成モデルが心理療法の実践において、現代社会の経験のあり方に対して、そして心理療法家のアイデンティティに関して、切り開きうる射程の可能性を、筆者の立場から展望してきた。しかし、これらの展望は、現状においてはまだ実現を見ない、潜在的な可能性に過ぎない。この可能性を実現にもたらし、さらに展開するためには、私たちは何のために心理療法に取り組み、何を指そうとしており、心理療法においてセラピストとして何を考えるべきなのか、クライアントとともにどのような取り組みをするべきなのかといった問題について、着実な心理療法の実践に基づいた膨大な対話を積み重ねていく必要があるだろう。それは、これまでも行われてきたことであるし、これからも行われ続けなければならないことである。

もちろんのことであるが、筆者自身もそうした実践と対話に、本論文で論じた経験の構成モデルという見方を携えて、積極的に加わりたい。そうした実践について語り合い、対話を成立させるための、心理療法家同士で共有可能なプラットフォームが、今後ますます求められることになると思われる。そうしたプラットフォームの一つとして機能できるように、経験の構成モデルを幅広い心理療法のオリエンテーションに適用可能な開かれたものとして練り上げていくことが、本論文の今後の課題である。

おわりに

心理療法は、すぐれて人間的な営みであると、筆者は思う。心理療法の本質的な作用を、経験を新しく構成することとして捉えることが本論文のテーマであるが、何にも増して、心理療法に取り組むことそのものが、クライアントにとってもセラピストにとっても、他では得難い豊かな経験となる可能性を秘めている。

私たちは、経験の豊かさを急速に失いつつあるのではないだろうか。経験は、今や単なる情報や記号に解体され、都合良く効率的に消費されるものに成り下がっているように思われる。

心理療法は、基本的に二人の人物が時間と空間を共にしながら、その空間内にあるものと言葉と暗黙の身振りの交流だけを頼りに進められる。そこでは、クライアントの経験が、行きつ戻りつしながら、ときには口ごもりながら、語られる。セラピストは、さまざまなことに思いを馳せながら、あるいは予期せず自分に湧いてくる言葉や感覚に驚きながら、クライアントの語りに聞き入る。ときには、繰り返し同じエピソードが、同じ場面が、微妙に、あるいは大いに、やり方が変化しながら語られる。私たちは、そうして、経験に向き合おうと努める。求められるのは、経験の新奇さではない。経験への向き合い方の新しさである。

情報や記号は際限なく消費できる。経験は消費できない。経験は、私たちが作り上げるものである。情報や記号は、複製して保存できる。経験は、複製も保存もできない。私たちが経験に対してできることは、それを繰り返し呼び起こし、語り直すことだけである。経験の語りを、文字に起こしたり、録音したり、録画したりすることはできる。しかし、経験はやはり保存できない。

自分なりのやり方で心理臨床を学び、実践し、取り組んできた筆者が今改めて思うのは、心理療法は、クライアントとセラピストの共同作業なのだということである。心理療法の価値と意味は、クライアントとセラピストが真摯に自分の経験に向き合おうとものがき、努める中で、何か本当に予期しない新しいものが生まれてくることに、自分の時間と労力を賭けることにあるのだと、筆者は思う。

文献

- 吾妻壮 (2009). 関係精神分析の成り立ちとその基本概念について. *精神分析研究*, **53**(2), 150-158.
- 吾妻壮 (2011). 関係性理論は心理療法の実践をいかに変えるか 古典的自我心理学と比較して. *心理臨床学研究*, **29**(5), 640-650.
- 新井紀子 (2018). AI vs. 教科書が読めない子どもたち. 東洋経済新報社.
- Aron, L. (1996). *A Meeting of Minds: Mutuality in Psychoanalysis*. The Analytic Press.
- Austin, J.L. (1962). *How to Do Things with Words*. Harvard University Press. 坂本百大 (訳) (1978). 言語と行為. 大修館書店.
- 馬場禮子 (1999). 精神分析的な心理療法の実践 クライアントと出会う前に. 岩崎学術出版社.
- Bateman, A. & Holmes, J. (1995). *Introduction to Psychoanalysis: Contemporary Theory and Practice*. Routledge. 館直彦 (監訳) 増尾徳行 (訳) (2010). 臨床家のための精神分析入門 今日の理論と実践. 岩崎学術出版社
- Benjamin, J. (1988). *The Bonds of Love: Psychoanalysis, Feminism, and the Problem of Domination*. Pantheon Books. 寺沢みづほ (訳) (1996). 愛の拘束. 青土社.
- Benjamin, J. (2017). *Beyond Doer and Done to: Recognition Theory, Intersubjectivity and the Third*. Routledge.
- Berger, P.L. & Lookmann, T. (1966). *The Social Construction of Reality*. Penguin University Books. 山口節郎 (訳) (2003). 現実の社会的構成 知識社会学論考. 新曜社.
- Bion, W. R. (1962). *Learning from Experience*. Heinemann. 福本修 (訳) (1999). 経験から学ぶこと 精神分析の方法 I. 法政大学出版局, 1-116.
- Bollas, C. (1987). *The Shadow of the Object: Psychoanalysis of the Unthought Known*. New York: Columbia University Press. 館直彦 (監訳) (2009). 対象の影 対象関係論の最前線. 岩崎学術出版社.
- Bonovitz, C. (2007). Whose who in the psychoanalytic situation: subject, object, and enactment in the relational and contemporary Kleinian traditions. *Psychoanalytic Dialogues*, **17**(3), 411-437.

- Boston Change Process Study Group (2010). *Change in Psychotherapy: A Unifying Paradigm*. Norton. 丸田俊彦 (訳) (2011). 解釈を越えて サイコセラピーにおける治療的变化プロセス. 岩崎学術出版社.
- Brenner, C. (1955). *An Elementary Textbook of Psychoanalysis*. International University Press. 山根常夫 (訳) (1980). 精神分析の理論. 誠信書房.
- Bromberg, P. (1998). *Standing in the Spaces: Essays on Clinical Process, Trauma, and Dissociation*. The Analytic Press.
- Brown, J. A. & Lane, R. C. (2000). Enactment, classical and relational perspectives: definition, conceptualization, usefulness, and role in the therapeutic process. *Journal of Psychotherapy in Independent Practice*, 1(4), 71-87.
- Buechler, S. (2004). *Clinical Values: Emotions That Guide Psychoanalytic Treatment*. Routledge. 川畑直人・鈴木健一 (監訳) (2009). 精神分析臨床を生きる 対人関係学派から見た価値の問題. 創元社.
- Casement, P. (2002). *Learning from Our Mistakes: Beyond Dogma in Psychoanalysis and Psychotherapy*. Guilford Press. 松木邦裕 (監訳) (2004). あやまちから学ぶ 精神分析と心理療法での教義を超えて. 岩崎学術出版社.
- Chused, J. F. (1991). The evocative power of enactment. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 39(3), 615-639.
- Chused, J. F. (2003). The role of enactments. *Psychoanalytic Dialogues*, 13(5), 677-687.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and Society*. W. W. Norton. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1, 仁科弥生 (訳) (1980) 幼児期と社会 2. みすず書房
- Feldman, M. (1997). The dynamics of reassurance. In R. Schafer (Ed.). *The Contemporary Kleinians of London*. International University Press, pp. 321-344. 福本修 (訳) (2004). 再保証の力動. 現代クライン派の展開. 誠信書房, 232-250.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E., & Traget, M. (2002). *Affect Regulation, Mentalization, and the Development of the Self*. Other Press.
- Freud, S. (1900). The Interpretation of dreams. *Standard Edition*, 4-5. Hogarth Press. 新宮一成 (訳) (2007). 夢解釈 I. フロイト全集 4 卷, 新宮一成 (訳) (2011). 夢解釈 II. フロイト全集 5 卷. 岩波書店
- Freud, S. (1914). Remembering, repeating and working-through (Further

- recommendations on the treatment of psycho-analysis, II). *Standard Edition, 12*. Hogarth Press. 道籙泰三 (訳) (2010). 想起, 反復, 反芻処理. フロイト全集 13 巻. 岩波書店, 295-306.
- Freud, S. (1915a). Repression. *Standard Edition, 14*. Hogarth Press. 新宮一茂 (訳) (2010). 抑圧. フロイト全集 14 巻. 岩波書店, 195-209.
- Freud, S. (1915b). Unconscious. *Standard Edition, 14*. Hogarth Press. 新宮一茂 (訳) (2010). 無意識. フロイト全集 14 巻. 岩波書店, 211-254.
- Fromm, E. (1941). *Escape from Freedom*. Farrar & Rinehart. 日高六郎 (訳) (1951). 自由からの逃走. 創元社
- Fromm, E. (1947). *Man for Himself: An Inquiry into the Psychology of Ethics*. Farrar & Rinehart. 谷口隆之助・早坂泰次郎 (訳) (1955). 人間における自由. 東京創元社.
- Fromm-Reichmann, F. (1950). *Principles of Intensive Psychotherapy*. The University of Chicago Press. 阪本健二 (訳) (1964). 積極的心理療法. 誠信書房.
- Fromm-Reichmann, F. (1959). *Psychoanalysis and Psychotherapy*. The University of Chicago Press. 早坂泰次郎 (訳) (1963). 人間関係の病理学. 誠信書房
- Gabbard, G. (1995). Countertransference: the emerging common ground. *International Journal of Psychoanalysis, 76*, 475-485.
- Gadamer, H.-G. (1960). *Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Mohr Siebeck. 饒田收 (訳) (1986). 真理と方法 1. 法政大学出版局, 饒田收・巻田悦郎 (訳) (2008). 真理と方法 2. 法政大学出版局, 饒田收・三浦國泰・巻田悦郎 (訳) (2012). 真理と方法 3. 法政大学出版局.
- Gendlin, E.T. (1962). *Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. Northwestern University Press. 筒井健雄 (訳) (1993). 体験過程と意味の創造. ぶっく東京.
- Gendlin, E.T. (1964). A theory of personality change. In P. Worchel & D. Byrne (Eds.), *Personality Change*. John Wiley & Sons. 100-148. 村瀬孝雄・池見陽 (訳) (1999). 人格変化の一理論. ユージン・ジェンドリン, 池見陽 (著) セラピープロセスの小さな一歩 フォーカシングから人間理解. 金剛出版, 165-231.
- Gendlin, E.T. (1973). Experiential psychotherapy. In R. Corsini (Ed.), *Current Psychotherapies*. Peacock, 317-352. 池見陽 (訳) (1999). 体験過程療法. ユージン・

- ジェンドリン, 池見陽 (著) セラピープロセスの小さな一歩 フォーカシングからの人間理解. 金剛出版, 75-138.
- Gendlin, E.T. (1995). Crossing and dipping: some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines*, 5(4), 547-560.
- Gendlin, E.T. (1996). *Focusing-oriented Psychotherapy: A Manual of the Experiential Method*. The Guilford Press. 村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子 (監訳) 日笠摩子・田村隆一・村里忠之・伊藤義美 (訳) (1998・1999). フォーカシング指向心理療法 (上) (下). 金剛出版.
- Gergen, K.J. (1997). *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*. Harvard University Press. 永田素彦・深尾誠 (訳) (2004). 社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる. ナカニシヤ出版.
- Gibson, J.J. (1966). *The Senses Considered as Perceptual Systems*. Houghton Mifflin. 佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之 (訳) (2011). 生態学的知覚システム 感性をとらえなおす. 東京大学出版会.
- Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity Press. 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 (訳) (2005). モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会. ハーベスト社.
- Gill, M.M. (1994). *Psychoanalysis in Transition: A Personal View*. The Analytic Press. 成田善弘 (監訳) 杉村共英・加藤洋子 (訳) (2008). 精神分析の変遷 私の見解. 金剛出版.
- Greenberg, J.R. & Mitchell, S.A. (1983). *Object Relations in Psychoanalytic Theory*. Harvard University Press. 横井公一 (監訳) (2001). 精神分析理論の展開 <欲動> から<関係>へ. ミネルヴァ書房.
- Greenson, R.R. (1967). *The Technique and Practice of Psychoanalysis*. International University Press.
- Hartmann, H. (1939). *Ego Psychology and the Problem of Adaptation*. Imago. 霜田静志・篠崎忠男 (訳) (1967). 自我の適応 字が心理学と適応の問題. 誠信書房
平野啓一郎 (2012). 私とは何か 「個人」から「分人」へ. 講談社.
- Hoffman, I.Z. (1983). The patient as interpreter of the analyst's experience.

- Contemporary Psychoanalysis*, **19**, 389-422.
- Hoffman, I.Z. (1998). *The Ritual and Spontaneity in the Psychoanalytic Process*. The Analytic Press. 岡野憲一郎・小林陵 (訳) (2017). 精神分析過程における儀式と自発性 弁証法的一構成主義の観点. 金剛出版.
- Holmes, J. (2011). Donnel Stern and relational psychoanalysis. *British Journal of Psychotherapy*, **27**(3), 305-315.
- 一丸藤太郎 (2010). “One Person Psychology”と “Two Person Psychology” –クライエントと心理療法家の関わりの観点から-. 神戸松蔭こころのケア・センター臨床心理学研究, 第5号, 2-9.
- 池見陽 (編著) (2016). 傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング 感じる・話す・聴くの基本. ナカニシヤ出版.
- Ikemi, A. (2017). The radical impact of experiencing on psychotherapy theory: an examination of two kinds of crossing. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, **16**, 159-172.
- Ivey, G. (2008). Enactment controversies: a critical review of current debates. *International Journal of Psychoanalysis*, **89**, 19-38.
- Jacobs, T. J. (1986). On countertransference enactments. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **34**, 289-307.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology*. Henry Holt and Company.
- 柿木伸之 (2019). ヴァルター・ベンヤミン 闇を歩く批評. 岩波書店
- 上地雄一郎 (2015). メンタライジング・アプローチ入門 愛着理論を生かす心理療法. 北大路書房.
- 河合隼雄 (1992). 心理療法序説. 岩波書店
- 北岡誠司 (1998). バフチン 対話とカーニヴァル. 講談社.
- Klein, M. (1946). Notes on some schizoid mechanisms. In *The Writings of Melanie Klein, Volume 3*. Hogarth Press, 1-24. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男 (訳) (1985). 分裂的機制についての覚書. メラニー・クライン著作集4 妄想的・分裂的世界. 誠信書房, 3-32.
- Kneer, G. & Nassehi, A. (1993). *Niklas Luhmanns Theorie Sozialer System*. Wilhelm Fink Verlag. 舘野受男・池田貞夫・野崎和義 (訳) (1995). ルーマン 社会システム理

- 論. 新泉社.
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self: A Systematic Approach to the Psychoanalytic Treatment of Narcissistic Personality Disorders*. International University Press. 水野信義・笠原嘉 (監訳) (1994). 自己の分析. みすず書房.
- Kohut, H. (1977). *The Restoration of the Self*. International University Press. 本城秀次・笠原嘉 (監訳) (1995). 自己の修復. みすず書房
- Kohut, H. (1984). *How Does Analysis Cure?* University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒. みすず書房.
- 國分功一郎 (2013). ドゥルーズの哲学原理. 岩波書店.
- 國分功一郎 (2019). 原子力時代の哲学. 晶文社.
- 小松貴弘 (2014). 関係精神分析におけるエナクトメント概念 –Stern, D.B.のエナクトメント論を中心に–. 心理臨床学研究, **31**(6), 1016-1025.
- 小松貴弘 (2016). 経験を育むということ. 角田豊・片山紀子・小松貴弘 (著). 子どもを育む学校臨床力 多様性の時代の生徒指導・教育相談・特別支援. 創元社, 14-17.
- 小松貴弘 (2018a). クライエントの語りを読むことの意義に関する理論的研究. 心理臨床学研究, **36**(1), 36-46.
- 小松貴弘 (2018b). ドンネル・スターン. 精神療法増刊第5号 精神分析の未来を考える. 金剛出版, 118-119.
- 小松貴弘 (2020). セラピー作用の捉え方の一つとしての経験の構成. 人間性心理学研究, **37**(2), 145-156.
- 小松貴弘・渡辺亘・中村博文 (2019). 時間のかかる営みを、時間をかけて学ぶための心理療法入門. 創元社.
- 小西友七・南出康世 (編集主幹) (2001). ジーニアス英和大辞典. 大修館書店.
- 河野哲也 (2006). 「心」はからだの外にある 「エコロジカルな私」の哲学. NHK 出版.
- 河野哲也 (2011). エコロジカル・セルフ. ナカニシヤ出版
- 河野哲也 (2019). 人は語り続けているとき、考えていない 対話と思考の哲学. 岩波書店.
- Levenson, E. (2006). Response to John Steiner. *International Journal of Psychoanalysis*, **87**, 321-324.
- Lionells, M., Fiscalini, J., Mann, C.H. & Stern, D.B. (1995). Introduction to

- Interpersonal Psychoanalysis. In M. Lionells, J. Fiscalini, C.H. Mann, & D.B. Stern (Eds.) *Handbook of Interpersonal Psychoanalysis*. The Analytic Press, 3-9
- 増井武士 (2019). 来談者のための治療的面接とは 心理臨床の「質」と公認資格を考える. 遠見書房.
- 松木邦裕 (2015). 耳の傾け方 ころの臨床家を目指す人たちへ. 岩崎学術出版社.
- McLaughlin, J. T. (1991). Clinical and theoretical aspects of enactment. *Psychoanalytic Quarterly*, **39**(3), 595-614.
- McLeod, J. (1997). *Narrative and Psychotherapy*. Sage Publications. 下山晴彦 (監訳) 野村晴夫 (訳) (2007). 物語としての心理療法 ナラティブ・セラピイの魅力. 誠信書房.
- Menninger, K. (1959). *Theory of Psychoanalytic Technique*. Basic Books. 小此木啓吾・岩崎徹也 (訳) (1969). 精神分析技法論. 岩崎学術出版社.
- 三村尚彦 (2011). そこにあって、そこにはないもの —ジェンドリンが提唱する新しい現象学—. *フッサール研究*, **9**, 15-27.
- Minuchin, S. (1974). *Families and Family Therapy*. Harvard University Press. 山根常男 (監訳) (1984). 家族と家族療法. 誠信書房.
- Mitchell, S.A. (1988). *Relational Concepts in Psychoanalysis*. Harvard University Press. 鐘幹八郎 (監訳) 横井公一 (訳) (1998). 精神分析と関係概念. ミネルヴァ書房.
- Mitchell, S.A. (1993). *Hope and Dread in Psychoanalysis*. Basic Books. 横井公一・辻河昌登 (監訳) (2008). 関係精神分析の視座 分析過程における希望と恐れ. ミネルヴァ書房.
- Modell, A.H. (2005). Emotional memory, metaphor, and meaning. *Psychoanalytic Inquiry*, **25**(4), 555-568.
- 中村雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か 岩波書店.
- 仲谷正史・笈康明・三原聡一郎・南澤孝太 (2016). 触楽入門 はじめて世界に触れるときのように. 朝日出版社.
- 野矢茂樹 (2016). 心という難問 空間・身体・意味. 講談社.
- Ogden, T.H. (1977). *Projective Identification and Psychotherapeutic Technique*. Jason Aronson.
- Ogden, T.H. (2004). The analytic third: Implications for psychoanalytic theory and

- technique. *Psychoanalytic Quarterly*, **73**, 167-195.
- 岡野憲一郎 (2003). クライン学派と米国の精神分析 ―何が共通し、何が異なるのか?―
一. 精神分析研究, **47**(4), 403-410.
- 岡野憲一郎 (2011). 関係精神分析の展望. 岡野憲一郎・吾妻壮・富樫公一・横井公一 (著).
関係精神分析入門 治療体験のリアリティを求めて. 岩崎学術出版社, 2-19.
- 岡野憲一郎・吾妻壮・富樫公一・横井公一 (2011). 関係精神分析入門 治療体験のリアリティを求めて. 岩崎学術出版社.
- 大森荘蔵 (1981). 流れとよどみ 哲学断章. 産業図書.
- 大澤真幸 (2008). 不可能性の時代. 岩波書店.
- 大矢泰士 (2009). 逆転移とエナクトメント 米国を中心とする議論から. 東京国際大学
臨床心理学研究, **7**, 17-29.
- Perry, H.S. (1982). *Psychiatrist of America: The Life of Harry Stuck Sullivan*. Belknap Press. 中井久夫・今川正樹 (訳) (1985). サリヴァンの生涯 1・2. みすず書房.
- Reed, E.S. (1996a). *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press. 細田直哉 (訳) (2000). アフォーダンスの心理学 生態心理学への道. 新曜社.
- Reed, E.S. (1996b). *The Necessity of Experience*. Yale University Press. 菅野盾樹 (訳) (2010). 経験のための戦い 情報の生態学から社会哲学へ. 新曜社.
- Rogers, C.R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103. 伊東博 (訳) (2001). セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件. カーシェンバウム H.・ヘンダーソン V.L. (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集 カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文 (上). 誠信書房, 265-286.
- 斎藤環 (2015). オープンダイアログとは何か. 医学書院
- Sandler, J., Dare, C., Holder, A. & Dreher, A. U. (1992). *The Patient and the Analyst: The Basis of the Psychoanalytic Process*. International University Press. 藤山直樹・北山修 (訳) (2008). 患者と分析者 [第2版] ―精神分析の基礎知識. 誠信書房.
- 佐々木正人 (2008). アフォーダンス入門 知性はどこに生まれるか. 講談社.
- Schön, D.A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books. 柳沢昌一・三輪建二 (監訳) (2007). 省察的实践とは何か プロフェッ

- シヨナルの行為と思考. 鳳書房.
- Sedlak, V. (2009). Discussion. *International Journal of Psychoanalysis*, **90**, 451-455.
- Seikkula, J. & Trimble, D. (2006). Healing elements of therapeutic conversation: Dialogue as an embodiment of love. *Family Process*, **44**(4), 461-475. 斎藤環 (訳) (2015). 治療的な会話においては、何が癒す要素となるのだろうか 愛を体現するものとしての対話, 斎藤環 (著訳) オープンダイアログとは何か. 医学書院, 149-181.
- 柴山雅俊 (2007). 解離性障害 「うしろに誰かいる」の精神病理. 筑摩書房.
- Steiner, J. (2006a). Interpretative enactments and the analytic setting. *International Journal of Psychoanalysis*, **87**, 315-320.
- Steiner, J. (2006b). Reply to Dr Levenson. *International Journal of Psychoanalysis*, **87**, 325-328.
- Stern, D.B. (1983). Unformulated experience: From familiar chaos to creative disorder. *Contemporary Psychoanalysis*, **19**, 71-99
- Stern, D.B. (1997). *Unformulated Experience: From Dissociation to Imagination in Psychoanalysis*. The Analytic Press. 一丸藤太郎・小松貴弘 (監訳) (2003). 精神分析における未構成の経験 解離から想像力へ. 誠信書房.
- Stern, D.B. (2010). *Partners in Thought: Working with Unformulated Experience, Dissociation, and Enactment*. Routledge. 一丸藤太郎 (監訳) 小松貴弘 (訳) (2014). 精神分析における解離とエナクトメント 対人関係精神分析の核心. 創元社.
- Stern, D.B. (2015). *Relational Freedom: Emergent Properties of the Interpersonal Field*. Routledge.
- Stern, D.B. (2017a). Introduction. Interpersonal Psychoanalysis: History and Current Status. In D.B. Stern & I. Hirsch (Eds.) *The Interpersonal Perspective in Psychoanalysis, 1960s – 1990s: Rethinking Transference and Countertransference*. Routledge, 1-28.
- Stern, D.B. (2017b). Unformulated experience, dissociation, and *Nachträglichkeit*. *Journal of Analytical Psychology*, **62**, 501-525.
- Stern, D.B. (2019). *The Infinity of the Unsaid: Unformulated Experience, Language, and the Nonverbal*. Routledge.

- Sullivan, H.S. (1953a). *Conceptions of Modern Psychiatry*. Norton. 中井久夫・山口隆
(訳) (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房.
- Sullivan, H. S. (1953b). *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. Norton. 中井久夫・宮
崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎 (訳) (1990). 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- Sullivan, H.S. (1954). *The Psychiatric Interview*. Norton. 中井久夫・秋山剛・野口昌
也・松川周悟・宮崎隆吉・山口直彦 (訳) (1986). 精神医学的面接. みすず書房.
- 鑪幹八郎 (2014). 精神分析の中の隠れ対人関係論者 エリクソン. 比治山大学心理相談
センター紀要, 10号, 3-14.
- 鑪幹八郎 (2019). 対人関係精神分析の歴史的意義と臨床的接近について. 川畑直人 (監
修) 京都精神分析心理療法研究所 (編集). 対人関係精神分析の心理臨床: わが国にお
ける訓練と実践の軌跡. 誠信書房, 2-20.
- Thompson, C.M. (1950). *Psychoanalysis: Evolution and Development*. Herrmitage. 懸
田克躬 (訳) (1957). 精神分析の発達. 角川書店.
- Thompson, C.M. (1964). *Interpersonal Psychoanalysis*. Basic Books. 大羽葵・沢田丞
司 (訳) (1972). 人間関係の精神分析. 誠信書房.
- Tublin, S. (2011). Discipline and freedom in relational technique. *Contemporary
Psychoanalysis*, 47(4), 519-546.
- Wachtel, P. (2008). *Relational Theory and the Practice of Psychotherapy*. New York:
Guilford Press.
- Wachtel, P. (2011). *Inside the Session: What Really Happens in Psychotherapy*.
Washington, D.C.: American Psychological Association. 杉原保史 (監訳) 杉原保史・
小林真理子 (訳) (2016). ポール・ワクテルの心理療法講義 心理療法においては実際
に何が起きているのか? 金剛出版.
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophische Untersuchungen*. 藤本隆志 (訳) (1976). 哲
学探究. 大修館書店.
- 横井公一 (2011). 関係精神分析の感性の起源 対象概念の復権という視点から. 岡野憲一
郎・吾妻壮・富樫公一・横井公一 (著). 関係精神分析入門 治療体験のリアリティを求
めて. 岩崎学術出版社, 34-52.
- 吉永良正 (1996). 「複雑系」とは何か. 講談社.

謝辞

本論文を博士学位請求論文として作成するにあたって、ご指導をくださった関西大学大学院心理学研究科教授の池見陽先生に心より感謝申し上げます。後に述べますお二人の先生からご紹介をいただいたとはいえ、池見先生はそれまで一面識もなかった筆者に会ってくださり、相談に乗ってくださったうえ、学位申請までの具体的な方策をお示しくくださり、筆者を励ましてくださいました。

ももやま心理相談室主宰の一丸藤太郎先生からは、当時一丸先生が助教授として在職されていた広島大学大学院教育学研究科に筆者が1990年に入学して以来、30年間にわたって、研究、臨床、その他あらゆる面において、ご指導をいただけてきました。Stern先生の著作と出会い、その翻訳を行うことができたのも、一丸先生のお導きによるものです。本論文で述べた筆者の考えの多くは、さまざまな機会に繰り返してきた一丸先生との対話から生まれてきたものです。一丸先生は、私の臨床と研究における経験の構成の、最も大切な立ち会い人として、筆者を見守ってくださいました。また、筆者からの相談を受けてくださり、池見先生に筆者をご紹介くださる労を執ってくださいました。言葉に尽くすことは到底できませんが、心より感謝申し上げます。

広島カウンセリングスクール理事長の鑪幹八郎先生には、当時鑪先生が教授として在職されていた広島大学大学院教育学研究科で、筆者が博士課程前期と博士課程後期に在籍していた6年間、さらにその後、心理教育相談室に非常勤スタッフとして在籍していた2年間、合わせて8年間ご指導をいただきました。筆者の力が足りず、課程博士の取得には至りませんでした。博士課程後期に進学した直後の個別面談の場で、「あなたの研究テーマは30年かかると思う」とおっしゃられた通り、たいへん長い時間がかかりましたが、ここにたどり着きました。改めて感謝申し上げます。

京都教育大学教育学部教授の内田利広先生は、池見先生に筆者を紹介する労を執ってくださいましたもうお一人の先生です。内田先生には、筆者の京都教育大学在職時に、たいへんお世話になりました。筆者が仕事に困ったときには、いつも快く相談に乗ってくださって、時に折れそうになる気持ちを支えていただきました。ありがとうございました。

メイヘン心理相談室の倉永恭子先生には、筆者が広島で学び始め、訓練を受け始めたときに、心理臨床家として目指すべき本質について、多くのことを教えていただきました。

倉永先生から学んだことは、それとしてはっきりと言葉にはなっていないかもしれませんが、本論文の至る所に染み渡っているはずです。心より感謝申し上げます。

天理大学人間学部教授の菅野信夫先生は、筆者が京都大学文学部で哲学を学んでいた学部生の頃にお世話になり、その後筆者が心理臨床の道を志して広島大学大学院へ進学する選択をしたことに、決定的な影響を及ぼした存在です。そもそも菅野先生と出会わなかったら、この論文が書かれることはありえませんでした。ありがとうございました。

神戸松蔭女子学院大学人間科学部准教授の中村博文先生と大分大学福祉健康科学部教授の渡辺亘先生とは、互いに大学院生の頃から多くの議論を重ねて、常に刺激を受けてきました。仕事のうえでも、不思議な縁で、それぞれ現在の同僚、かつての同僚として、助けてもらってきました。本当にありがとう。

関西大学の池見先生の博士課程のゼミのみなさんにも、たいへんお世話になりました。突然ゼミに参加し始めた筆者を温かく受け止めてくださり、Gendlin とフォーカシングについて、筆者からの質問に快く答えてくださいました。ありがとうございました。

Donnel B. Stern 先生は、本論文にとって、そして私個人にとって、特別な存在です。筆者が Stern 先生に出会ったのは、広島精神分析研究所の主催で 1996 年にホワイト研究所で実施されたセミナーの機会でした。そのセミナーの素晴らしい講師陣の中でも、Stern 先生についての印象は、私の中では飛び抜けて鮮烈でした。それ以来、Stern 先生の著作の翻訳を通じて、私の中では、一方的ではありますが、Stern 先生の臨床的思索との対話を長年積み重ねてきました。その経験が、私の臨床と研究の支えであり続けています。

なお、本論文の一部の章は、本文内の脚注でも明記した通り、既出の拙著論文に加筆修正を施したものです。第 4 章の基になった論文は、「人間性心理学研究」誌の第 37 巻第 2 号に掲載された「セラピー作用の捉え方の一つとしての経験の構成」、第 7 章の基になった論文は、「心理臨床学研究」誌の第 36 巻第 1 号に掲載された「クライアントの語りを聞くことの意義に関する理論的研究」、第 9 章の基になった論文は、「心理臨床学研究」誌の第 31 巻第 6 号に掲載された「関係精神分析におけるエナクトメント概念 –Stern, D.B.のエナクトメント論を中心に–」です。それぞれの論文について転載を許可していただいた人間性心理学研究編集委員会と心理臨床学研究編集員会に感謝申し上げます。

最後に、ここにお名前をあげることはできませんが、共に心理療法に取り組んでくださったみなさんに、感謝の気持ちを記したいと思います。ありがとうございました。